

# 東京立正女子短期大学紀要

## 第 16 号

### 目 次

宗教的個性の形成の課題 .....	石 川 教 統 ( 1 )
宮沢賢治の童話における <small>しゅら</small> 修羅の <small>しゃん</small> 捨身 .....	石 川 教 張 ( 20 )
《翻 訳》	
マオリ女性のタウマウ婚 .....	桜 井 真理子 ( 49 )
《史料報告》	
江戸時代後期の民衆信仰史料 .....	紙 谷 威 廣 ( 92 )
<small>おざくさんぶんせいそうろん</small> — 石裂山文政争論 —	
《編集後記》.....	( 138 )

1 9 8 8

東京立正女子短期大学

# 宗教的個性の形成の課題

学長 石川 教 統

## 序

人間が主体性を持つて生きるには自由がなければならぬ。しかし、この自由は自己以外の者にも本有ほんぬの佛性ぶつしょうがあり、成佛の可能性を具有した現存在であることを即示に許容し得るか否かにかかっている。慈悲・愛というが、私共は自己の立場、利害関係等の諸条件との関係においてこれを説く場合が多い。しかしこれでは真にその人が自由であり、主体性を持った個人であることは言えない。

宗教が個人の主体性確立にどのように作用し、その人を確立してゆくのか、宗教的に生きるとか、宗教的に生きようということが、何に基づいて、そうなるのか、此の問題を以下に追求して見たい。

(一)

人間は行動的動物である。行動には判断が先行する。だが人間の判断には本質的に限界がある。そこに迷いが生ずる。迷いとは、自由に自己の行動を規制し得ない状態を言うのであり、此の限定された判断は先入観その他の条件により、主体的自由のない判断となる。

主体的人間の絶対の条件は、正確な判断力とそれに基づく行動である。

宗教者は明確な判断力の所有者でなければならぬ。日蓮が主張した立正安国の行動は立正という主体的行動がなければ安国という社会の実現は不可能であるとの判断に基くものであり、これは妥当な行動的判断であつたと言える。

公正な判断をなし得るか否か、そこに宗教的主体性確立のあしがりがある。

人間は本来的に不安定な存在であつて、常に不確実性の中で生きていながら確実性を求めてやまない。確実性を得るためには実相の把握がなければならぬ。しかしわれわれはこの諸法の実相を乃能究盡たのむくじんすることは困難である。判断のつきかねる状態を経験しなければならぬ。それは精神の自由が無いことに起因する。佛教的表現をかりれば我執である。

無為むゐとか無相むさうという仏教的表現があるが、人は自己判断する場合、自己の観点のみによって行ふ。無我になるとは自己を無限に拡大することであり、自己の無限の拡大は相手をも含む所の理解に自己を変革してゆくことである。佛教では無為という境地の存在を強調するが、これは何も為さないといいことではなく、執着のない行動のことであり、

この無執着的判断に基づく行動判断の結果にすら執着しないということである。しかし一挙にこの境地への到達は不可能であり、こゝに修行が要求される。この場合の修行とは誤謬のくりかえしとその消却である。この謬りの撤廃は困難なことであるが、そこには平凡な訂正という修行が要請され、自己放棄という佛道修行に一番重要な事柄への挑戦がある。その挑戦者は上求菩提下化象生の実践者である菩薩の人間像である。

## (一)

菩薩、これは仏教が生んだすぐれた人格的行動をする生きた実践者であり、仏教精神の具体的存在を意味する。菩薩は安住の境地にありながら、それを捨てて迷界に没在せる衆生を求めて無限の漂泊を繰り返す人格である。煩惱具足の凡夫は煩惱を断じ得ない存在であるから、菩薩はこの煩惱の広海の中を漂いつつ、煩惱の実相を凝視する。この無限で解決のない世界を漂泊する菩薩は、解決を求むる者の行動を一時的な仮りの行動と限定する。それは解決したと思うと又次の矛盾に、またその解決に迫られる。菩薩は、この果しなき不安と動揺を静かに自己の問題として荒海を漂泊する。そのエネルギーが大乗的の仏教精神である。

ではなぜ矛盾は永久に解決しないのか。それは固執して物事を考える悲しい性さがに由来する。こゝに自己形成の必要性がある。自己形成の本質はそのものが常に真理の探求者であることである。だが私共は余りに多く、悪しく求めすぎている。それは真理をゆがめ、自己をゆがめる。これからの脱却には人は何回か生まれかわらなければならぬ。

生まれたままに生きていることは成長しないことであるが、こゝで生まれかわるとは過去をすて去ること、過去を再生の

ステップとすることではなければならぬ。過去をすて去ることの難しさは自由人としての自我の誕生の難しさである。他動的規定の生活から自己が主役を勤めて、ものごとを決定する自己決定権の行使の時を迎えることの難しさである。人は過去において形成された個性的生き方に固執するが、その生き方に変化を求め、新しく生きる目的の探索とそれを求めての行動を開始することが再生ということである。宗教詩人ブラウングは「人生に初めあるは終りのためなり」と詩っているが、始終は一体であり、若き時と老いの時は非連続の連続であり、若き時の思想行動と人生観が老年の再生を決定づける。

(三)

維摩經の中に、一切衆生の病めるを以て、是の故に我も病む

涅槃經に一切衆生が異の苦を受くるのは悉く是れ如来一人の苦なり

妙法蓮華經に我れ一人のみよく救護をなす、とある。

生きとし生けるものを対象とせよという一切衆生の語はユニークで、力強さを感じさせる。宗教でも教育でも、究極の所、いかに人を愛するか、それにつきる。人間の平等性に根差したこの言葉は、上下被支の二つの階層しか経験してこなかった人々に、人間の再発見を促進する動機となった。<sup>(2)</sup>この佛教的表現は一種の革命的な概念であり、釈迦自身王侯の支配階級に所属しながら、それを否定した。仏教を一言で定義づけるとすれば、一切衆生に愛を注ぐ宗教といえる。教育にあつても、法華經の悉是吾子に基く実践でなければならぬ。悉くこれわが子の考え方は、一切衆生

病めるを以て、是の故にわれも亦病むの維摩經の考え方に通じる。

教育は教えることの中に育てることが含まれねばならぬ。教育といいながら教師は能力主義に陥り、被教育者のみに重荷を背負わせる。重き荷は両者で荷わなければならぬ。ここに一切衆生の異の苦を受くる者は悉くこれ如来一人の苦なりの言葉が生きてこなければならぬ。

梵網經の中に菩薩の守るべき戒が説かれていたが、その中に、十しやうじふんつがい怖勝順劣戒がある。教育者はこの戒を守らなければならぬ。これは幾多の苦行に耐えなければ、高い教えを学ぶことができない、この努力を恐れる者は低俗の教えに向う、多難な努力を傾注することを恐れること、そのものが一種の罪を犯すことを戒めたものと見るべきである。優れた能力は高い教えを学ぶことよって触発される訳で、低俗に甘んずる行為は佛性を隠し、道を求むる道心を害することであるというのである。自身難行苦行し、他を救済する力をつけ佛と同等の行動が出来ることを理想としなければならぬ。ではなぜこのような理想を持つべく努力しなければならぬのか。人は誰でも自分の意志によって生まれたものではない。だが生まれた以上、今度は自己の意志で生き、そして死ぬまで生きつづけねばならぬ。人は或る時期迄は無目的に生きるが、やがて生きることについて思索する。吾人が何か障害を経験する時、それが思慮と適応性に欠けていたのではないかと反省する。この二つは人間の生存に欠くことの出来ない条件である。目的の達成を企図し、充実感のある生き方を志楽した時、適応性とは思慮とが必要であるが、適応というと現状に順応して充足感を求めることのように思うが思慮と共同することによって、逆境にあつても、いつも新事実に、新事態に挑戦する姿勢を持ち続けることが出来る。

自分の在り方を問題にする時、一般的には精神と肉体の二元論に立ち、魂と心が肉体の誕生と共に現存し、死する

とこの魂・心が肉体を離脱する。身体Ⅱからだとは、からになった、ぬけがらになったからだという意味であるという時、精神・魂の抜け去ったものとする二元論が古くより存在していると思われる。

しかし人は生きている限り他との直接間接の関わりあいの中で感じ、考え、思い、行動する。然し具体的な生き方とは諸種の経験の総体の中で生きることである。だが、具体的な出来事そのまま直ちにその人の生き方の全体性に結びついて体験になるのではない。その人の本当の体験となるのは、その人が自分の身体を張り、幾多の苦行を媒介とした時に本当の体験となる。佛道修行において、諸種の教義信条があるが、宗教的に生きるとは一体どんな生き方なのか、宗教的に生きるとは本来何に基いて生きることなのか、それを考察してみよう。

#### 四

釈迦を根本教主とする佛教は自然宗教が統一的な教義を持たないのに対し、第一に人格的であり、その人格より発せられた教義、信条を中心として結成された教団組織を持つ。教が他に対して能動的に活用、作用するのには教主の出された教義信条が各自に理解されると同時に教団組織によって、その教義が権威的に保証され永続性を保つ。権威的な教義の保証は独断的傾向を持つ教義学が底流として存在することは避けられない。

日蓮にあっても五綱三秘ごこうさんひのごとく固有の意味における教義学が存在する。日蓮の教義学は日蓮独自の一念三千論解積もあるが、その独自性は伝統的教義学をふまえて、その発展としての教義学であり、日蓮程正当な佛教伝統をふまえて自説を展開した教主はいない。法華経を所依の教典とする日蓮にあつては原典批判の未熟時代を反映して、凡て

を佛説として受容したのだが、これは特に日蓮に限ったことではなく、日蓮の教義的展開の源泉であった中国の天台もそうであった。おびただしき教典は無作意に存在するのではなく、一つの意図を以て説かれたものとした。佛教研究の進んだ今は老大な教典が一釈迦によって説かれたとする説は否定され、且つ教典それぞれが内包する個々の存在価値を否定しないで、經典全部を横に配列して、統一的目標のための教典とした。

釈迦の説法を時間的経過にあわせた配列を化儀けぎの四教、化法けぽうの四教というのであるが、その教典の中で妙法蓮華經は巧みな譬喩を持った教典である。この化儀法をば第四章の信解品で実に美事に教導的に説示し、華嚴、阿含、方等、般若、法華、涅槃等の諸經典を横に配列するが、教主自身の直接説示でないとすれば、こうした配列は牽強附会の教相論と価値判断される。しかし一步を譲って、佛教においてどこまで釈迦の直接の言説に迫ることができるのか、若しこれが不可能であるとすれば、諸經典の中でどれが一体釈迦の直接の言説であるか、現段階では不可能視されているが、方法が皆無というのではない。釈迦の説示がどんなものであったのか、その説いた通りを溯源揆別するのか。この観点から、天台は諸言説を經典を通して一つの目的のもとに全体の諸經典が成立したとしての解釈学的方法を採用したのである。

教主の教は現存教典を媒介としてでなくては明確化は不可能である。どんなに史的研究を精緻にしても、佛教の史の変遷の経過が明らかにし得たとしても、佛教それ自体の根源をさぐり出すことはできない、それは前述の如く、經典それ自体が教主の直接を伝えていないからであるが、後世の人たちは此の教説を受けつぎ、その人なりの受容の仕方をつづけてきて今日に至っているのである。

釈迦じゆたは自帰依じこゑい 自燈明じとみやうを遺言いごんとしたと伝えられているが、自帰依は行者の自己と釈迦とは人間として一脈相通する

ものが存在するから、釈迦の求道修行の結果の自己完成の道は特別な事ではなく弟子等も修行によって到達し得る道であるという激励の言葉であったと解釈出来ると思う。法をよりどころと云っても、具体的にどんな法なのか、釈迦の直弟子等は肉声を聞き悟りの内容を得たと思われるが、教法を聞いたから得られるというものでもない。自帰依と言っているのはそれから永遠の未来に向かって教法がそれからそれへと継承され行くが、その過程において教法そのものは固定せず、これこれと指示は出来ないが、修行者自らが釈迦をモデルとして求道しつづけ、釈迦の教説の真意はこゝにあると体験し且つ体現してゆくものであることを示していると思う。

このことは釈迦の遺言が、悟りというものは他人の悟りでは全く意味のないものであるから自己の悟りを実現するには遺言をば単なる残された言葉というのではなく、遺言と遺言を残された者が対決して自己の課題を解決し、自己追求すべきことを提案したものである。こう認識する所に意義があると思うし、釈迦悟入の世界は吾人の求めてやまぬものであるが、釈迦は自己の生涯の求道の行動を通して、自分ばかりして悟り得たのだと、行動で示し、各自にこの示されたモデルを自己のモデルとして対決することを迫ったのである。ということは悟りの内容は、文献的に残せるものではなくて、釈迦なら釈迦が問題として取りくんだ課題の内面的解決の事実であって、こうした悟證的内面の事実は文字でいくら理解しようとしても到達し得ないということである。

日蓮が多くの法難を体験することによって特殊な宗教的個性を形成して行ったが、それは日蓮自身、身を以て宗教的課題と対決することを媒介として形成されて行ったもので、この事は日蓮自身がかくの如くにして苦掟を得たのであると一つの課題として後に来る者に説き示したと言える。

日蓮の所説は、法華經を所依の教典として展開されている。日蓮は、教法の歴史的推移で多くの教典が産出されたが、一代の佛教綱格を案ずると末代の者との関連性において、自ら親疎があり、法華經流布の先後についても釈迦と後世との間に不可分の関連があるとし、釈迦によって対決事證された教説と、日蓮が釈迦をモデルとして対決事證した間に相關関係が存在する。これは日蓮が釈迦の説示したと対決したことが、かえって、釈迦の教説をより現実的とすると共に質的内容を対告衆に即した教説として高めて行く結果となった。

日蓮は、釈迦の教説を来世において最も良心的に受容展開した者は自分を措いて他に類例がないと自負する。釈迦の己證こじようが法華經を通じて内面的に伝達されたということは教説の伝達の課題であり、果して教説が真に伝達し得るものか。言辞の相寂滅、不可説という。従ってそのまま伝達することは不可能であろう。宗教の世界は内面的であり、思慮分別の理性的範疇をこえた領域である。法華經方便品にも唯佛与佛乃能究盡くわんといひ、言説による内面性の伝達を拒否している。だが教典とか言説という分別悟性的の条件下で、本質的には伝達不可能と思われる宗教的対決の事実を伝達しなければならぬ。法華經の七喩は分別悟性的な言説を通じて分別悟性を超越した境地を伝達するのには、この間接的譬喩を通じてでなければ相手の内面への滲透が不可能であることを示している。伝達する側とされる側の立場から見ても、本質的に言辞を以て説明し得ない境地を有限相對の言葉で説示しなければならぬ時譬喩の如き特別の教法をとらねばならぬ。然し譬喩として説かれた内容はあく迄も譬喩であって、教説そのものではない面はあるが、教

祖の内鑑の世界の形成發展を窺わせるばかりでなく、伝達を受ける側の機根により、程度に幅を持たせて内証の世界を窺わせ、各自の個性的対決を媒介として、事證せしめてゆく方法であると評価出来る。法華經譬喩品の三車一車の譬喩の宗教的意義を見る時、二通りの事が考えられる。一つは教主自体の立場であり、他は説かれる教説が相手に滲透するかどうかである。前者は教主所證の立場からは三車も一車もない。所證は一つである。だか後者の立場からすれば機根の上下により、教を受容する教えられる側にあつては説述者の意図がはかり知られぬ。宗教的体験の世界は特殊の世界であると共に内容にも伝達にも複雑な過程がある。伝達告知は教主の所證と如同する事を目的とするが、告知の受容者は自己のうちに永遠性を具有し、その事を弁えている立場と、弁えていない立場がある。悉有佛性しつぷふつじょうといわれる時、自己のうちに永遠性の存在を素直に認めるが、親鸞は信仰告白の三願転入において佛と関わりあうことのできる条件は煩惱熾盛の自覚であるとし、罪惡深重の人間はそれ自体の力では永遠性の自覚を得ることは出来ない。そこで阿彌陀佛の特異な伝達方式即ち絶対的逆説である。善人なおもて往生をとぐいわんや悪人をやの所謂惡人正機説という方法を取つたのである。この絶対的逆説は人々に自己否定の決断を迫っている。

佛と人間との関わりあひは、佛が絶対的存在として現に實在し、われわれとの関係はわれわれが佛の實存に信を持つことによつて手許にもたらされたもの、永遠なるものが実存することが有限相対なわたくしどもに断絶してないがら實在しているということである。佛との関係は佛子関係であることの事實を教典、特に法華經は教えようとしている。法華經は譬喩を媒介として巧みに一体どこ迄どのようにして教えることができるのかを説く。真理がどこ迄教えることができるかの可能性についての課題は、真理を知っていない者は宗教的真理を問うことは出来ない点にある。この問うことができぬ者に真理を知らせる困難性を教典はいやという程繰り返して説く。法華經第八章の衣裏繫珠えりけいじゆの

譬喩でも分る通り相手に想起させる佛との不可分の關係は、知っていたのだが忘失して仕舞ったあり方として示されている。忘失の自覚は新たに真理を注入するのではなく、既にあるものを想起し覚知させる。こゝで宗教は各自が持っているものを新に与えることではなく、既に頂いて持っているものを常に自己に問い続けることによって自覚させるものであることが分る。この事を法華經では巧みに心理的に描寫しているものの、教導者が誘導し、教えられる者自身がその真理を自己内面化せねばならないという点から教導者の限界も自ら存する訳である。それにも拘らず教祖所證の本地に到達させる作用を廢することは出来ない。それ故対告象への受容の成否を課題しなければならぬ。こゝに相手本意の随他意は教祖の教説の多様性を必然化するが、この教説の多様性は相手に所證の境地に導く熱意へ慈悲であると言える。こゝに又老大な量の教典が生まれ、この諸教典は教祖がその所證の本領を語り、直接聴聞の形式をとり、伝導の内容、段階、方法等が盛られている。だが教祖の所證の内容の境地は凡慮を超越しているが、それを知らせんとする慈悲と、それを分ろうとする努力と、やがて本地に到達し得る可能性を強調する。相手の理解を誘うべく種々の技法を方便とするが、この方法論が相手に本當に受けとって欲しいそのままが滲透する保證はないが、種々のテクニクによって教えられているうちに自己訓練を経ることによって、相手本位の説述であっても証悟の内容に接近し得る。教祖の内證の伝達作業の多様性は教祖の内證の多様性ではなく、それは教えられる者の多様性である。では教えられる者の多様性をどう克服するのか、教え方について見ると、所證の境地を無修飾に語る場合、從浅至深して語る面がある。これは教説受容者への配慮であり、機根の査定とそれに応じた教説が行われるのだが、受容者にあつては、そうした遠大な配慮と意図を窺知し得ないので、本来的に永遠の価値を具有しながら無自覚である者への覚醒は挫折感と断絶感の淵に突き落とさなければ不可能である。法華經譬喩品において、長者と窮子が直ちに名

乗り合わず、窮子に絶望感を与える経過を辿り一体感へと導入した。佛の實在は、分別悟性的証明を超越しているにも拘らず分別悟性的証明を求めると共にこの佛の實在を求めらるることを中止しない。求めつつも悟性の壁につき当たり突破し得ない。佛法の大海は以信能入とか、以信代慧というが、これは分別悟性の自己否定を催促するものである。日蓮は数多くの法難に際し、予想された救護が期待し得ない時、天も捨てよ、諸難にも遭えよ一つの逆説を披露した。無言の佛に対し、沈黙を持ち続けるが故に佛を実感し、仏の實在は主体の内面的事実であり、法難に際し、奇蹟として客体的に現前するものでないことを示した。

永遠の生命的事存の佛を分別悟性的なわれわれは忘失している。法華經第八章の衣裏繁珠の譬喩は宝珠の存在を忘失より回復させる作業であるが、一体想起するだけで事は足りるのか。即身成佛という言葉ですぐ佛が内面化するのか、佛との対比において直ちに一体とい切れるのか。伽耶始成の有限相對の佛はわれわれに佛との間に断絶が存在することを教えているのではないかと思う。法華經製作者の意図を反映した始成佛はそれ自体は始成正覺ではないのであるが始成正覺佛と見る。断絶は佛の側からではなくわれわれ側にある。始成佛と久成仏は別個の存在ではないのであるが、われわれにその区別が分からないのは絶対の佛が区別が分からないから歴史的な時間の中で人間として現われて始成佛と久成仏の相違を知らせて導入しようとしたのである。

始成佛との関わりは人間的であるが、久成佛とのそれは神秘的である。ではなぜこの様な手続きを取るのか。その理由は有限相對のわれわれが無限永世的久成佛との関係においての場合と有限相對の佛と関わることの差異を想定して見た場合、有限な佛と関わった時はわれわれも亦有限的存在となる。永遠的なものと時間的なもの間には断絶があるのだが、われわれはこの断絶に対して無知である。

佛のこの屬性に無知であるが故に敢て始成の佛を前面に押し出し一旦躓きの体験を味わせて後に開顯かいげんして久成の佛とわれ等との関連を示すのであると思う。常住不滅佛の実存を分別悟性が直ちに承認し得るか、これは佛の屬性の内面化が承認されぬことであつて、宗教的真理と吾人との隔てがあるのだ、佛の實在を確かめようとすればする程益々不確実に陥り、自己の迷妄の境遇を自覚し、佛の実存を否定する根源惡に目覚める。信仰とはかくの如き魂の苦闘に他ならない。佛の実存は不可視的であるが故に逆説的だが、見えざるものに対して忠誠を誓うのであつて、可視的であり、又われわれの要請で存在するとすれば攘災致福の偶像化を招くのみならず、なんとかしてでも佛を自己の意に契わさせるべく行動する墮落した人間を産むこととなる。

われ佛を得てよりこのかた百千萬億劫を経たと法華經如来寿命量品偈はいうが、滅度しない佛を得ること、その得方はどうするのかを示すものである。佛とわれとの同時性の問題は、常にこゝにあつて滅せずと宣言する佛とどのようにして現実に自分はあるのかという問題である。

## (六)

こゝに佛がいるのだと佛が宣言しても、具体的事實として現前しているのではない。しかし佛の實在を誰がどう確認するのか、佛の側よりの働きかけか、われわれの側からか。結論的に言えば佛の實在を課題としている求道者を離れては存在しない。このことは常に法を説いて無数億の衆生を教化して今日に至っている当処において、佛の存在が確認されることを意味する。法華經如来寿命量品で釈氏の宮を出でて伽耶城を去ること遠からぬ菩提樹の下で正覺を得

歴史的釈迦がまず存在したことは重要な事実であり、この事實はそれで終ったのではない。歴史的事実として正覺を得た佛陀が時空を超越して現在に連続し、釈迦成道じょうどうの過去の歴史的事実が永続し、求道者と関連するものである。今でも法を説いている、今でもその法を聞いているという同時性は現実にはあり得ないが、終っている過去の事實が永遠的のものとして各自の時間の中に現実化するのには求道者が常に法を聞く態度によって貫徹されていることによつて可能であるからである。

佛とわれとの同時性という歴史関係とは今番出世の釈迦佛が各自に生き続けているという直接的同時性ではない。この事は釈迦と同時代人と雖も釈迦の教を確實に把握した訳ではない。この点は昭和の吾人とても同じ条件であり、佛の存在が単なる過去の物語でなく、精神的事実として現在迄生き続けていることが佛とわれとの同時性である。求道者にこの永遠と有限との継合が必要であるといひ得るのは、自己を常に永遠に向けて決断的に行動する時である。だがここで次の如き問題がおこる。それは佛とか神を存在の主体とするのか、われわれかという点である。佛教では現実に悩める者を主体とするのだが、安易に主体となるのではなくて、自覺的主体であること、即ち、ものの成立、変化の諸相、生ある者がいかに生きるか、根本的迷妄としての無明と生死の関連性等がそれであるが、最も理解しにくいのは無我と縁起の問題である。

(七)

通常の理解では無我が存在するものは、そのものとして存在しているのではないということであり、縁起はものの

存在について、縁が存在を規定し、縁によって存在するのであるという形で存在しているとす。佛との関係で言えば佛の領域が存在すると同時に私共の生活の領域があり、この両者が関係する領域がある。この最後の領域が人間存在の究極的な在りかたである。この究極的な在り方については、親鸞の教行信証巻末尾が紹介している曇鸞の浄土論註は佛と各自との関わり合い方は「遊び」という様相でしか表現も説明も出来ないという。この遊びとは自由自在ということでもあるし、無造作とも言える。この無造作の在り方において救済が成立するのであるとする。佛との関わりあいは無意識的な遊びの中において可能であるとする。それゆえ分別悟性的にかくの如しと表明し得ない、三毒の囚人である低下の凡夫は実際と隔絶した状態で現実を見る。これは無明、縁起、無我の無視に由来する。佛教的悟りとはこの誤まてる自己の処し方に気付くことを惜いて他にない。気付くためには修行が必要である。修行の最大のテーマは生死の問題である。生が終わったから死が来るといふ直線的生死でなく、生死即涅槃即ち生死を度外視したり、死をなくするということではなく迷惑の根源としての生死で、死を回避したいという時の死は回避することが不可能であるという意味の死であって、この死は人力ではいかんともなし難い必然性として各自は対決しなければならぬ。必然性として対決しなければならぬ死は、生死の単なる変化ではなく、逆に生の変化と死の可能性を容認し、生死に身を任かせることが修行の内容である。

(八)

宗教的真理の理解と把握が困難であることについて考えてみると、悉是吾子の佛の立場から見ると本来永遠の真理

を理解し得る基本的条件を人間は具備している。所が如来寿命品第十六にあるように、自己を忘失している。本人自身、真理に違背していることを知らないでいる。この者に真理を悟るよう変質を迫らなければならぬ。佛性という永遠的価値に気付かせる可能性は永遠的価値を具有している点を示すことによつて可能であると言えるが、未熟者にとつては理解の範囲を越えているから、親鸞の表現をかりれば宗教的真理に触れるのは本人の力ではなく絶対の他力であるとする。永遠的宗教的価値の内在を想起させるということは、法華経に過去佛が多く出てくるように、これは真理が無限の過去に求められることを示すと共にこの過去佛がこの娑婆世界深重有縁の釈迦佛と並座することを意味する。これは宗教的真理は過去に留まるものではなく未来の方向で求められねばならぬことを象徴しているのである。凡俗が永遠性と関係を持つものには、自己否定の困難性を克服しなければならぬ。自己否定とは永遠性と関係するために今自己がよつてもつて存在している時間の制約を否定することである。過去佛で示された通り佛は時間の中で生成したのであるから、私共が佛と同等になるのにはその時間という単位の中で同等にあることではなければならぬ。インドで始成正覚した時間と久遠実成の佛としての時間と吾人の時間が同等になるということである。同等になり得ないとする立場で伽耶始成佛を真佛としていたことは、佛の永遠性と人間の有限相対的時間とでは有限性と無限性の対立のため何としても永遠性に連続しないという断絶感に陥らざるを得ない。永不成佛者といわれるグループはそれである。法華経第三譬喩品に現れる佛が窮子に下等な人間の姿を見せながら真底の佛の姿を示そうとしたのは佛の善巧方便ぎょうほうべんというよりも佛にとつての一つの悩みであり、佛の持つ永遠性と人間の有限性との落差を悲しんだことである。佛は、衆生との落差とは永遠性を本来的に所有しているが、それに無自覚で迷界に没在している者に永遠なる佛の生命と関係し得る可能性があることを自得させる術は何かを説く。同時に、長者の財宝はあくまでも長者のものであ

り、窮子には全く無関係であることを語っているのは、各人は有限であり無限性とは全く無関係である立場を常に自己に問いつづける事を繰り返して自己の生き方に結びつけて転換しなければならぬ事を示しているのである。

(七)

日蓮は臨終の事を習えという。この終末論は終末は本来各自に具わっていることで、単に人間の死そのものに限らず、そのあとで他事を習へというのは常に終末を踏えて自己の態度を決せよというのであり、有限性と無限性の課題を暗示している。各人どんなに無限性を言われても不確実な可能性としか受容出来ない。始覚即本覚と法華経は開顯するが、これは釈迦悟入の永遠性を出来事として、過去の可能性としてではなく、各自の可能性の領域に招来して、それが各自の現実の出来事として持つことを意味する。

法華経の説相によれば永遠性は久遠実成くゑんじつじょうの佛とされ、開迹顯本かいじくげんほんされた有限者は時空を超越して、その者がある所が涅槃者の場所とされ、永遠者がかつて事成したそのものと色も変わらず久遠の昔より現在に至っているとする。こうした經典の説相をいかにして自己のものとするか。法華経では、法師、宝塔、勸持、涌出、寿量の各品を通じて劇的に一つの出来事として描寫しているが、それへの具体的方法論については説いていない。この過去の現證が今の事実として受容し得ると断言出来ないのは經典の受容体制が唱題とか信に限定されているからである。佛法そのものが悲觀的段階の末法にあつては今の時代に即応した受信体制をつくらねばならぬ。

科学技術が宗教とか信仰に優先し、信頼度は宗教にまさっている時代に宗教がどの部分で要請されるのか。現実の

生活の欲求充足は政治経済学問技術等に加えて、各個人の学歴才腕が動く。この場所に宗教的信仰がどうして必要であるのか。必要であるとするればどのような生活の場面であるのかという問題が出てくる。人間は欲求充足本能を持つが、可能的処置には限界がある。こゝに精神的肉体的逼迫状況を経験する。逼迫すると欲求に更につき進むか、退避するか、この二面が見られるが、回避すればよいが再挑戦という時今迄行使した所の手段では局面の打開が困難である。この場面に宗教が多く登場してくる。行き悩み手段方法で途方に暮れる者が宗教の世界を求め、この所迄は何人も経験する所で、こゝで多くの人は迷信的宗教に迷いこむ、その迷いとは、欲求者が自己の考え得る手段方法を駆使して挫折することであるが、今迄の手段方法はそのまゝとして薬をもつかむ気持で宗教を援軍として迎い入れることによって欲求充足に向う。行きづまった自己を温存して、他力を願う。無我という佛教のすぐれた在りかたはこの際出てこない。主我的我執のわれを無我の原理に沿って根本的に否定することがなければならぬ。絶対的自己放棄がなければならぬ。日蓮は竜の口法難を評価して、「日蓮といふ者は去年九月十二日の時に頸はねられぬ」と自己放棄の典型的人間像を示している。

### 結語

人は生まれた以上生き続けねばならぬ。漠然と生きる時期もあるが必ず生きる意義を考える時がくる。よりよく生きたい。それは万人の願望だが、それは必ずしも現実と妥協し、適応して生きることはない。既に日蓮の場合を見たが、順風万帆の中で充実感を持ったのではない。だがよりよく生きた事は事実である。幸はアクションによりと言

うが、挑戦的行動は逆境にあった時緊張し、それを乗りこえようとする、そこに今迄気の付かなかつた力が内に秘んでいる事を見出す。日蓮はその発見の喜びを法悦と表現した。法悦とは人生の問い直しであつた。今迄不動と思つていた価値観が動揺し、更に不動の基盤を求め、こゝに人生の問い直しがおこり、批判懷疑が生ずる。積極的内面的努力の表われである。だが不動の生き方の基盤の発見は容易でない。我が身法華經の行者にあらざるかと自己を問いつづけた日蓮は法華經に生の基盤を置き自己の進行方向を見失わなかつた。この事は客観的外的な全体と自己の内面的全体を問題意識を中心として統一的に人生を把握した例である。

宗教的真理に照らし繰りかえし自己を問いつづける事は永遠の問題であり且つ古くて新しい課題である。

#### 注

- (1) 明日の友 増刊千九百八十一頁 齊藤勇訳
- (2) 亀井勝一郎著 日本の智慧二十七頁
- (3) 法華經は岩波文庫本 上中下による
- (4) 日蓮聖人遺文 昭和定本第一卷五九〇頁

# 宮沢賢治の童話に見る修羅の捨身

石 川 教 張

## 序

まことのことばはここになく

修羅のなみだはつちにふる

宮沢賢治が「いかりのにがさまた青さ／四月の気層のひかりの底を／唾し はぎしりゆききする／おれはひとりの修羅なのだ」と語り、強烈な修羅の意識を抱きつづけていたことはよく知られている所である。

賢治は、「まこと」から離れ、春の陽光の輝く宇宙世界の底辺を修羅のひとりとして生きねばならない懊悩と悲しみを痛切に意識し続けていた。

この修羅の意識は、賢治の内なる心象風景であることは言うまでもないが、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天の

六道のうち人界より一段低い修羅界に生きている自己への痛切な自覚と苦悩を表明したものである。

同時に、こうした修羅の苦悩と悲しみは、宇宙空間よりそそぐ春の明るい光に照らされることによって鮮明に意識されたものであり、それによって暗く陰湿で、猜疑・嫉妬・詭曲・高慢・争闘に充ちた修羅の世界に生きる「ひとりの修羅」としての自己を確認したものであつた。

いったい、修羅として生きる者の心象とは何か。その苦しみは何によって解決され得るのか。人間を含む生き者が宿命的に背負つて生きている修羅の世界を転換する道はどこにあるのか。明と暗、まことと修羅の二重の風景の中に佇みながら、賢治は修羅の世界に生きる修羅のひとりとして、究極的な命題である「人間の世界の修羅の成仏」とは何かをめざし続けたのである。

ここから賢治は、殺生の渦巻く修羅闘争の世界に生きる者のありようを主題とした童話作品を数多く書いていく。この小考では、これらの童話のうち『烏の北斗七星』『よだかの星』『二十六夜』を取りあげ、以下に素描してゆきたい。

一

なぜ、生きとし生ける者は、さしたる理由もなしに、他の生き者のいのちを奪い、かくも戦いあい殺しあつていかねばならないのか。

動物たちは、弱肉強食の世界に生きている。生きるために敵・味方にわかれて、はげしく戦いをくりかえし、凄絶

な殺しあいをかさねている。すべて生き者は、この修羅の世界からまぬがれることができない。生きることは、すでに〈殺生〉という罪をおかさざるをえないということなのであり、その生き者のなかで人間ほど他者の犠牲の上にたつて生き、たくさん生きものをじぶんの欲望や利益のために殺してきたものはない。さらに人間同士、いかに戦い傷つけ殺りくしあつてきたか。とくべつのわけもなく他のいのちを抹殺して平然としているのは、思いあがつた人間のエゴではあるまいか。

なぜ、〈わたし〉やあらゆる生き者は、戦争のない殺しあわないですむ世界で、みなともに生きることができないのであろうか。

生きるためには、殺生を避けることができないという宿業を背負いながら、ともに修羅の悲しみをわかちあい、それを通して不殺生の世界をめざしていく生きかたを求めて行かねばならない。そのために、どのように生きるべきなのか。

宮沢賢治の書いた『鳥の北斗七星』<sup>(3)</sup>は、生きている現実の矛盾に心を引き裂かれながら、〈殺生を通して不殺生へ〉の生き方を願いつつ、はるか遠くに輝くまことの光に祈りをささげてゆく心象の風景をあかしたものである。

賢治が『鳥の北斗七星』を作品化したのは大正十年（一九二二）十二月二十一日、二十五歳のときである。生前に刊行した『注文の多い料理店』におさめられている。賢治はこの童話のモチーフについて、「戦ふものゝ内的感情です」<sup>(4)</sup>（『注文の多い料理店』新刊案内）と記している。それは、外なる戦闘に身をおく者が直面しないではおれない修羅の心とまことの心との戦いを意味しているように思われる。

『鳥の北斗七星』は、鳥の義勇艦隊が山鳥と戦う物語である。冒頭は、年とった大監督のもとで、鳥の義勇艦隊が仮泊をしたのち演習をはじめめる場面からはじまる。まっ黒な鳥が白雪にたくさん集まっている姿を想像しただけでも不気味だが、ギイギイという鳴き声は、すぐそばに鳥の黒い軍団という修羅の姿が存在していることを伝えている。

この鳥の義勇艦隊の若き艦隊長が、主人公の鳥の大尉である。かれは、勇敢な艦隊長である。演習にさいしてはまっさきにはっと雪をたたきつけて飛びあがり、十八隻の部下をひきつれてぐるぐる空を舞い、雲の鼻っ端から向こうの杜まで飛んで行き、やがて戦闘艦隊長から山鳥を迫っていく命令をうける。やや規律の乱れがちな鳥の軍隊の模範生であり、率先して軍隊をリードする先導的な役割をはたしているのである。

鳥の大尉には、許嫁がいる。この許嫁は、「いちばん声のいい砲艦」である。いよいよ明日、山鳥との戦いに赴こうとする前の晩に、かれは許嫁のもとを訪れ「しばらくお前とも別れなければなるまいよ」と言う。

どんなことが起こるかもわからない戦争の非情さを知っているかれは、つとめて平静さをよそおい、許嫁に別れを告げ、死別したあとの許嫁の行末まで心配する。悲しみにくれる許嫁にくらべて、大尉は仲間を守るためには軍人としての任務をはたさねばならないという決意を崩そうとはしていない。△「さあ、鳴くな。あした、もう一度列の中心で会へるだらう。丈夫であるんだぞ。おい、おまえももう点呼だらう。すぐ帰らなくてはいかん。手を出せ」

二疋はしっかりと手を握りました。

愛する者を思いやりながら、なお死を覚悟して戦場に赴こうとする鳥の大尉。愛する者との別れを嘆く許嫁。戦争は、この二人の心にひびきを入れ、生死をまっ二つに引き裂いてしまうかもしれないという不安をよびおこす。しかも、生き者のいのちをひっさらい、兄貴の鳥も弟をかばう暇がなく、恋人どうしもたびたびひどくぶつかり合う凄じい現

実が眼前にある。戦う心と愛する者を思いやる心、避けられない戦闘への覚悟と別離をよぎなくされることへの不安、悲しみ、嘆き、心のおののきに葛藤する内なる心の戦いがくり返えされる。

戦う者が、戦争を当然と考え、心の戦いなしに殺りくするならば、それはまさに酷悪の殺し屋にすぎない。戦う者が死への恐れ、不安、愛別離苦の悲しみのひだを見つめることによって、生きる者は修羅の悲しみと涙を共有することができるといふのが、賢治のいう「戦うものの内的感情」のありようではないだろうか。

許嫁が次々と見た夢は、死にたいするそうした心の不安を象徴している。

許嫁は、鳥の大尉とただ二人で羽をばたばたならし、たびたび顔を合わせながら青黒い夜の空をどこまでものぼってゆく。「マヂエル様と呼ぶ鳥の北斗七星」に真近かく接近したとき、二人は急に羽がこわばって、まっさかさまに落ちかかったところで驚いて眼をさます。また、うとうとすると、こんどは山鳥が二人の前にやって来て握手を求めると、大尉がいかにいかにと言つて手をふる。すると、山鳥はピストルで大尉を射殺し、大尉は倒れかかる。「マヂエル様と叫びながらまたおどろいて眼をさます」許嫁。二人の鳥は「鳥の北斗七星」のすぐそばまで行きながら、あつという間に落下する運命の子兆におびえている。しかも、許嫁は、大尉が山鳥に射殺される戦死の悲運に恐れおののいている。戦争が愛する者同士を分断し、そのいのちを奪つていく鋼のように冷酷なものであり、どす黒い不安と危機をもたらす悪夢であることが、ここには示されている。戦闘は、殺生することであり、愛別離苦をつきつける。自分たちはやがて青黒い地獄へと落ちてゆくのではないのか。そこから、はるか彼方に輝く北斗七星に向かって「マヂエル様」と悲痛な祈りをささげねばならなかった。

いっぽう鳥の大尉もまた、不安におののく許嫁の羽の音や祈りの声に耳をすましている。かれもまた、愛別離苦の

現実を思い、心は張りつめ眼は冴えて眠れない。そして、「おれはあした戦死するのだ」とつぶやく。それは、死を平静に覚悟した言葉というよりは、戦死の運命をおのれに納得させようとする自問自答のつぶやきであろう。愛する者と別れねばならないことへの苦渋にみちた精神のためいきに似ている。そうした心の黒い裂け目をおして、はるか彼方に輝く北斗七星に向かって、鳥の大尉もまた切なる祈りをささげていくのである。

じぶんもまたためいきをついて、そのうつくしい七つのマヂェルの星を仰ぎながら、あゝ、あしたの戦いでわたくしが勝つことがいゝのか、山鳥がかつのがいゝのかそれはわたくしにわかりません。たゞあなたのお考のとほりです。わたくしはわたくしにきまったやうに力一杯たゝかひます。みんなあなたのお考へのとほりですとしづかに祈って居りました。

鳥の大尉にとって、戦うことは、生をえて以来すでに決められている宿命的なことがらであった。自分が望んだことではないが、生きることがただちに戦い殺しあわなければならぬ修羅として生きることなのであった。しかし、戦いの勝敗にどんな意味があるというのか。殺しあいに勝敗はない。戦う相手もまた同胞なのだ。軍人として戦闘する自分と鳥の同胞を殺そうとするおのれに、どれが「いいのか」を判断することがどうしてできよう。その狭い計量や我執を捨てて、北斗七星の考える通りに生きること以外に生きる道はない。鳥の大尉は、北斗七星のくだす運命の理法にしたがうことを祈りつつ、運命のさだめるままに力いっぱい戦うことを表明してゆく。

ここにも、生きるために戦わねばならず、戦うことは殺しあうことであるという、おのれの力ではいかんともしが

たい〈生のありかた〉と北斗七星の考えにしたがって修羅の現実のただ中で心を格闘させながらせいっぱい生きようとする〈生きかた〉の問題が、織りなす糸のように交錯しながら明らかにされている。

北斗七星は、いうまでもなく、ヒシヤク状に輝く大熊座を中心とした七つ星のことである。北斗七星をマヂェル様と呼んだのは、大熊座の学名 *Ursa major* からとったものであり、仏教では妙見菩薩として現われ国土を守護しさまざまな災厄をまぬがれさせる守り神として尊崇されている。

北斗七星は、憎しみを愛に変える星座として北の方向のはるか彼方にまたたいている。その星あかりで、ついに戦鬨がおこった。烏の大尉は、「胸は勇ましく躍り」、部下の先頭をきってまっしぐらに進み、逃げる山鳥のまっ黒な頭を鋭く一突きして倒し、その山鳥をもう一突きした兵曹長にその死骸を営舎までもって帰るように命じて引揚げる。けがしたものはないか、とみんなをいたわり、「本艦隊は直ちに出勤、撃沈いたしました。わが軍死者なし。報告終わり」と言う烏の大尉には、勇敢なる戦鬨者としての姿がみなぎっている。艦隊はみんな嬉しくて涙を流したが、かれもやっぱり熱い涙をこぼしたにちがいない。しかし、北斗七星に身をまかせた大尉はもう一面では、「お腹が空いて山から出て来て、十九隻に囲まれて殺された、あの山鳥を思ひ出して」新しい涙をこぼす内的感情をおこさないわけにはいかなかった。かれは、戦功によって少佐に昇進したことに感謝する一方では、「敵の死骸を葬りたい」と願って許可をえるのである。勇ましく戦い、勝って喜び昇進に感謝しながら、殺した山鳥を思い出して悲しみの涙をこぼして手厚く葬ろうとするのは、あきらかに矛盾だが、この矛盾にみちた心の葛藤や転変こそ生の実相であり生きる者の心象にはかならない。結局は殺された者を悲しみ、勝つのがいいか悪いかわからないのに、生きるために殺してしまったことへの悔恨と自責の感情にたどりつく。

鳥の新らしい少佐は礼をして大監督の前をさがり、列に戻って、いまマヂェルの星の居るあたりの青ぞらを仰ぎました。(あゝ、マヂェル様、どうか憎むことのできない敵を殺さないでいゝやうに早くこの世界がなりますやうに、そのためならば、わたくしのからだなどは、何べん引き裂かれてもかまひません)

これは、賢治がもっとも叫ばずにはいられなかった祈りの言葉であつた。生きるために戦い殺していった相手が「お腹をすかして山から出て」きた山鳥であつたことを思いおこした時、鳥の少佐は自分の戦功が弱者の犠牲の上になりたち、殺さなくてもいい敵を、いや敵とさえ考えられない者を殺した加害者が自分であることに衝撃を受けたのではなからうか。それは、この山鳥だけではなく、多くの「憎むことのできない敵」を殺していることへの罪意識に拡大されていかざるをえないものであつたろう。生き者はみんな「憎むことのできない」存在であるという同胞意識と深い罪の自覚から、「どうか憎むことのできない敵を殺さないでいゝやうに早くこの世界がなりますやうに」という切なる祈りが北斗七星にささげられていくのである。北斗七星の「お考へ」が、じつは戦うことにあるのではなく、憎むことのできない者を殺さなくてすむような不殺生の世界の実現にあることに、かれは覚醒し心をよみがえらせたのである。

しかも、重要なことは殺生の現実を不殺生の理想世界に変えていきたいという祈願は、そのためなら何べん体を引き裂かれてもかまわなという自己捨身しんに高められていったことである。この捨身の決意が表白された時、はじめて北斗七星は青空に青い光をうらうらとわきおこすのである。それは、北斗七星に捨身の心が通じたことを示すもので

はないだろうか。

ここに表明された自己献身への覚悟は、「私は饑饉でみんなが死ぬとき若し私の足が無くなることで饑饉がやむなら足を切っても口惜しくありません」「善と正義のためならば命を棄てる人も多い：決してこれを忘れてはいけない」(『学者アラムハラドの着物』<sup>5</sup>)という決心や「もしたくさんのいのちの為に、どうしても一つのいのちが入用なときは、仕方ないから泣きながらでも食べていゝ、そのかはりもしその一人が自分になった場合でも敢て避けないうと云ふのです。」(『ピヂテリアン大祭』<sup>6</sup>)という言葉にも通じていく不惜身命の菩薩行をめざす生き方の原点を示している。捨身は、理想にじゅんずる死を究極の願いとするが、それは同時に自己が生まれかわり死んで死なざる命の永遠性をしるす生きかたの確立を意味する。

こうして、烏たちが戦勝によって流した「熱い涙」は、烏の少佐のこぼす殺された者への「新しい泪」となり、それは許嫁の「きらきらきら」した愛の涙にひろがってゆく。それらの涙は、一念のなかにいっしょに存在し、こもこも流す涙であったが、それでもなお北斗七星と交感しあいながら無限の闇に光り輝いていったのである。

おそらく烏たちは、再び修羅を歩き演習や戦闘をくりかえしながら生きてゆくだろう。だが、北斗七星を仰ぎみながら、修羅を生きる悲悩を抱きつつみなともに救われる世界を求めつづけてゆくのである。

## 二

『よだかの星』<sup>7</sup>は、修羅の生きざまをテーマにした賢治童話の代表作である。

この作品には、ひとりの修羅として生きる悲しみとつらさをじつとかみしめつつ、その修羅の世界から飛翔することによって、いのちを限りなく燃えたたせていきたいと祈念した賢治の切なる願いが形象されている。

先述のごとく修羅は、凄絶な闘争と殺生の世界である。強い者にへつらい弱者をいじめ、思いあがり、さげすみ、憎しみ、怨みや嫉みの本性をむきだしにして、たがいに争いあい殺しあつてゆく。こうした妄執と無明煩惱のうずまぐ心のありようが内なる修羅の意識である。

すべての生きとし生ける者は、この修羅の世界に生きている。つねにいがみあい、はてしない争いをくりかえしながら生きている。生きるためには、他の生き者を殺さなければならぬ。そのおのれも、より強い者から殺される運命にある。生あるかぎり、闘争と殺生のみちあふれに修羅道からまぬがれることはできない。生ある者は、すべてがひとりの修羅であり、なによりも絶えず争い、妄執と「まこと」との間に心を引き裂かれながら苦悩する、このわが身こそ修羅そのものである。賢治は自らの心象風景を見つめたとき、「まことのことばはうしなはれ／雲はちぎれてそらをとぶ／ああかがやきの四月の底を／はぎしり燃えてゆききする／おれはひとりの修羅なのだ」(『春と修羅』<sup>(8)</sup>)と痛歎しないではいられなかった。信の力からはなれ、純粹さと小さな徳性を失ったへまことならざるものが、「青ぐらい修羅をあるいてゐる」自分自身の姿なのである。このように賢治は「修羅のなみだ」を流し、しかもなおまことの信の力を求めていこうとする、ふたつのところに引き裂かれた二重の風景を見つづけたのである。

げにもまことのみちはかゞやきはげしくして行きがたきかな。行きがたきゆゑにわれとゞまるにはあらず。おゝつめたくして呼吸もかたくかゞやける青びかりの天よ。かなしみに身はちぎれなやみにこゝろくだけつゝなほわれ天を

恋ひしたへり（「冬のスケッチ五」）<sup>(10)</sup>

戦い流され修羅を歩くおのれにとって、「まことの道」は遠い。だが、その行きがたい「青びかりの天」にあこがれ身を捨てて到達することは、悲しみにふるえ苦悩に心くだけた修羅の身が、〈生まれかわる〉ことに通じるのではあるまいか。それは、鬨諍と殺生のうずまく修羅道から出離して、まことの無上道に参入していくことではないのか——。『よだかの星』は、こうした賢治の希願から書かれていったものである。『よだかの星』を、修羅の世界に生きている苦しみとつらさを体験したよだか（夜鷹）が、ついに自らの力でまっしぐらに天に飛びあがり輝く「よだかの星」になる、という物語として描きあげたのは、こうした願いをこの童話に結晶しようとしたためである。

『よだかの星』は、冒頭で次のように書きはじめられている。

よだかは、実にみにくい鳥です。

顔は、ところどころ、味噌をつけたやうにまだらで、くちばしは、ひらたくて、耳までさけてゐます。足は、まるでよぼよぼで、一間とも歩けません。ほかの鳥は、もう、よだかの顔を見たゞけでも、いやになってしまふという具合でした。

よだかは、生まれつき容貌がみにくい。能力も他の鳥にくらべて先天的に劣っている。そのため、ひばりからは見

くだされ、さもいやそうに、そっぽを向かれ、他の鳥たちからは、「鳥の仲間のつらよこしだよ」「ね、まあ、あのくちばしの大きいことさ。きつと、かえるの親類か何かなんだよ」とあざけりをうける。

鷹からは、名をかえせ、早く名前をあらためろ、と言われ、「市蔵」という名札を首にぶらさげて、みんなの所をおじぎをしてまわるように強要される。そんなことはできないと拒否しても、鷹は「もしあさつての朝までに、お前がさうしなかつたら、もうすぐ、つかみ殺すぞ。つかみ殺してしまふから、そう思へ」と脅迫する。それらは、よだかにとつて「死んだ方がましです。今すぐ殺して下さい」と言わないではおれないほどの屈辱的な仕打ちであった。

ここには、容貌のみにくさや能力のつたなさをことさらにあげつらい、見くだしたり毛嫌いし、嘲笑をあびせ脅迫や屈辱を与えていく生々しい修羅の世界の現実が描かれている。

それは、賢治の抱いていた内なる修羅の姿でもあったであろう。ここには、わが身こそ生まれついて以来「みにくい」存在なのだ、という修羅の原質と無明さを見すえた眼がある。外形の容貌の美醜にとらわれ、わずかばかりの才能に優越感を抱いて、先天的な事から自嘲してきた精神のみにくさにたいする賢治の深い自省の念が秘められてはいないだろうか。名前を改めろという鷹とそれを拒否しようするよだかの姿勢には、はぎしりしながら修羅を歩いていた賢治の葛藤がにじみでている。これはおそらく、一家にみちていた念仏信仰を改めて法華経信仰の道に導こうとし、やがて父といさかい、怒り、父に反感すら抱いた「悪くひがみ勝ち」な修羅の心への戦慄を意味しているのではあるまいか。それはまた、「仏を得べしと信じ喜び勇みて懈怠上慢の身を起し誠の道に入らんと願ひ候ものを只一途に御止め下され候は止むなき御慈悲とは申せ実に悲しき事に御座候」とのべたような、法華経信仰をやめよという父からの強要にたいする悲しみとつらさをも表わしていると思われる。

また、よだかは、美しいかわせみと蜂すずめの兄である、とされている。この点については、「花鳥図譜・七月」のなかに、「(あすこにとまってゐらっしゃる 眼のりんとしたお嬢さん!) / (かわせみ?) / (まあそのへん) / (夜鷹があれの兄貴なの) / (さうだとさ) / (蜂雀が弟なの)」としるした一節がある。この作品は、賢治と妹とし子との対話を思わせるものであるが、賢治が自分を夜鷹に託していることは明らかである。しかも、「あたいのあにきはやくざもの、と / あしが弱くてあるきもできず、と / 口をひらいて飛ぶのが手柄 / 名前を夜鷹と申しますといふんだ」とも語っている。<sup>(13)</sup> この「やくざもの」としての夜鷹は、「私はいまや無職、無宿、のならずもの」「弱むしのいくちなし、ずるもの、わるもの」として「戦ひ流る流さる」と告白したような、徹底的な修羅の自省とオーバードラップしている。

いったい僕は、なぜこうみんなにいやがられるのだらう。

このよだかの悩みは、「なんにも悪いことをしたことがない」自分にたいする不当な仕打ちへのつらさを実感したことにあるが、そこには「まことの道」を求めながら、周囲から嫌悪と嘲笑をこうむり、自らもただ戦い流される修羅としてしか生きられない自分の姿を凝視していた賢治のはぎしりが脈打っているように思われる。

『よだかの星』のモチーフは、修羅の苦しみとこれを契機として修羅の世界を出離していくところにある。

よだかの最も深い苦悩は、争いあい殺しあうことなしには生きられない「つらい、つらい」世界に身をおかざるを

えないことであつた。

あゝ、かぶとむしや、たくさんの羽虫が、毎晩僕に殺される。そしてそのたゞ一つの僕がこんどは鷹に殺される。それがこんなにつらいのだ。あゝ、つらい、つらい。僕はもう虫をたべないで飢えて死なう。いや、その前にもう鷹が僕を殺すだらう。いや、その前に、僕は遠くの遠くの空の向ふに行つてしまはう。

よだかは、自分より弱くて小さな昆虫を食べて生きている。何も悪いことをしていないという小さな自負心は、たんなる利己的な思いにすぎないことがここで明らかにされる。それゆえに、他を傷つけ殺すことなしには生きられない事態におののかざるをえない。そのよだかも、鷹に殺される不安からまぬがれることができない。生きることがすでに修羅なのだ。「つらい、いらい」のだ。〈殺生〉をくりかえす修羅の巷にたたずむよだかとしての賢治は、おのれがどんなに弱い者を傷つけ卑しめてきたかを嘆き、その「ならず者」である自分も他のより強い権力の持主によつていかに精神を無化されそうになっているか、を改めて実感しないわけにはいかなかった。〈殺生〉とは、このばあい、修羅の心によつて「まこと」をめざす身がちぎられ、その心が碎かれてしまうことを意味していると思われる。

甲虫をのみこんだよだかが、「なぜだかせなかがぞつとしたやうに思ひ」、また「急に胸がどきつとして」泣き出したのは、修羅の世界に生きるために、純粹にまことの幸福をめざし信の力や徳性の数々をそなえていく心を殺してしまつてゐることへの強いおののきと悲泣をものがたつてゐる。これは

「まことのことばここになく修羅のなみだはつちにふる」

と表白した精神に通じているものである。

こうして、よだかは「修羅のなみだ」をながしながら、修羅の世界から遠く離れた天に向かうことを希求する。弟の蜂雀に「どうしてもとらなければならぬ時のほかにはいたずらにお魚を取ったりしないやうにして呉れ。ね。さよなら」という言葉は、殺生の世界との決別を覚悟したよだかが、傷つけあい殺しあうことへの自制をよびかけた別のメッセージでもある。

よだかは、ひたすら願う。太陽にたいして「どうぞ私をあなたの所へ連れてって下さい。灼けて死んでもかまひません。私のやうなみにくいからでも灼けるとときには小さなひかりを出すでせう。どうか私を連れてって下さい」と懇願する。よだかは、太陽から星に頼めと言われ、星からは「少し頭をひやして来なさい」などとからかわれ、拒絶されてしまう。「夜鷹ふくろう、ちどり かけす、来ようとすれども、できもせぬ」(『双子の星』<sup>(15)</sup>)とうたわれるように、ほんらいよだかにとって天は遠い彼方にある。だがよだかは、すでに捨身の覚悟を抱くにいたっている。太陽や星に拒絶されたことによって、よだかは修羅の世界からの出離が他者の力にすぎるのではなく、自らの力できり開いていかねばならないことを思い知らされる。よだかは、天の星になることを願いつつ、力を落とす羽を閉じ地に落ちていく寸前で、悲しい生き者がいっさいの宿業をたち切って輝く空に飛びたつ道がぎり開かれ、自らの精進によってこそ、「まことの道」にたどりつけることにめざめていったにちがいない。

よだかは、にわかにはろしのように空へ飛びあがり、キシキシと高く叫び、まっすぐのぼって行く。よだかを天にのぼらせたのは、強い羽と鋭い鳴き声であった。それは、よだかが鷹に比肩できる二つの個人的な力であった。求道への飛翔力とまことに帰命する捨身への強烈な決意を意味している。よだかは、飛びつづけ、不拔の勇猛精進をつら

ぬき捨身を通して生命を限りなく燃焼してゆく。

それなのに、ほしの大きさは、さっきと少しも変わりません。つくいきはふいごのやうです。寒さや霜がまるで劍のやうによだかを刺しました。よだかははねがすっかりしびれてしまひました。そしてなみだぐんだ目をあげてもう一べんそらを見ました。さうです。これがよだかの最後でした。もうよだかは落ちてゐるのか、のぼつてゐるのか、さかさになってゐるのか、上を向いてゐるのかも、わかりませんでした。たゞこゝろもちはやすらかに、その血のついた大きなくちばしは、横にまがつては居りましたが、たしかに少しわらつて居りました。

それからしばらくたつてよだかははつきりまなこをひらきました。そして自分のからだがいま燐の火のやうな青い美しい光になって、しづかに燃えてゐるのを見ました。

よだかは、血にまみれた修羅に徹し、その痕跡をくちばしにのこしながら、飛翔することによって心安らかな境地に到達し、「よだかの星」になつたのである。これは、修羅のなかをさまよいつつ賢治が求めてやまなかつた「修羅の成仏」を表象したものである。

そしてよだかの星は燃えつゞけました。いつまでもいつまでも燃えつゞけました。今でもまだ燃えてゐます

この描写は、よだかが六道（地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天）のうち修羅の世界から天界にうまれかわつたこと

を示している。修羅の苦しみは、安らかな心持に昇華され、無明長夜に輝く星となって生きるにいたった。なべての悩みも安らかさもぜんぶひっくるめて唯一のまことに献身し、そのために、いのちを燃焼させてゆく。よだかの星は、心の闇を明るくともす限らない誓願の輝きである。「本当に燃え出して見せる。見せるのではなく燃えなければならぬ。燃えたるも燃えざるも安らかなるも焦慮したるも唯ひとつの道、唯一の道」<sup>(16)</sup>と告白した賢治は、まことの唯一の道に向けてまっしぐらに飛びたち、そこに「無限のいのち」を燃焼させていこうとしたのである。求道すでに道なのであった。燃えつづけるよだかの星は、まことの道を求め、まことの幸福をめざして燃えあがる賢治のひたむきな信の生き方をものがたっている。修羅の苦悩に徹し、「まこと」のために身を捨てる帰命の精神こそが、限りなく燃えつづける永遠のいのちなのであり、それが夜空に輝く星にはかならない。

### 三

童話『二十六夜』<sup>(17)</sup>は、「梟きょうししこ守護章」と題する仏典を梟法師が講説し、それを梟たちが聞法する作品構成を中心に、人間の子に捕われ傷つけられた梟の子の受難と死を通して苦悩から出離する道を描いた作品である。

この作品の制作年代は明らかではないが、『注文の多い料理店』以降、『なめとこ山の熊』『よだかの星』など「殺生」をテーマにした作品系列に位置付けることが出来る。同時に、『二十六夜』は仏教的色彩の濃厚な作品のひとつであり、賢治自身の願求した「修羅の成仏」や煩惱即菩提といった仏教の救済観を根底にして作品が形象化された点も見られる。

また特徴的な点は、賢治が仏典を創作し、これを作品に導入している事であり、創作した仏典を童話の中で説いている唯一の作品と言えよう。この点については、賢治自身も表紙右上方に赤インクの大きな字で、「どうもくすぐつたし」と記入しているごとく、面映い気持ちを抱いていたようであるが、梟・鴉などもろもろの鳥禽を離苦解脱の道に導く「誰も存知の有り難いお経」を説き、修羅の世界に生きる者の救いの普遍性を語り示そうした賢治の基本精神を「梟鴉守護章」と呼ぶ仏典に仮託したものと考えられる。

この「梟鴉守護章」は、こう記されている。

爾モの時に疾翔シツシヨウ大力リキ、爾迦夷ルカガキに告げて曰く、「諦アキラカに聴け、諦アキラカに聴け、善ヨシく之を思念シネンせよ。我今汝ワガイマツレに、梟鴉ウカウカ諸の悪禽アクキン、離苦解脱リキゲツトクの道を述べん」と。

爾迦夷、則ち、両翼を開張し、虔ウヤウヤしく頸を垂れて、座を離れ、低く飛揚して、疾翔大力を讚嘆すること三さん匠しやうにして、徐ユキに座に復し、拜跪して唯願ウイガンふらく、疾翔大力、疾翔大力、たゞ我等が為に、これを説きたまへ。たゞ我等が為に、之を説き給へと。：

ここには、漢訳仏典にみられる文体・用語構成が踏襲されており、仏典を読誦・聴聞してきた経験を基に賢治は創作したものと考えられる。<sup>(19)</sup>このことは例えば賢治がつねに読んでいた法華経に「爾の時に世尊、三昧より安詳として起つて、舍利弗に告げたまわく」と記されているのと同様に、「梟鴉守護章」も「爾の時」と説き手と対告象を明示し、また法華経に「汝等当に如来の誠諦の語を信解すべし」「世尊唯願わくは之を説きたまえ。我等当に仏の語を信

受したてまつるべし。是の如く三たび白し已りて復言さく、唯願わくは之を説きたまえ」とあるように、「梟鴉守護章」でも「我等が為に、これを説きたまえ」という説法要請の願いが語られており、經典中の常用句をも織り込んで壮重な文体とリズムを表現している点からもうかがい知ることが出来る。

また、こうした仏典創作の背景には、仏典中の『雜宝藏經』（烏梟報怨縁）<sup>(20)</sup>に、烏と梟が共に殺しあって食べあう争いをくりひろげ、智者の烏の計略にかかって梟たちが焼き殺される話があり、仏典説話の本生譚を素材やヒントにしている点も推定し得る。

ところで、この「梟鴉守護章」は、別号を捨身大菩薩と呼ぶ疾翔大力によって説かれたものであり、「離苦解脱の道」をあかした経文であるという。

梟法師は、「如来大慈大悲」によって、わが小願の中に大神力を現じたまえと念じ、妄言綺語の淤泥を光明顕色の浄瑠璃と化し、その淤泥にさく浄らかな蓮華の中よりさらに清浄の青蓮華を開かしたまえとの願いをこめながら「疾翔大力が威神力を享けて」、このお経の一節を、旧暦の六月二十四日・二十五日・二十六日の夜に講じてゆくのである。場所は、北上川の獅子鼻で梟が数多く棲んでいる松林である。

旧暦の六月二十四日の晩。松林の高い所で「梟鴉守護章」を唱える、梟法師の声が静寂の中に聞こえる。しんとした林の中ですすり泣きの声が出ている。これから、梟法師がこの経を講釈するのである。

梟法師は

「せっかく鳥に生まれて来ても、ただ腹がすいた、取って食う、眠くなった、巢にはいるでは、なんのしよせんも

ないぞよ。こちらが一日生きるには、すずめやつぐみや、たにしやみみずが、十や二十も殺されねばならぬ。ただ今のご文にあらっしやるとおりじゃ」

と、語りだす。

短い一生をただうかうかと、あだにすごしてはならない。一日生きていることによって、より小さくて弱い生きものが殺されていかねばならない殺生と鬪諍の道理をとくと聞きわけよ——。

これが「梟鴉守護章」を講じて梟みんなに聞法させようとする梟法師の気持ちであった。

さて、梟法師はこの経文が鳥たちの悪業をあわれんで救護くぐごの道に導しんこうとする疾翔しゅうじょう大力だいきによって説かれたものである、と語る。

疾翔大力とは、捨身大菩薩の別号で、「もと鳥の中から菩提心ぼだいしんを発はつして、発願はつがんした大力の菩薩」のことである、とのべる。

疾翔とは早く飛ぶことであり、一はばたきすると六十由旬も飛んで行ける神通力をもっている。大力とは捨身による救護の徳をもっているということだ、と語る。

つまり、火の中や水の中で苦しむ者を見ると、火や水の中に飛びこんで救いとり、「浄明じやうめいの天上」に連れてゆく救済の功徳と、火中、水中に入って身の毛一つ傷つかず羽は塵ほどもぬれない法力の功徳とをかねそなえているので、大力と称するものである。「本願のごとくにお救ひなされる」尊い救主、それが疾翔大力と鳥たちのいう、捨身大菩薩の姿である。

この疾翔大力が、どうして「賤しい鳥の身分」から、かくもすばらしい「尊い身分」になったのか。梟法師は、次

のように疾翔大力の積んだ前生の功德を説きあかす。

へ疾翔大力さまは、もとは南天竺のある家の棟に棲む一匹の雀であった。

ある年、ひどい饑饉がおこり炎天と飢渴のために人も鳥もバタバタと倒れ、親兄弟も見さかいなしに食いあうこの世の餓鬼道があらわれた。疾翔大力は、あさましく、はかない世の有様を見て涙を流した。なかでも、かれの棲んでいる人間の家では、母親と六つになる子の二人が餓死を待つばかりであった。途方にくれていた疾翔大力は、「日ごろの恩を報ずるは、ただこの時と勇み立ち」、疲れた羽で遠くの林まで飛んで行って十たび木の実を運んで親子の上にと落とした。十度目は、飢えと実の重さに目もくらみ五たび地に落ちたけれども、「報恩の一念」をつらぬいて自身はついでにむことなく、無事に実を親子に届けた。けれども、あまりに疲れ、届けおわって心の張りもゆるみ、そのまま倒れてしまった。正気に戻って親子を見ると、子は喜んで食べて元気になったが、母はその実を口に入れないまま、飢えて倒れようとしていた。

疾翔大力は、「はやこの上はこの身をもって親の餌食とならん」と決意し、いきなり身を床に落とし息を殺して目をつぶった。この捨身の功德によって、疾翔大力は願いかなって、その親子を養うことができたのみならず「つひに仏にあはれた」のであった。

しかも、法力を得て火の中、水の中に入っても身は傷つかず羽もぬれない大力の菩薩になられたのである。この経文は、大力の大菩薩が悪業のわれらを哀愍して「救護の道」を説かれたものなのである。

これが、疾翔大力を捨身大菩薩と呼んで尊敬するいわれなのである。ここには、この世の餓鬼道に苦しみ鳥や人間を悲しみ、それをおのれの痛苦とするのできる動物の心の奥深さが示されている。

しかも、自分を棲ませてくれている人間の母子を飢死から救おうとする「報恩の一念」を精いっぱいつらぬいた捨身の姿が語られている。同時に、その捨身によって仏に出会い、鳥の身から大力の菩薩に生まれかわり、法力をもって修羅道と餓鬼道に苦患する鳥たちを救護する慈悲にあふれた救済の精神を説きあかしたのである。

まさに、こうした報恩の一念による捨身の実行と修羅を脱して仏と出会い救済の世界におもむいてゆく菩薩行の烈々とした実践こそは、『二十六夜』という作品にこめた賢治の大いなる願いなのであった。「南無疾翔大力」「南無仏」と唱える声は、梟と同じように〈夜〉に象徴される暗い心の闇をとりのぞき精神の光明を求めた祈りのこころざしであつたにちがいない。

この捨身大菩薩が、経文を直接語った相手は爾迦夷という梟の先祖であつた。

爾迦夷上人は、早くから梟の身のあさましさに目覚めて「出離の道」を求め、一心に疾翔大力の尊い教えを聴聞して浄明の天上に赴いた、という。

毎月十三日が、この上人の命日であると述べられている。

梟法師は、この梟の先祖のきわめた出離の道をたどり、短い一生を空しくすごすことなく、疾翔大力の尊い教えに耳をすまして「離苦解脱の道」をなしとげねばならないと説法してゆくのである。

旧暦六月二十五日の晩。説法はまだ始まらない。始められないのだ。梟たちは心配し、おろおろ泣いている。じつは、この日の明け方、乱暴者の兄弟二匹といっしょに出かけた、おとなしい穂吉という梟の子が、人間の子どもにかまるといふ事件がもち上つていたのである。穂吉のおじいさんは、目を泣きはらし、母はしくしく泣き、父は穂吉

の捕まっている西の方を見ながらわが子の身を案じている。

穂吉の様子を見てきた梟は、穂吉が大きな薬屋根の中に捕われ足を赤いひもでゆわいつけられて臼の上にいる、と報告した。

穂吉は、ばたばたと羽ばたいてひもを裂こうとしたが、今はもうあきらめて臼の上ですわったり歩いたりしている、という。穂吉をつかまえた人間の子供は、穂吉が逃げないように足をひもで結びつけただけではなく、穂吉の目を指でつつこうとし、今は大の字に寝ているとも報告されてきた。

人間の子供によるたわむれのために、こうして賢い梟の子の穂吉が、ちょっとした不注意で災難にあったのである。穂吉の祖父は、今までのようになしなくして決して人に逆らうなど教えて来たらよいと、穂吉の父にいう。あわれじゃ、ふびんな話だ、できれば代わってやりたいと述べる梟法師も、前生の罪の報いとしてひどい目にあうのだ、あきらめて恨むようなことがあってはならない、泣けば心も沈む、たとえ足にひもがあろうとも、今ここへ来てはじめてとまった所だと、気軽にしていなければならぬと、悲しみをこめて語る。

災難を前生に悪いことをした、数かきなりい罪の報いであるという梟法師のことばには、悪因悪果の宿業への「あきらめ」が強調されており、罪悪深重の身であるが故に、災難を歎くべきではないのだという宿業への諦念が示されている。

しかし、こうした諦念の教えは、梟法師もいうように、「されども、とらわれた者はまた別」なのである。そこで、梟法師も万一の場合には、「たゞあの疾翔大力のおん名を唱へなされ」と教えるよう、穂吉の父にいうのである。

おそらく、梟法師つまり賢治は、「宿業の恐しさ」を徹底して凝視しなおさないわけにはいかない気持ちになって

いたのであろう。

この世界は苦界・忍土くがい にとどという。切ないことばかり、涙のかわくひまもない。業には、善業と悪業があるが、悪業を作るが故に苦界に生きねばならない。夜のくらやみはいよいよくらしい。そのくらやみに乗じて、内に残忍の想を潜め外に恐れ悲しむべき夜叉相やしやそうを浮かべて力のない小禽を殺す梟。その梟を捕えて苦しめる人間の子供。それは、他人事ではない。のみならず、今はところを替えて穂吉の身の上となって現実化しているのだ。弱者を嘲笑し小禽の痛苦を思わず、その身を引き裂いてきた罪業の身を見つめる時、宿業の恐ろしさに慄然りつぜんとしないわけにはいかない。

早くこの苦を離れる道を知ることが肝要なのだ――。

賢治のかかえた最大のテーマは、どうしたらこの修羅の苦しみから出離解脱しえるのか、その智慧の教えはなにかとい命題を探求することにあつたのである。

この命題への解答は、菩提心をおこし捨身の行ぎょうによって仏に出あう疾翔きりぎりす大力の道を歩むことにあつた。少なくとも、苦界における生の現実を見つめ、穂吉の受難に同苦同悲の思いをはせることによって、「まことの菩提の心を発す」ことが、一人の穂吉の功德をみんなの功德に普遍化してゆき、みなともに出離の道に参入することになるのである。

また、穂吉の受難を他人事とせず、それを解脱への種としなければ穂吉の功德を無に帰させてしまうことなる。願わくば、この功德をあまねく一切に及ぼし、我らと象生と皆ともに仏道を成ぜんと誓った賢治は、身を入れて穂吉の受難つまり、現実の辛苦を菩提の善業に転じてゆく出離解脱の道を探求したのではなからうか。

旧曆六月二十六日の晩。今夜は、穂吉が来ている。穂吉は、どうしても今夜の説法を聴聞したいといつて、母や兄弟に体をささえられながら横になっている。

その穂吉は、人間の子どものいたずらによつて、二本の足を折られたのだ。この子どもは、「あきて逃がしてやるよ」といつて、外へ連れだし、ボキッと足を折つて放したのだ。

人間の子どもは、ひいひい泣きしんと痛む身を放りなげられた穂吉の苦しみをまったく知ろうとせず、かえりみることもなかった。それは、まことに「あさましい人間の心」のあらわれである。梟よりも人間の方が、どんなに残忍きわまらないか、平然とひどい仕打ちをする人間の心とはなんとあさましいものであるかが、ここにつきつけられてゆく。

「あんまりひどいやつらだ。こっちは、何一つ向ふの為に悪ひやうなことをしないんだ。それをこんなことをしてよこす。もうだまつてはゐられない。何かし返しをしてやらう」という梟の思ひは、人間に対するあらゆる生きものたちの一致した世論にちがいない。

しかし、梟法師は

「なれども他人は恨むものではないぞよ。みな自らが、もとなのぢや。恨みの心は修羅となる。かけても他人は恨むではない」

と語る。自らを省みないで他を責めるならば、恨みは、恨みをよび、復讐すれば仇を受け、次の生まで妄執はたえない。「遂にはともに修羅に入り鬭諍しばらくもひまはない」からだ、と述べる。絶えざる妄執による鬭諍と恨みの心が修羅になるのである。

一方、穂吉のように、受難の痛みと苦しみを体験しながらも、なおひたすら疾翔大力の説く経文を聴聞しようとする捨身の心が菩提心なのだ、というのである。

穂吉どの、さぞ痛からう苦しからう、お経の文とて、仲々耳に入るまいけれど、そのいたみ悩みの心の中に、いよいよ深く疾翔大力さまのお慈悲を刻みつけるぢやぞ。いいかや、まことにそれこそ菩提のたねぢや。

これは、明らかに煩惱即菩提、生死即涅槃の教えを語ったものである。受難したわが身をいとわずに、痛苦する自己を見つめる心の中にこそ、梟の苦悩を救って解脱に導こうとする疾翔大力の慈悲と捨身の功德が刻みつけられ、菩提の種となるのである。

煩惱に即して菩提もある。それは、煩惱なくして菩提はないということでもある。小さな鳥や虫を殺す梟は、鷹やはやぶさなどの強鳥や人間を恐れ、不安にさいなまれ、いつもびくびくし、泣いて悔やんで悲しんで、生老病死の苦患に沈まねばならない。そして、身にしみこんだ罪業によって、流転をくり返し順次生にわたって梟身の輪廻を免れない。

それはまことに、「あさましくなさないわれらの身」なのだ。こうした、修羅の世界に生をおくらねばならない恐怖と不安を痛歎しつつ、情ないわが身の罪業を自覚し、慈悲の心をうけとって自己猷身の生き方をめざしてこそ、出離の道をきり開き淤泥にまみれた心に菩提の種をうえつけることができるのである。

闇があるから光もあるが、「いつも闇とみちづれ」の梟は、光明の月天子を憚かる悪業の身である、しかし、〈夜〉

とともに天空へ輝く月天子は、悪業の身から出離する菩提の光なのである。無明長夜の煩惱の身を転換させ、光明清浄の青蓮華を開花させる菩提の光芒こそ、月天子の光と紫雲の中に出現する捨身大菩薩なのである。まごころをもつて仰ぎ、身を捨てて「南無疾翔大力」と高く叫ぶ祈願の一念のうちに、「まごころの心」があらわれる、というのである。

二十六夜、月は黄金の船のように登り、紫の雲がたなびき、「金いろのりっぱな人が三人」雲の上に立っているのを、梟たちは見た。この三人は、疾翔大力・爾迦夷・波羅夷の三尊である。波羅夷は、天に行った鴉の先祖であろう。疾翔大力は、まん中において背は最も高く、大きな目で梟たちを見ている。星をちりばめたような立派な璣珞をけている。左右にいる少し背の低い立派な人は、合掌して立っている。その円光は黄金いろにかすみ、後光は青い。三尊は、雲に乗って近づいてくる。捨身大菩薩の体はさらに大きく見え、輝く左手が「南無疾翔大力」と高く叫んで拝む梟たちを、こっちへ招くように伸びたと見えた時、いい香が一面にただよい、紫の雲も疾翔大力の姿もかき消えてゆく。

これは、穂吉に代表される梟たちを捨身大菩薩が浄明の天上界へ迎え入れてゆく引導の有様を示している。黄金色の二十六夜の月が静かに天空にかかっている中で、穂吉は、「かすかにわらったまま」息を引きとった。

穂吉における死の微笑は、たしかに少し笑いながら心持をも安らかに天上の星となった、『よだかの星』とあい通じている。穂吉の死は、より強く残忍な修羅である人間による受難を原因としていた。その穂吉の救いは、痛み悩みをたえ忍んで、一心に疾翔大力を拝み、その尊い教えを聴聞し捨身大菩薩の慈悲を心に刻み功德をつんだ善果によるものであった。

すなわち、捨身の徹底が悪因悪果のあさましく情ない修羅の身を転換させる菩提の種であることを意味している。それゆえに、穂吉の受難と捨身は、疾翔大力に感応同交したのである。こうして穂吉は、臍身のまま修羅から出離して捨身大菩薩の世界へと導き入れられたのであった。

これは、穂吉ひとりのことにとどまるものではない。この苦患にみちた修羅の世界に生きるものが、菩提心をおこし、願を立て、難を忍び慈悲の心を刻み、「まこと」をめざして身を捨てて行くならば、必ず悪業を転じて無上菩提に参入することができる、ということであろう。

## 註

- (1) 『校本宮澤賢治全集』(以下『全集』と略)(昭和四十八年、筑摩書房)第二卷・二〇一―二二頁。『春と修羅』。
- (2) 『全集』第十三卷、一八三―一八四頁。大正九年六月―七月、保阪嘉内宛書簡。ここで賢治は「私なんかこのごろ毎日ブリブリ憤ってばかりひます」と怒りの赤さ眞青さをのべ、「人間の世界の修羅の成仏」のために「本當にしっかりとやりませうよ」と呼びかけている。
- (3) 『全集』第十一卷、三八―四五頁。
- (4) 『全集』同右、三八九頁、校異。
- (5) 『全集』第八卷、三三四頁。
- (6) 『全集』同右、二〇九頁。
- (7) 『全集』第七卷、八三―八九頁。

- (8) 『全集』第二卷、二一頁。
- (9) 『全集』同右、一四一頁。「無声慟哭」。
- (10) 『全集』第六卷、五一頁。
- (11) 『全集』第十三卷、四三頁、大正七年二月二日、宮沢政次郎宛書簡。
- (12) 『全集』同右、五〇頁。大正七年三月十日、宮沢政次郎宛書簡。
- (13) 『全集』第六卷、五八五―五八六頁。
- (14) 『全集』第十三卷、一七三―一七四頁。大正八年秋、保阪嘉内宛書簡。
- (15) 『全集』第七卷、二一頁。
- (16) 『全集』第十三卷、一七五頁。大正八年秋、保阪嘉内宛書簡。
- (17) 『全集』第八卷、一五一―一七二頁。
- (18) 『全集』同右、四六五頁。校異。
- (19) 例えば平来作「ありし日の思い出」(草野心平篇『宮澤賢治研究』二七二頁。所収)には「先生は法華経信者であった。私等宿舍の床につかんとして居る時、校舎の廊下からお経を唱へがんと校舎にひよかす事が度々あった」との証言がある。
- (20) 『大正新脩大藏経』(昭和三十六年四月十五日、大藏出版)。「雑宝藏経卷第十」四九八―四九九頁。

翻訳

『マオリ女性のタウマウ婚』

——『アミリア』より——

桜井真理子

はじめに

『アミリア』\*は、ニュージーランドの原住民・マオリ族のアミリアという女性の一代記である。オークランド大学の文化人類学者・アン・サーモンド女史が、インタヴューの録音をもとにして著したものであるが、女史は調査の対象としてアミリアをとらえているのではない。友情関係が先にあつてこの書物が実現したことを記しておく。

アミリアの出生に始まり老年時代に至るまでの自伝であるが、学生時代の話もあり、結婚の話あり、戦争の話ありで、前世紀末から今世紀後半に至るまでのマオリ社会、ひいては世界の歴史の一端がうかがえる。今回の翻訳は第四章「結婚」をとりあげた。生き生きした語りが伝わればと願っている。

ニュージーランドとニューギニアをとり違える人も少なくない我国では、マオリの存在すら知らない人が多いだろう。マオリはニュージーランドの原住民で、白人（おもに英国系）の到来前、高度に進んだ独自の文化を発展させていた。白人の襲来により、アメリカンインディアンやアイヌなどと同様に悲劇的な運命をたどり、一時は絶滅の危機に瀕したが、現在ではニュージーランド人口の一〇％をしめるまでに回復している。問題は少なくともはいえ、六十年代ぐらいからマオリ・ルネサンスの運動も起こり、マオリ文化を見なおし、伝統を守っていこうとする姿勢がマオリのみならずパケハ（白人系国民）にも浸透しつつある。

マオリ語を自由に使える人々はごく少数になってしまったが、学校教育に取り入れられるなどの努力は重ねられている。この本に見られる程度のマオリ語はマオリ社会でごく普通に使われているといえよう。マオリ人作家・イヒマエラ作品でもこの形式が用いられているが、まずマオリ語があり、その直後に何の印もなく英訳が並べられている。両者が平行して同等に存在しているのだ。マオリ語の部分は片かな表記で示し、英訳を日本語に訳した。また英訳のない場合は、かっこの内に意味を付した。

最後に、この作品を自分と遊離した遠い国の話と捕えずに、一人の女性の人生の記録として、また独自の文化が西欧化・近代化するということの意味を、我国の現状ともあわせて考えていただければと願っている。

「わたしのタウマウ婚」

わたしがチフスを患っている間も、長老たちは諦めませんでした。まだわたしのタウマウ婚（部族の長老間できめる結婚）をすすめていたのです。カレティがその事を話してくれました。ヒルハラマにダンスにかけた時、彼女は言いました。

「エイミー、前に話したタウマウ婚のこと覚えてる？ あの人たち今でも計画を練ってるのよ。」

「カレティ、わたしほんとに嫌になったわよ。どうしようっていうの？」

「わたし、関係ないわよ。エイミー、長老連のしていることよ。」

「こんどはどうしたいっていうの？」

「あなたのお相手を見つけたわよ、エルエラカファイアよ。」

「ばか言わないで、その人ずい分の年じゃないの！」

エルエラ・カファイアはルアトリアの老人でしたから、腰のおちつかないわたしをカレティがからかっているんだと思いました。皆が結婚させたいと思っっているのは、その老人の名前をもらった青年だなんて知りませんでした。

ずっと昔、ファカタネで人が亡くなってルアトリアからエルエラカファイアはじめ大勢がお葬式に参列しました。帰り道、彼らはブレンティ湾で一晩泊まりました。ラッコを訪ねると土地の女族长・ミヒコトウクトウクの具合が悪いとの話でした。お産をしたばかりだったんです。老エルエラはそれを知って、赤ん坊はどちらかと尋ねま

した。

「男の子です。」

そうきくと、彼はその子に自分と同じエルエラ・カフィアを名のらせたいと思いました。

でも、一緒にいた他の族長たちが言いました。

「それじゃ、あの子にあんたの名だけがついてしまう……我々はどうなるのかね。」

それで彼はお葬式に参列した人々にちなんでファカタネと付け加えることを提案し、皆納得しました。

出発の前に、老エルエラはミヒ族長を頂く人々に言いのこしました。

「この子が結婚する時がきたら、ルアトリアに返していただく。」

わたしは、こないきさつがあつたとは知りませんでした。カレティは説明し始めました。

「お相手はルアトリアのご老人ではないのよ。エルエラカフィアファカタネスターリングなのよ。覚えてるかしら……一度ここに来てタウマタオミヒに寄ったでしょ。」

わたしはその時のことをはつきり覚えていました。ウィリアムズさんのお宅にお世話になっていた頃のこと、家に帰ると男の子がマラエ（集落の中心となる広場）を走りまわっていました。アレタが、あれは従弟で、テアウテに行くところで、名前はディックだと教えてくれました。

「まさかあの時の子のはずないわよね。あのディック……」

「そうその人よ。エルエラカフィアよ——つまりディックスターリングなのよ！」

「もう沢山よ。」わたしは言いました。「もうその話はしないで……あの子まだ学校に行ってるじゃないの！」

それでも計画はすすめられ、母は年寄り連と闘っていました。母はハコバハエレワや皆に止めるように言いましたが、しかりとばされてしまいました。おまえさんには関係ないっていわれたんです。

「おまえはこの子を育てなかつた——我々が育てたんだ！」

それからこんなことを言う人もいたんです。

「そうよ。おばあちゃんが仕事に行く時はタビアとわたしがああ娘をみてたんですよ。ああ娘はわたしたちの孫ですよ——あなたはああ娘をおいて出ていったじゃないの。だからわたしたちに文句を言わないでもらいたいわ。わたしたちに権利があるんだから！」

さてさて母は皆にさんざん言われてしまったんですよ。母はわたしをこんなこと一切からのがれさせる手だてをあこれ考え始めました。一番いいのはオーランドにつれて行ってオーランドに住まわせることだと母は考えました。そうすればバケハ（白人）とめぐり会うこともあるだろうし、父方の親類と会う可能性もある——そういうことになれば、こういうマオリのごたごたから離れていられるだろうって。ともかく母はわたしをオーランドの博覧会につれ出す計画を練りました。母は、わたしがたいてい水曜日にウイリアムズさんのお宅からお暇をいただいているのを知ってましたので、ある水曜日に馬にまたがってトゥパロアからやってきました。母はウイリアムズ夫人に電話をかけ、わたしがおいとまする時間をききました。

「ふだんは三時に帰られますよ。」と夫人は言いました。「間もなくお帰りですよ。」

それで母はウイリアムズさん宅までやってきました。わたしたちはバ（村落）へは行かないで、タウマタオミとの近くの土手に座りました。母はわたちと静かに話しあいたかつたんです。誰にも知られたくなかつたんです。土

手に座ると母は言いました。

「タク コーレロ キア コエ、アミリア（おまえに話があるのよ）……長老たちがおまえにタウマウ婚を望んでいることを知ってるかい？」

「それなあに、母さん？」

「あのね、自分でお相手を選ぶのじゃなくて、長老たちが選ぶということなの。おまえは『はい』と言うだけでいいの。そうすればあとはみんなやってくれるのよ。おまえ個人の結婚ではなくて、部族どおしの結婚なの。」

「でも、長老たちの考えているディックスターリングはほんの子供で、まだテアウテにいるのよ。」

「そうなのよ。あの人たち何も気にしちゃいないのよ。」

「もちろんいやよ。そんな結婚したくないわ。」わたしは言いました。「いやよ。逃げたいわ。」

「ほんとなのね？」

「母さん、そんなの嫌よ。自分の相手は自分でみつけたいわ。自分でみつけれられるわ。ボーイフレンドはたくさんいるもの。バケハの友達でもなんでも。もし結婚したいなら、そうね、誰にしようって選べるわ。」わたしはほんとうに動揺していました。

あのね、おまえのこと考えて作戦を練ったのよ——切符を買っておいたから船で行くのよ。ルアトリアからのタクシー代をわたしが払うから、トコマルまで行ってアラフラ丸に乗るの、それでオー克蘭ドに行くのよ。身のまわりの物なんかを仕度して、それから出発よ。あなたがちゃんと落ち着くまでオー克蘭ドに一緒にいてあげるわ。それからわたしは戻ってくるつもりよ。」

かわいそうな母さんはこう言ったんです。

「ここから逃げなくちゃだめ。あの人たちの言うなりになったら絶対にだめ。」

それから母は、父が亡くなる時にした約束のことを話してくれました。手を握りあって、わたしをマオリでなくバケハと結婚させると約束した時の様子をです。

「だからアミリア、父さんとお約束が守れるよう助けてくれなくちゃだめよ。賛成してくれるなら、私と握手してほしいわ。バケハと結婚するって約束する？」

「約束するわ。」それでわたしはお互いの手を取りあい、母はわたしの手に、こんなふうに鼻をつけたんですよ。

「さて、キアカハ！ しっかりするのよ。姉さんたちは皆マオリと結婚したけれど、あなたは父さんの人々、バケハの側に戻らなければいけないわ。」

それから母は、翌々日にルアトリアでおちあうようにと言いました。

「自分のものを全部もっていらっしやい。でも行き先はおばちゃんにも言わないことよ……もし言えば、出て行くことがわかってしまうかもしれないもの。トゥバロアに行くって言ったほうがうまくいくかもしれないわ。」

「わかったわ、母さん。」

母はトゥバロアに帰っていききました。わたしは家に帰って縫いものを始めました。自分で着るすてきな洋服なんかをこしらえたかったんです。それで縫いものやアイロンかけをして、それから荷づくりを始めました。

ところが老ハコバが母を見かけていて、自分らの計画をアミリアに話しに来たにちがいないと考えました。

彼がそのことをわたしのおじのタマタイに話すと、タマタイは言いました。

「もしそんなところを見かけたら……ナタイアウテカキ首をしめてやる！」

翌日老ハコバが家につかづかど入って来ました。するとわたしが縫いものやアイロンかけをしているではありませんか。

「やあモコブナ（孫娘）、どうかね。」と彼は言いました。

「おかげさまで。」

「荷づくりをするみたいだね——どこに行くのかね？」

「トゥパロアに行くのよ。」とわたしは言いました。

「そんなこととしてどうなる？　なんでトゥパロアなんかに行きたいのかね？　あんな所に行つたつて母さんの子た

ちのめんどろを見るほか何もすることがないじゃないか！　母さんのためにあくせくすることはないさ。母さんは再

婚してあの子たちをみんな産んだんだ。自分で世話させりゃいいのさ！　ここにおばあちゃんたちといないな。お

まえは我々の子だよ。母さんの子じゃない。」

わたしはだまっています。

彼がいつ出かけるか尋ねましたから、わたしは、あした出かけるつもりよと答えました。彼は帰って行きましたけ

れど、その晩長老たちは集会を開き、その後また家にやって来ました。

「さーて、荷づくりはすっかりできたかね？」

「ほとんどできたわ。」

彼はわたしの服をばつばとひつつかむとスツケースに詰めるのを手伝ってくれたんです。

「まだあるのかい？」

「いいえ、これで全部よ。」

彼はひもをかけ、わたしに荷札を書かせ、それを結わえつけるとスツケースを持って出て行きました。

わたしは追いかけて行って言いました。

「エ、コロハコバ——ハコバじいちゃん、どこにわたしのスツケースを持って行くの？」

「持って行って見てやるよ。」

「いいのよ。ここにおいていて。」

「仕度ができたら取りにおいで。この家よりわたしの家のほうが安全だからね。誰かがぬすみに来ないとも限らんからな。」

それでわたしは持って行ってもらいました。ひょっとしたら力になってくれようとしているのかもしれないと考えたんです。

その夜、夕食のあとまたやって来ましたよ。

「アミリア……おまえに来てもらいたいんだ。おまえに話したいことがあるんだよ。」

またきなすったなと思えましたよ。行って聞くべきかどうか迷いました。それでただ一言だけ言いました。

「ええ、わかったわ。」

彼が帰ってから、家の裏手に行きカレティに口笛で合図しました。「ピーピー！」彼女は出て来て、まわりを見ま

わしてからこちらにやってきました。

「カレティ、集会があること知ってた？」

「ええ、前に話したタウマウ婚のことよ。」

「おじいちゃんが来てたのよ。わたしのカバンを持ってたわ。わたしのために見てくれるっていうの。」

「ほんと……そうだといいけどね。」それから彼女はわたしを見ました。「どう思っているの？ エイミー。」

「いやだわよ。」

「それじゃどうするつもりなの。集会に来るつもり？」

「あのー、いかないほうが安全だと思う？」

「わからないわ。もしかすると来た方がいいかもしれないわ。カバンを渡してもらえないかもしれないもの。」

そこでわたしは思いましたよ——そうだわ、それでカバンを持っていったんだわ。

「わかったわ。それなら集会に行った方がいいわ……」

集会が始まるとカレティが呼んだので出かけて行きました。でも祖母はわたしをかわいそうに思っていました。入って行くと祖母が座っていて、わたしを見たんです。目に涙をうかべているのがわかりました。それを見た時、すぐにおかしいなとわかりました。わたしは座り、老ハコバは立ち上ってわたしに子供の頃の話を始めました。

「聴いておくれ、アミリア・マヌタヒよ……おまえを育てたのはおまえの母さんじゃないんだ。我々ティブナ・年寄りたちなんだ。我々こそがおまえを愛し、世話をしたんだ。母さんといったら、あの女はいったい何の役に立つというんだ！ あの女は別の男と所帯を持ち、別の家庭をつくった。それなのにずうずうしいじゃないか、のこのこや

って来ておまえのことでひとくさりしゃべりおったよ。我々は、今でもこれまでどおりおまえを愛している。我々はおまえに母さんのようになってもらいたくないんだよ。夫が亡くなると別の男と結婚し、それからまたその夫に先立たれて別の男と結婚する……」

彼の言うとおりでっただんです。ウィリハナ・タタイは四人目の夫で、年寄りたちはそれが気に入らなかつたんです。彼らはわたしが欲しいだけ、ただそれだけでした。母の生き方に口を出そうというのではありませんでした。それから彼らはなぜこの結婚にこれほどまで執心しているのかを話しました。それからエルエラ・カフィアのことや、どういふとで同じ名前のエルエラ青年がルアトリアの女性と結婚する必要があるのか、ということは何やかやと説明しました。

「我々はおまえに従弟のエルエラ・カフィア・ファカタネと結婚してほしいと思つている。彼は、おまえと同じにこの出だ。父方はテ・ファナウ・ア・バヌイで、母方ではこの出だ。だから我々は結婚を願つている。ただ『はい』と言つて欲しいんだ。」

ヒカマー！（まあなんてことでしよう！）わたしは何と言つたら良いのかわかりませんでした。

「さて——アミリアどう思うかね？」

「わたしその人のこと知らないわ。知つてる人ならいいかもしれないけれど——女はお相手を知つてゐる方がいいよ。皆さんご存知でしょうけど、わたしは知らないもの。」

「そんなことはどうでもいい。同意してくれさえすればいいんだよ……『はい』と言えばそれで一件落着だ。そして我々は万々歳だよ。」

「でも、今承諾してもすぐには結婚したくないわ……二年間は婚約期間にしてほしいの。そうすればお互いのことがわかってくるでしょうから。」

「そうしたいのかい？」

「ええ。」

「まあいいだろう。」

わたしは、これですましくと思いました。カバンをもらったらすぐ出発しよう。二度と帰ってこないわって。

「じゃそういうことで。」とわたしは言いました。「母とオーランドの博覧会に行つて来ます。この二年間のこと覚えておきます——二年といえはけっこう長い時間だわ。」

「いやだめだ。」とハコバは言いました。「おまえに行つてもらいたくない。婚約者に会つてもらいたいんだ——ブレインティー湾に来てるんだよ。」

「なんでなの？ 会うんだつたら——時間はたっぷりあるわ——二年間もよ。オーランドから帰つてきてからにするわ。」

彼らがるさい事を言い続けるつてわかつてきましたから、席をたつて来て寝てしまいました。翌朝、仕度をしてからカレティを呼んで、おじいちゃんにカバンをかえしてくれと伝えてもらおうとしました。ところが本人が家にやってきましたんです。

「さて、話があるんだアミリア……オーランドの博覧会に行くそうだね？ カレティとアレタとわたしも行くんだ。我々は船でなくて馬で行くんだ。一緒においで。おまえが馬を持ってないと知つてるから、一頭買つておいた

よ。」

わたしは彼を見ました。「わたしに馬を買ってくれたの？」

「そうさ——新しい鞍や手綱なんか全部だよ。おまえは今や族長級の女なんだよ。アミリアアマスタヒ。」

「あらー！」とカレティが言いました。「すごいわねー、馬を買ってもらうなんて。わたしなんか持っていないのにね……ほんとにすごくラッキーな娘だわ。わたしには一度だって買ってくれたことないのよ。」

わくわくしてました。当時馬を持つていうのは今なら車を持つてみたいなことだったと思いますよ。わたし思ってたんですよ。わーすごい。馬なんか一度も持ったことなかったのに、馬も鞍もみんな手に入るんだわって。

「おまえは全然お金を払う必要もないさ」とハコバが言いました。「足代もいらぬし——帰ってきてても馬はそのままおまえのものだ、運のいい娘だよ。」

それからカレティが馬をつれてきました。この馬を目のあたりにした時……わーっ、すごい！ カラウエ——すばらしい！ しかも競走馬だったんですよ。K・S・ウィリアムズさんから買ったと言ってましたけど、ウィリアムズさんは貸して下さっただけだと思います。カレティはすっかり鞍の用意をしてくれました。

「さあ、馬に乗るのよ。ルアトリアに行きましょう。」二人とも馬にまたがって、彼女がうしろに乗ってルアトリアまでバカバカと走って行きましたよ——わーい、すてき。わたしたちは何もかも忘れてました……ずっーとマンガハナまで行って、みちみち口笛を吹いたり歌ったりしながら家に戻ってきました。家に着いて馬をパドックに離すと彼女が言いました。

「ほんとにラッキーな娘ね。わたしたちと一緒に来る？」

わたしは言いましたよ。「もちろんよ！」

それできまりでした。その午後、ハコバが馬で一緒に来ないかと尋ねました。わたしは行きますと答え、彼はわたしのために荷づくりを全部してくれました。そんないきさつがあつてラウココレに行つたんです。

灣まで約三日かかりました。当時は今みたいな道路はありませんでしたからね。まずひどいものでしたよ。山を登つたり降りたり獣道しかなかったんですもの。でも老ハコバはいつも泊まる所を知つてましたよ。ある晩はここ、それから翌日はラナウエイ岬に行つてそこに一晚という具合でした。おもしろいことに山の方からいつたので岬はとてきれいな見えたんですよ。当時はずつと茂みになっていて、突然浜辺に出て海が見えるんです。その海を見た時すばらしい物に触れたっていう感じがしましたよ。ただ立ちつくして見ていました。それからお日様に気がついたんです——おかしいじゃないと思ひました。日の入りだったんですが、お日様が海に沈んでいくんです。でも故郷ではいつも反対でした。お日様は海から昇るんです。それであの海岸を「タイラファイティ（日の出海岸）」と呼ぶんです。世界で一番はやくお日様を見るからです。子供の頃、朝、海が赤く輝くとき、わたしたち皆家の前を駆けて叫んだものです。

「わーい——タマ テ ラ！……タマ ヌイ テ ラ！」——お日様が生れるよつていう意味なんです。海の下で眠つていたのが昇つて来るんです。

「タマ ヌイ テ ラ！」

お日様の光が水の中からはい出てくる所を見たものですよ。それで突然ぱつと赤くて丸い大きな光の玉——それがタマ ヌイ テ ラ！ 昼の光、太陽の輝きなんです……そしてヒ克蘭ギ山のうしろに沈むんです。

でもこのとき、太陽が海に沈むのを見ました。

「カレティ」とわたしは言いました。「あのお日様はね……昇っているんじゃないわよね。沈むところよね。昇ったばかりですぐ沈むみたいに見えるわね。」

「そうなのよ。」とカレティは言いました。「これがこの日の入りなのよ。ルアトリアとは違うのよ——あっちでは日の出、こっちでは日の入り。」

なんて不思議な所、とわたしは考えました。わたしたちには日の出で、ここの人たちには日の入りだなんて。

『わたしたちは、ワナウ・ア・バヌイの土地にいるのよ。』と彼女は言いました。「ここはブレンティー湾よ。間もなくワイハッ湾につくわ。」

「ワイハッ湾——いったいどこなの？」

すると彼女はくすくす笑い始めました。その時から皆がなんでも隠すようになりました。

「なんて言ったの、カレティ？」

「べつに……」

それから歩いている女性に出会いました。その人はラウココレの教会の横の郵便局に行ってきたところでした。その人がミヒでした。彼女が他のものたちに呼びかけたので、ははーん皆彼女を知ってるんだわと思いました。彼女は、自分を待っていないで家に行ってくれと言いました。

「あの人誰？」とわたしはカレティにききました。彼女はくすくす笑ったので、わたしは知らん顔していました。

ミヒの家につくと——まあ、当時のあの家ときたら！ スターリング城って呼ばれてたんですよ。ダンカン・スタ

ーリングは建築業者で、家をすっきりきれいに塗ってましたよ。でも今は見るかげもないんですよ。ともかく我々はその間に一夜をすごしたんです。老人たちが集会らしきことをしてるのがわかりましたけど、わたしはいつもどこかにやられるんです——カレティが馬で一乗りしようってつれ出したりして。

翌朝、ハコバがタウランガに行くと言いました。タウランガ出身の女性がオマイオで亡くなって、土地の人々が大勢で亡骸を故郷まで運んで行くことになったのです。ハコバは、わたしは母方でタウランガの人々と親戚関係なのだから行ったら良いと考えたのです。そこでわたしは馬をラッココレにおいてオマイオからの一行と一緒に船でかけました。

わたしはあのマラエ（村落の中心の広場）を今でも覚えています。ミーティングハウス（集会所）に入るとき、正面の扉の前に星がありましたよ。でもあれ以来見たことがないんですけれどね。とにかく、着いてみるととても大勢人が集っていました。盛大なお葬式でお年寄りたちは泣いていました。カレティとアレタが彼らの言葉を聴いてごらんと言いました。

「あのお年寄りたちはあなたに話しかけているのよ。アミリア、あなたはちっとも気がついてないのね。話してるのを聴きなさい。」

「でも話してるんじゃないわ、泣いてるんだわ。」

「あなたのためによ、アミリア——みんなはあなたへのタンギ（お悔やみ）を言っているのよ！ 耳を傾けてごらんなさい。あなた聴いているの。」

それで私は聴きました。そのとおりでした。彼らはわたしに話して居るのでした。もう一人女性が亡くなっていた

んです。北出身の人でタウランガの男性と結婚したんです。それでその日七台の車がやって来て亡骸をポットゥにつれ帰ったのでした。土地の人たちはその女性をタウランガに葬りたかったんですが、父親がだめだと言ったので故郷に帰さなければならなかったんです。それでマラエで大げんかをやったんです。それでお年寄りたちはわたしに話しかけているのでした。わたしたちが、もしかしてもう少し早く到着していたら、わたしがその女性をここに埋葬してくれとたのめたかもしれないんです。その父親がわたしの母の従兄だったからです。

あのね、母方の祖母のアミアレムはウイレムはバラタモイヒーカーと結婚したんですけどね、その人はほんとうは北出身の人だったんですよ。捕鯨をやっていたものでこの沿岸に来たんです。彼は捕鯨船に乗って来て、何か事故にあったんです。それで彼一人だけが岸にたどりついたんです。痛い目にあわせてから故郷に送りかえそうという人たちもいたんですが、他のみんなはかわいそうに思っていました。

「やめなさい、そんなひどいこと。この人だけが助かって他はみんな亡くなったんだから、このンガはプロヒのために悲しんでしかるべきですよ。」

カウマトゥア（年寄り）たちが言いました。

「手を出しちゃいけない。パイ アナ テナ（だいじょうぶだよ）、あの男がほんとのことを話しているかどうかみてみようじゃないか。海に連れ出して鯨を捕れるかどうか見てやろうじゃないか。」

それで彼らはこの男を漁につれて行きました。すると全く突然何かがかかりました。この男がその魚をつりあげたのです。最後にはみんな彼に一目おいていました。漁に出るたびに必ず何か捕ってきましたから。そうやって女性もつかまえたんでしょ、たぶん。とどのつまりわたしの祖母と結婚ということになったんです。

二人の間には三人の娘がありました——ヘラ、ベタ、アワテレの母のヘニ、ハウタオ、わたしの母のアニの三人です。上の二人は故郷で結婚しましたが、ウィレム、バラタはンガティ、ポロウ族の人々に、アニを北で結婚させてくれとたのんだんです。本人は妻のいるトゥパロアに骨をうずめるつもりだったんですが、娘に自分の魂を故郷につれ帰ってほしかったのです。

それでアニは北につれていかれたんです。ウィレム自身がつれていって、ポットウ族のカフィ、ケナに嫁がせました。彼女は夫との間に二人の子をもうけました。アニとテオです。それでわたしたちは皆少し北の血がまざっているんです。

ともかく、ようやくわたしたちの送り届けた亡骸のお葬式がはじまりました。そしてまた大げんかになりました。ハコバ、アレワが火ぶたを切りました。この人がオマイオに行ったからのろいをかけたんだらうと彼は言ったんです。この人はオマイオに着くととても重い病気がかかって亡くなったので、彼はそんなことを言ったんです。

「あなた方がこの女性を殺したに決まってる。」

土地の人たちはかんかんになって、彼を責め立てました。いったい何様のつもりなんだ、母親は誰なんだ、父親は誰なんだ？ 皆は、彼に出ていけと言いました。

「おまえはこの人間じゃない——とっとと来た所へお帰り！」

それからわたしたちを殺しかねない様子で彼らは立ち上りました。わたしはおびえていましたよ。昔のことですから、これでいっかんの終りだと思いましたがよ。幸運なことに、我々の一行の中にブレンティ、湾の女性と結婚しているタウランガ出身の男性がいて、その人が立ち上ってこの人たちをそんな風に扱うんじゃないと言ってくれたんです。

ハコバハエレワはシガタイホロウ族の人なのに、ご親切に亡骸を連れかえってくれたんですよ。それなのにわたしの故郷の人たちがブレンタイ湾の人たちにこんなことを言うなんて、あんまりですよ。こんなことがあっては、わたしは帰ってこの人たちと一緒に暮していられないじゃないですか。彼の非難のことばのおかげで、ついに皆謝ってくれました。

その夜マエラでダンスパーティーがあつてまたけんかさわぎが起きました。わたしが原因だったそうです。わたしは今でもどうしてけんかになつたのかわかりません——誰とも出かけたらしませんもの。とうとう帰ることになつたときは嬉しかったですよ。オークランド行きも延期にしました。けんかはもうたくさん、家に帰りたいわと思ひました。

それでわたしはラッコレに帰りました。到着するとみんなで大さわぎでした。あんなけんか続きでなくて、大歓迎してくれるのは気持ちの良いものでした。幸福な気分になりました。

でもカレティとわたしが寝室に行つてみると部屋の様子ががらりと変わつていました。前はわたしたちのためのシングルベッドが二台あつたのに、大きなベッドが一つだけ置いてありました。私は思ひました。一台のベッドで二人寝かせるつもりかもしれないわ。お年寄りにはそのほうがめんどうでないから……

その日の午後礼拝がありました。老ダンカンスターリングは人がいようがいまいが、しょっちゅう礼拝をしていました。わたしはこれは偉いことだと思ひます。家族の者たちは礼拝をきらつて、老人が壁をバンバンとやるのをきくとすぐダンスパーティーだの何だのに逃げ出してしまふんです。でも彼は一人居間に立つて礼拝をしていたのです

よ。わたしは好きでしたけどね。わたしはウィリアムズさんの所にお世話になっていた頃、そういう教育を受けましたからね。あそこではいつも礼拝をしていましたよ……それでわたしは今でも何よりもまず礼拝を大切に思っています。礼拝が終わると、老ハコバが立ってわたしに話しはじめました。

「アミリア、ミヒコトウクトウクはここの女族長なんだ。ルアトリアで同意したタウマウ婚のことを覚えているかい？ エルエラカフイアはこの方のむすこさんなんだ。ミヒ族長はバケハ流の婚約には同意して下さらない。我々としては、おまえに今夜、従弟と床を共にして欲しいと思ってる。」

それはショックでしたよ、もちろん、いったいこれはどういうことなのと思いました。

「いやよ！」とわたしは言いました。わけがわかりませんでした——彼はまだテアウテにいます。頭がおかしくなってきましたよ。もめ事だの何だの色々あったあとでしたしね。オークランド旅行がだめになったあげく、今度はまた例のタウマウ婚のことでしょう。

「何だって？」とハコバが言いました。

「いやよ！ カオレ（いや）！ まだほんの子供じゃないの。わたしの方が年上よ。二年待てば大人になるわ。」するとミヒが立ち上ってわたしに話しはじめました。

「お聞きなさい……あなたはわたしの家にいるんですよ！ あなたのマエラでなら、そうよね、あなたが長よ、でもここはわたしのマエラなのよ。わたしはこの族長なの……だから聞きなさい。皆があなたとあなたの従弟のエルエラカフイアとのタウマウ婚に同意したんです。言わせてもらおうと、これはバケハの婚約より良いやり方ですよ——二年なんて長すぎますよ！ あなたが今のままでいるという保証はないですからね。他の人に気が移るとか色

々あるでしょうが。だからこういうのがマオリのやり方なんです。今晚、あなたとあなたの従弟は床を共にするのよ。部屋も用意してあるし、すべて準備ができているのよ……皆が全部ととのえてくれたんです。」

そんなつ……体が震えはじめました。震えながら立ち上り、いやよ、いやよって考えました。あんな人たちに負けないわって。

ハコバがわたしをどなりつけました。

「立つんじゃない。すわるんだ！ おっしゃった事をきいただろう。ここはこの方のマエラで、この方がこの長なんだ。いい気になるんじゃない——すわりなさい！」

わたしは泣き始め、すわりました。

「話を聞いたらどうなの。我々はあなたをおとしめようとかなんとかしているんじゃないのよ。あなたを族長にしようとしているのよ。」

「わたしは族長なんかになりたくないもの。お家に帰りたいわ！」

ミヒは言いました。「いいかげんにしなさいよ。泣くのをおやめなさい。もう何も言わないで。あなたに名誉を与えようとしているのよ。」

彼女はわたしの手をつかんで寝室にひっぱって行きました。

「お手洗に行きたいわ」とわたしは言いました。うそでしたけど。外に走って行ってお手洗に入りました。そしてすわって泣いたんです。彼らはわたしを見張っていましたよ。おわかりでしょう。カレティが呼ぶのがきこえました。

「エイミー、エイミー、出てらっしゃい。戻ってちょうだい。ずいぶん長いこと入っているじゃないの。」

「わかったわ。いくわよ。」

わたしが何をしてたかおわかり？ 馬をさがしてたんですよ。さっきは家の裏のポフトゥカワの木の下につなぐれてたんですけど、もうそこにはいませんでした。馬の居場所さえわかったら、それに鞍と手綱があれば、あの馬に乗ってルアトリアの家にかえられるのと考えていました。その時、勝手口に立ってこちらを見ているお手伝いのスーザンに気づきました。彼女はくるっとむこうを向いて家に入って行きました。わたし思っただけです。もしかして、スーザンにたのんだら馬をつれてきて生垣きの中に入れてもらえるかもしれないわって。そこにつないで口笛をふいてもらうの。口笛をきいたら、馬に鞍やなにかの用意ができたってわかる寸法、そしたら走っていくのよ。誰にもつかまえられるいわ。それでカレティが食堂に入ってから、家に走りこんだんです。スーザンは柱にすがって泣いていました。私は彼女を両腕に抱きました。

「スーザンたち、どうしたの？ 気分でも悪いの？」

「いいえ。」

「それじゃ、どうしたっていうの？」

「あいつのせいですわ。」

「誰？」とわたしは言いました。

「あのいまましいディックですよ。あの人わたしといろいろでかけたりしていたんです。あの人とわたしはおわかりでしょう。それなのにあなたがあの人と結婚するんですもの。」

「でも、彼はティアウテにいるんですよ。」

「いいえ、ここにいます。ほんとですよ。見たいですか？」

「ええ。」

彼女は身をかがめてドアをほんの少しあけました。あの人はベッドで寝てましたよ。

「ほらね」と彼女「あん畜生！」

見るとほんの子供でしたよ。髪の毛が目にとまったのよ。ごわごわと立っていたわ。他の兄弟はみんな天然パーマだったんですよ。あとになって、そのことでよくからかわれたわ。タイはよく言いに来たものよ。

「それじゃこいつと結婚するのかい？ あのキナとかい！ あのうに野郎とね！」そういって自分のカールのある髪をみせるんですよ。それからワハが言うのよ。

「そうだよ。ぼくのカールはどうだい。ほらみてよ！」彼らはわたしにカールをみせびらかしてましたよ。彼らの言うとおりに、なかなかすてきなカールでしたよ。

わたしはスーザンに言いました。

「ねえスーザン、わたしの言うとおりにしてちょうだい。あなたあのときあつてるのよね」

「そうなんです。あいつめ！」

「だいじょうぶよ。きいてちょうだい。あの人はあなたのものよ。わたしは遠慮しとくから。だからこうするのよ。わたしの馬をつれてきて鞍をつけて……あそのこんもりした生垣きの茂み見える？ 馬をあそこにつれてきて用意ができたなら、勢いよく口笛を吹いてちょうだい。いったん馬にまたがったらここから逃げ出すわ。うけあうわスーザン。みんなには絶対つかまらないわ。やっつけてくれる？」

「やりますとも。」

「昼間はだめよ。見つかっちゃうもの。暗くなるまで待って。」

「わかったわ、エイミー。」

「待ってるわ、きき耳たててね。」

暗くなってきたので、わたしは部屋に行つて荷づくりを始めました。カレティとアレタがいなかしらと見まわしましたけど姿が見えませんでした。一人にされたのははじめてで、どうしてよいのかわからなかつたわ。話す人がいないんですもの。カパンを用意してから窓をあけました。口笛をきいたらすぐ飛び出して、あの茂みまで道をまっしぐらに走つていこうと思つていました。口笛を待っていました——まだかしら、まだかしら……

ハコバが入ってきました。

「いいかいアミリア、今晚従弟と寝るんだよ。さあ仕度をしなさい。コートを着たままじやベッドに入れないよ。」わたしは泣き始めました。ハコバはわたしにコートをぬがせ寝まきを渡して着がえをさせました。スーザンたらずい分時間ががかるのねえ。ご老体がいなくなると窓のそばに座りました。

するとデイックが入ってきました。パジャマ姿でした。

「ベッドに入るんだよ！」

あの人はわたしをベッドの方へひっぱり始めました。

「さわからないで！ まだ夫になつたわけじゃないでしょ……」

「でもぼくは……」

だからわたしは窓から飛び出して走り始めました。ほんとに傷ついてしまっておぼれて死んでしまおうと思ったのよ。まっしぐらに浅瀬へ走って行きました。先のさきまでずっーと行ったんです。行ってみると波がどどーっ、どどーっ、と岩をかけのぼっていました。わたしは、祖母に向かって叫びました。

「おばあちゃん！ おばあちゃん！ お家に帰りたいよー。わたしはこんなこといやよ！」  
ちょうどその時アレタが叫んでいるのが聞こえました。

「アミリア、アミリア、エイミー。そんなことしないで、だめよ、だめよ、だめよ、もういいのよ。家に帰るのよ。……やめなさい……」

彼女に引き戻されてわたしは石の上におれこみました。それから彼女はわたしをしっかりとみました。二人でそこにへたりこんで泣きました。彼女はわたしを離しませんでした。

「そんなことしないで。家にもどって。ルアトリアに帰るのよ。やめなければ。こんなことだめよ。だめよ。」  
それからカレティも来て、二人でわたしをちゃんと連れもどしました。わたしは誰か口笛を吹かなかったって尋ねましたよ。

「アディー、誰かが口笛吹くのをきかなかった？」

「きかなかったわ。」

「誰も吹かなかった？」

カレティにもききました。

「誰も吹かなかったわよ。」

わたしは考えましたよ。かわいそうなスーザン、ばれたんだわって。二人はわたしを家に連れて入り、老人たちはわたしにたっぷりお説教しましたよ。ミヒ老人——話し方がこわくてにおびえてたのよ——が入ってきてわたしは見ただけでした。

「もうばかな事はやめなさい！ 我々があなたをおとしめようとしてるんでも思ってるの、奴隷にしようとするでも？ ちがいますとも。わかってるでしょ、あなたに名誉を与えてるんですよ。それなのにこんなことをして。悪い娘ですよ。老人たちはもうあんたなんかどうでもいいと思ってるわ。あなたには親戚も何もなくなるのよ！ あなたはわたしをこけにしたのよ。もうしないって約束しなさい——約束の握手をするのよ……」

わたしは彼女と握手しました。

「わかったわね。やめるのよ！」

カレティとアレタとわたしは一緒に寝ました。わたしが眠ると二人は起きて出て行ったんですよ。エルエラが入ってきてわたしと床をともしました。

そうする他なかったのね。次の日はあの人たちにとってたいそうな日でしたよ。みんなが訪ねてきて挨拶したりしました。気がかりだったのは——あの日から今日までずっとですけどね——馬がどうなったかわからなかったんですよ。スーザンは見つかってぶたれたそうなんです。それからあの馬、ワイテレはルアトリアのK・S・ウィリアムズさんの所に戻されたんだと思いますよ。

結婚式はずっと後でした。全てが決まったと知ると、故郷の人たちが電報で、結婚式の品々を持っていくと言ってよこしました。カイ（食料品）、クマラ（さつまい芋）、肉などすべてです。ミヒも黙ってはいませんでした。

あーあ、またンガティ、ポロウの人達のやりそうなことよ。こっちに何も無いと思ってるのよ。で、何でもかんでも持ってきたいのよね。そんなばかな。こっちだってカイ(食料品)は沢山あるわよ。食べ物はいっぱいあるのよ。なんだってたくさんあるわよ。あの人たち身一つで来りゃそれでいいのよ。」

それで彼女は言っちゃったんです。自分たちのカイはしまっておきなさい。持って来る必要はないって。でも遅かったんです。じゃがいも一トン、さつまいも一トン、ビスケットの箱、かんずめの果物などありとあらゆる物がすでに定期船につまれています。あっちでは式の日どりまで変えようと思いましたけど、ミヒは同意しませんでした。日どりが決まるとオポティキに行つてドレスの寸法をとってもらいなさいと言われました。当時はどこへ行くのも馬でしたけど、それはだいたいじょうぶでした。昔の女の子たちは馬に乗るのが好きでしたもの。わたしは行つてドレスも用意して、ブライズメイドもみんな決まりました。ドレスはとても素敵でした。すばらしい白いシルクだったんですよ。

ミカ、エルエラの母親の老メリが訪ねてきたのは式の数日前のことでした。わたしたちと同じ日にミカとエウァにも結婚式をさせてよいだろうかとミヒにうかがいをたてに来たのです。とにかくもう一緒に暮らしてるからということでした。ミヒはわたしを呼んで話をきかせ、みんなでそれはいいということになりました。ミヒが唯一心配したのはケーキのことでした。式のたった一週間前のことでしたから、わたしたちのケーキは用意してありましたけれど、新しいケーキのお砂糖細工をかためる時間が充分とはいえませんでした。メリは途方にくれていました。彼女は言いました。

「ミヒ……あなたにおまかせします。」結局、エルエラがオポティキまで行つてケーキを持って帰りました。トラ

ブルもありましたよ。お砂糖が柔らかすぎて流れおちたんです。それをみた時エヴァは泣きそうでした。

「気にすることないわ、エヴァ、」とわたしは言いました。「いいこと、ワイハッの店に行つて店中で一番大きな白  
いリボンを買つてくるの。それでかくしておけば、誰にもわかりっこないわ。」

ほんとうにそうしたんですよ。

白いリボンをまわりに巻きつけて素敵なケーキができました。

ついに結婚式の準備がすっかり整いました。その晩、シガティールポロウの皆がテリハウキリテイキラウ マラエ  
に到着しました。今はなくなりましたけれど、昔は教会のあたりにあつたんです。自分の準備で手一杯のわたしは、  
でかけて行きませんでした。夜もずいぶんふけた頃帰宅したミヒが、ミーティングハウスに行つて皆に会つてくれと  
言いました。もめているというのです。やれやれ今度はなんだつていうのかしら、と思ひました。

「あなたの所の人たちが、また別の問題をおこしてるのよ。ウェディングドレスも何も用意万端整つていてい  
うのに……あの人たちつたら自分たちのドレスなんか持つて来て、わたしのはいらないつて言うのよ。みんなまとめ  
て帰つてつて言いたい気分よ——あの人たちと口をきくのはうんざりだわ。」ミヒはかんかんでした。

どうしたつて皆に会いに行かなければなりませんでした。

ミヒとわたしがミーティングハウスに入つていくと、この問題でまだもめていました。でも、わたしが入つていく  
と皆床にすわりました。

「ハラマイ ラ モコブナ、ハラマイ エ ヒネ……（よくきた孫よ。よくきた娘よ。）」おわかりでしょ。挨拶  
のことばです。

おじのタマティがおり、まだ立って話をしていましたので行って握手をしました。それからアレタヤカレティや老ハコバもいてわたしを抱いてくれました。

「どうだい——すべて順調かい？」

「ええ、だいじょうぶよ。」

わたしが座るとおじのタマティ、カイワイがまた話しはじめました。ウェディングドレスのことでした。床に敷物が広げられ、ドレスと靴とベールが並んでいました。タマティが言いました。

「我々はこの結婚に同意しました。……でも孫には我々の用意したドレスを着て結婚して欲しいのです。この結婚は部族間で決まったものです。この娘を身一つで嫁がせるわけにはいかないですよ。ミヒ、あなたはこの娘のためにドレスを作って下さった——それはいいこうかまいません。でも指輪が指にはめられるまでは、この娘はあなた方のものではないんです。我々のものなのです。ですから我々はこの娘にドレスを作ってやったりいろいろしたいんです。そこで、もちろん老女族長が立ち上りました。

「ア、テナ！（まあまあ！）どうしてウェディングドレスが二枚なくてはいけないでしょう。花嫁が二人いるのかしら？ 我々のドレスはアミリアのためにあつらえたもので、彼女のものです。あなた方のドレスがこの娘に合わなかったらどうするおつもり？ こちらで作ったドレスをくれとは言わせませんよ。いやですとも。もしドレスが合わなかったら、首に結わえて教会に行かせることね。ンガティ、ポロウの方々、あなたたちは傲慢ですよ。わたしにこんなしうちをするなんて。最初はごちそうのことで、今度はこれですから！」

するとタマティがまた言いました。

「ここにあるドレスはおまえの故郷の人々のものだよ、アミリア。最後はおまえが決めるんだよ。わたしたちのドレスを教会に着ていってくれるかい？ おまえにしてやれるのもこれが最後なんだ……」

わたしは考えてました。もう、どうしようって。もう一枚のドレスはびったりだってわかっている、だってあつらえたんですもの。でもこちらの方はどうなのかしら？ それにミヒは、合わなかったら首に結わえていけなんて言っていたし。わたしはドレスに目をやりました。その時、座って、こちらをみてわたしに目くばせしているカレティに気づきました。カレティの目は、こんなふうには言っていました。あなたとわたしはサイズが同じだから、ドレスはわたしにあわせて作ってあるわよ。ダンスパーティーに行くときはいつも、いいドレスがなかったりするとよく彼女のを借りたりしたものでした。それでドレスがびったりだってわかりました。

「おまえが自分で選ぶんだよ。アミリア。明日どっちのドレスを着るのかい？ 故郷の人たちのかい、それとも義理の母親ミヒと夫・エルエラ＝カフィアのかい？ わたしは立ち上り、歩いて行って敷物からドレスを取り上げ、かきました。

それをみるとみんな大喜びで、歌い始めました。

コア、コア、コア、ハリ タク ングカウ！

コア、コア、イ ング カトア、

マナ タク トノ、ティカ タク トノ、

キ トヌ アウ イ テ コア、コア、コア！

うれしい、うれしい、うれしいな、私の心はうきうきよ  
うれしい、うれし、うれしいな、いつだって。

望みがかなった、言ったとおりで  
今、喜びあふれて

全員 男の人たちも立って「コア コア」と歌っていました。故郷の人々がとても喜んでくれ、踊りまわっているのを見てとても幸福な気持ちになりました。

するとミヒが立ち上りました。

「もうたくさん。勝手に喜ばばいいわよ。」と言いのこしてすたすたと出て行きました。誰も注意を払いませんでした。

カレティが来てわたしと抱きあいました。

「あのドレス、あなたにぴったり合うわよ。きれいよ！」

彼らはなんでもみんな持って来ていました。靴やベルもなんです。わたしは靴をはいてみました。なんでもびつたりだったんですよ。全部家に持って帰って、ドレスをきてみると、それは素敵でしたよ。もう一枚のウェディングドレスをどうしようかしらって思いました。ディックの妹のケイトに着てもらおうとしたんですけど、しばらく考えたら彼女が言いました。

「いいのかしら。」

「そりゃ、あなたにあげたんですもの。あなたはわたしの第一ブライズメイドでしょ。いいと思うわ。」

「ちょっと長すぎるわ。」

「すそを持ちあげていけば……」

でも彼女が着たくないんだということがわかりました。縁起が悪いとかそんなことだったんでしょ。

「いいわ、あなたらしいよ、ケイト。」

彼女は母親に相談に行きました。ミヒがそのことで彼女をしかっているのがきこえました。おまえが花嫁になるとでもいうのかい？ でも私は口をはさみませんでした。もう口は出さないわって思っていました。今でも彼女があのだレスを着たのかどうか知りません。ひどく妙な気持だったので、確かめたいと思いませんでした。

翌朝起きると幸運にもお天気でした。晴れてたんです。みんながその話をしているのがきこえました。マオリにとって晴れは、すべて良しということなんです。雨降りだと——良くないんです。わたしは、ブライズメイドのドレスを用意しなければなりませんでした。細かなことをいくつかやっておかなければならなかったんです。ケイトは自分の分担をやるのに走り回っていました。そのあとわたしたちは、ブライズメイドたちが小さなブーケやなにかをちゃんと持ったかどうか確認しました。そうこうするうちに鐘が鳴りはじめました。まだ十一時にもなっていないんです。式は一時のはずだったんですよ。教会の鐘のはずはないと思いました。何の音なのかしらと外に走り出してみました。子供たちが何かたたいているのかもしれないと思ったんです……まあなんてこと、教会の鐘にまちがいはなかったんです。

ミヒが部屋に入って来ました。

「この女ったら、カマウテ ウェヒ（いったいどうしたっていうのかい）。寝ておいでかい？」彼女はマオリ語でおこってました。用意ができてなかったもので、わたしをしっかりとつけたんです。時間のことを言うとかミガミ言いかえされましたよ。

「鐘が鳴ってるのがきこえるでしょ！ もう動き出さなくちゃだめなのよ。なににあんたときたらどうでしょう、まだ用意ができてないなんて。さあはやく！ 花むこさんはどこ？」

それからわたしは大あわてで仕度をはじめました。ディックにも教会の鐘がなってるから仕度してって大声で言いましたよ。あの人は、まだ時間じゃないよと言おうとしました。

「時間のことをいってもだめよ……とにかく鐘が鳴ってるんですもの。おかあさんの言うとおりのよ、今、鳴ってるのよ。」

わたしはやつとのことですドレスを着て、大あわてでブライズメイドや若い花娘たちに身仕度をさせました。ケイトもやるべきことをやっていました……老ミヒが皆をせきたてて、ワーワー叫んでる声がかきこえてきました。家を出て教会めざして道を歩きはじめました。ディックの一番上の兄のタイが馬で追い越していったので、誰が鐘をついているのか見てきてちょうだいと大声でたのんだんですよ。タイは馬で駆け出して行きました。教会に着いてみるとなんとテウエナだったんです。

タイは彼女の所へ行き、ひっつかんで引っぱりましたが、彼女は鐘にしっかりとしがみついて手を離そうとしなかったんです。

「いったい何のつもりだ？」

彼女は振り向いて言ったそうですよ。わたしはエルセラぼっちゃんの子守もしました、お世話もしました、洗たくだってしましたよ、今日というこの結婚式の当日までですよ。だから鐘をつかせていただきたいんです。他の誰にもやってもらいたくないんです。

そこでタイは言ったんです。

「いいか、手を離すんだ。さもないとこれをおみまいするぞ！」

強くひっぱたいてやっとならぬ鐘から引き離れたんですよ。事の顛末はこんなことだったんです。タイが彼女を鐘からひきはなすと、他の人が彼女をしっかりとつかかえてつれて行き、なだめてあげたんです。それからタイは戻ってきてわたしたちに話してくれました。

わたしたちはまた歩き始めたんですけど、もう一波乱あったんですよ。おじのタマテイが私をエスコートして、第一ブライズメイドと花娘二人が一緒でした。教会までの道のりの半分ほど来たとき、声がかえきました。ご存知でしょうか、ポヒリっていうマオリの歓迎の一種だと思いました。立ち止って聴きました。まあたいへん！ 母の嘆きの声だったんです。母は教会を見下す丘の上にとんと陣どって惜別の辞を叫んでいたんです。

「ハエレ アトゥウ ラ ヒネ、さらば我が娘よ！……のろわれた男ども、ハコバハエレワとタマテイカワイイがおまえを犬、奴隷……にしようと思つて行く。ハエレ アトゥウ、ハエレ アトゥウ……！」タマテイおじはこれを耳にしたとたん言いました。

「あいつめっ！ 首をへし折つてやる！」

わたしはおじを止めようと思つたけど、ただつきとばされてしまいました。

「おまえはあの女が我々をののしっているのをきいただろ……首をへしおってくれるぞ！」

おじは丘を駆け上って行き、わたしはそこに立ったまま泣きはじめました。わたしを教会までエスコートしてくれる人がいなくなりました。タイがまた馬で駆けて行ったのでわたしは大声を出しました。

「タイ！ タイ！ ちょっと待って……教会に行つてハコバハエレワを連れてこられるかどうか見てきてちょうだい。タマテイおじさんが丘に登っていつてしまったから、ここまで戻つてわたしを教会までエスコートしてくれるようにたのんでちょうだい。そうしてちょうだい。今すぐになね。」

「わかった。そうするよ。」タイはそう言つて馬で教会へ駆けていきました。

わたしたちはそこに立っていました。ケイトがわたしの方を見て言いました。

「さーて、どうしましょう？」

「わからないわ……」とわたしは答えました。

それでわたしたちはその辺で立って待っていました。すると老ハコバがタイの馬の後にまたがつてやってきました。タイはハコバを馬からおろし、ハコバはわたしの所にきてそつと抱いてくれました。それからあたりを見まわすと小さな花娘たちがみえませんでした。どこかに行つてしまつたんです。

「メアリー！ メアリー！ ヒネ！ ヒネ！」

二人ともいません。

「さがしに行かなくちゃ。ケイト、あの茂みのむこうをみてきてちょうだい。あっちの方にいるかもしれないから。」  
タイもどこかにさがしに行き、私は浜に行つてみました。それでもみつかりませんでした。わたしたちは名前を呼

びはじめました。声がしたんですが、どこから聞こえてくるのかわかりませんでした。海に通じる地下水路があったんですけど、その小さな穴の中で石で遊んでたんですよ。

「ヒネ、おいでメレ！ 上ってくるのよ！ ハラマイ（おいで）！」

この子たちったら石を握ったままだったので、わたしは取りあげて投げ棄てましたよ。

やっと一件落着して教会に行きました。まさに中に入ろうとした時、誰かがわたしをしつかりとつかんだんですよ。「ここからはだめだ……あなたの役目はもう終わりだ、ハコバ。ンガティ||ポロウの分はもう終った。そうじゃなきゃ不公平というものだ。わたしが花嫁を連れて入る。」

それで二人は少々言いあいをしました。ファカババ（系図）からいくと、わたしはタウランガにも関係があったので、彼らはこのエリアという人にわたしを教会に連れて入る役目をさせかけたのです。ハコバははじき出されることになってカンカンに怒りましたけれど、譲らないわけにもいきませんでした。

なんとかおさまってわたしたちは祭壇へと進んでゆきました。ミカとエヴァが来ていました。この二人が最初にお式をすませました。わたしたちの番になって、牧師さんが指輪のくだりまでできたんです。

「カ マウ アウ イ テネイ モヒティ……この指輪をここにおき……」——ない、指輪がない。

牧師さんがエルエラの方を見ました。

「指輪はどこですか？」

エルエラはポケットというポケットを全部さわって捜していました。

「家に忘れてきたようです。」

牧師さんは困って頭に手をやりました。それからわたしの方を見ておっしゃいました。

「だいじょうぶですよ。教会の鍵を使って結婚させてあげましょう。」

わたしは今にも床にぐずおれそうでした。またなの！って思いましたよ。締めくくりが教会の鍵ということなら、結婚なんてほっぽり出したいわなんて思いましたよ。牧師さんがおっしゃいました。

「それでもだいじょうぶですよ。お式が終りしい花むこさんに家に帰って指輪を取ってきてもらって、二人でまたここにいらして下さい。そしたら指輪を祝福してはめていただければいいんです。」

どういうわけか指輪がおくられてきました。誰かが気づいて前にまわしてくれたんでしょね。本来は中指用の指輪だったので、はめてもらったとき親指でおさえていなければなりませんでした。この指輪があつたおかげで少し気が晴れましたよ。

まあなんとか無事に式を終え、紙ぶきが舞い、みんなが大きなわきざししている中に出ていきました。それから披露宴の席のすっかり整ったダイニングホールに行くことになっていました。

入って行くとミカの従妹のウイキトリアがいました。

彼女はホールの入口にいて、わたしたちのつくテーブルを指さしました。ミカとエヴァにはもう一つのテーブルを指さしていました。言われたテーブルに行きかけてケーキに気づいたんです。わたしたちのケーキではなかつたんです。蝶結びのあの白い幅広のリボンがまいてあつたんですもの。わたしはディックに目くばせして、ディックはウイキトリアに言いました。

「ウイキトリア、これは我々のテーブルではないよ。我々のウエディングケーキはあつちのテーブルにのっている

んだ。」

「でも、みんながおいたんです。」

「いいかい、ウィキトリア、こっちのケーキはほくらのじゃないんだ。ケーキを交換しなければいけないよ。」

「そんなことできないわ。」

そこでわたしは口をはさまざるをえませんでした。

「エヴァの所へ行ってきていてごらんさい。ケーキのお砂糖飾りが柔らかすぎて白いリボンでカバーしなければならなかったいきさつを話してくれるでしょうよ。」

彼女は行ってききました。エヴァはケーキなど気にもしないでただ席についていたんです。とても驚いていましたよ。

「あら！ カ ティカ！ そのとおりよ。テーブルがちがうわ。」

そこで彼らがこっちに来て、わたしたちがもう一つのテーブルにつききました。彼女はわたしの方をみてにっこりしました。これで良いところですよ。

落ち着くと少し心配になってきました。母以外の顔はそろっていたんですけど、タマティはほんとうにひっぱいたのかしらと気になりました。エルエラに言いました。

「何も喉を通らないわ。母のことが心配なの。タマティが痛い目にあわせたかもしれないもの。母の様子を見てきたいわ。」

「どこに行くつもりだい？ 丘に登るの？」

「居場所をさがすわ。こんなのおかしいわよ。結婚披露宴だというのに母が来てないなんて。同席してほしいのよ。」とわたしは言いました。

「そうだね。君が行くっていうなら二人で行って捜した方がいいよ。」

それでわたしたちは席をたつて出て行こうとしました。すると誰かがやってきてよび止めました。

「どちらへ行かれるの？」

「母が出席していないんじゃないわ。」とわたしは言いました。

「あら、どこかにいらっしやるわよ。」

「それはそうでしょうけど。連れにいくの。」

外に出るとカレティがいました。

「母さんを見かけた？」

「ええ。」

「どこにいるの？」

「あの生垣きのむこうに行つてごらんなさい。わたしはすぐに行きました。母は地面に伏せてひどく泣きじゃくっていました。その時の夫・ウィハナタタイがそばに座っていました。」

わたしは行つて母を抱きました。

「母さん、披露宴に出て欲しいの——お願い母さん。」

母は立ち上がり、わたしをぶち、あっちへ行けと言いました。おまえなんかと係りあいたくないんだよって。

「あっちへ行つてよ。おまえは奴隷なんだよ。自分で自分を奴隷にしたんだよ……」

「母さん、披露宴に出席してつてお願いに来たかっただけなの。もう沢山でしょこんなこと。もう何もかも遅いの……まぢがつてるつてわかつてるけど……」

「ごめんだわ」と母はわたしを押しつけ、そのひょうしにベールが舞い上つて生垣きにひっかかり、少しちぎれてしまいました。わたしは逃げ出して来なければなりません。母をそこへのこして来ました。何て言つても無駄でした。母は来ようとはしませんでした。人生で一番悲しい事の一つでした。その後母には会いませんでした。家に帰ってしまったんだと思います。後で聞いた話だと、母は牧師さんの所にお金を持って行ったそうです。母は他の人たちのお祝いと一緒に自分のお金出したくなかつたんです。ンガティポロウのやつている事をのしつてから、牧師さんにお金をとつておいて欲しいと言つたそうです。

「あの日から今日までずっとわたしは一人ぼっちなんです。これからもそうだわ。わたしのものは牧師さんご自身にさし上げます。あの人たちなんかにやるものですか……」

ともかくわたしたちは披露宴の席に戻りました。それからスピーチが沢山ありました。みんないくらでも話すことがあるんです。各地の大族長たちが大勢いたんですよ。テカハ・オマイオなどです。下さつたプレゼントもお金もたいへんなものでした。お札が山になってました。何千枚もあつたと思います。どの部族も何がしかのものを下さつたんですもの。でもあのお金がどうなつたか知らないんです。みんなで分けたんでしょうね。

夜になるとミーティングハウスで大ダンスパーティーが催され、またスピーチもありました。人々は帰つて行くまえにマラエで話しあいをしました。全てが終つたら、花嫁をトゥパロアのマラエに、お里の家に、ンガティポロウ

の人々のもとへ連れて来てくれなければいけないと言うのでした。ワナウ<sup>II</sup>ア<sup>II</sup>バヌイの人々はそうすることを約束しなければいけないのです。それぞれのマラエが全てわたしたちを歓迎したいというのです——まずワーレ<sup>II</sup>カヒカ、それからテ<sup>II</sup>アラロアなどなのです。トゥパロアの家に戻る途中に立ち寄っていくんです。そういう合意ができました。

ラウココレでの最後の晩、スピーチの途中でカレティとアレタがピアノを弾いているのがきこえました。歌詞を聴きに行くと歌うのをやめてしまつてメロディーに即興伴奏をつけてひくだけでした。最近になってはじめて彼女たちの妹さんから歌詞をきいたんですよ。わたしへの別れの歌だったんです。

ヘ　ワワタ　イ　ンガ　ラ　ネイ

イ　ンガ　ポ　ロア　ネイ

イ　キテ　アウ　イ　ア　コエ

アミリア　エ　クア　ウエヘア　ネイ

マンガ　タイ　エ　ハルル　ネイ

マウ　アトウ　テ　アロハ

ヘ　モエモエア

ヘ　ワワタ

ヘ　トフ　アロハ……

慕わしき人よ 昼に

長き夜に

なんじの影を見ん

アマリアよ 去り行きし人

海のささやき

我が愛をのせ

夢 希望

愛のしるし……

かなり長い何節もある歌でした。ラッココレを後にしたとき、彼女たちは馬をゆっくり走らせながらこの歌をうたっていたということ。まるでわたしをおきざりにして帰るといった風に立ち止まって海を見たりしたそうですよ。だいたい三日おくれたったと思います。が、ンガティ、ポロックが定期船モコ丸で送った食品類が到着しました。その週はたまたまお天気が悪くてモコ丸がラッココレに入港できず、オークランドにそのままいってしまったのです。でも後で、天候がおちつくと戻って来て送った荷物を全部おろして行きました。何トンものじゃがいも、さつまいも、ジュース類、ビスケット、缶詰め肉その他すべてです。ミヒは人を沢山やっとなってこさせました。

「あなた自分の分を持って行って。誰とかさん、自分の分を持っていくのよ。」なんて言っただけでワナウ、ア、ア、パスイの集落の人々に分けたんです。義母はその時もブーブー言っていましたよ。

「ンガティ＝ポロウらしいことよ。こっちにだっていくらだって食べ物はあるって言ったのに。言っただめなのよ。こんなことになって！」

一部は捨てなければならなかったんですけれど、受けとってもらえれば、彼らはそれでよかったです。

数日後、ウィハナ＝タタイが、一頭だて馬車でわたしたちを迎えに来ました。でも他のみんなは馬で行きました。わたしたちはワーレ カヒカに立ち寄り一晩泊り、それからテアラロア・キウィキウィ・テイキティキ・レポルアなどその他全てのマラエで泊りました。ワレポングではマテロア＝リーデイがワナウ＝ア＝アバヌイの人々に向って、わたしの一族が、わたしたちの農家としての門出に、五〇〇頭の羊を贈るといふことを発表しました。トゥパロアにいた晩はたいへんなものでした。ルアトリア中の人々が集まっていました。あの人たちのこと思い出すと悲しくなっています。みんなもういないんですもの。あの人たちがわたしのことで大き過ぎしてくれました。なんでわたしのことであんなに大き過ぎしてくれただのかわかりません。よくどうしてかしらって思ったりしましたよ……ひよつとするとわたしが今まだこうして生きているのはそのおかげなのかもしれません。わたしには異母、異父の姉妹が三人と兄弟が一人いたんです——みんな亡くなりました。モコブナ バケハ（白人の子）だけがのこったんです。

### \* AMIRIA

—— The Life Story of a Maori Woman ——

Amiria Mantahi Stirling as told To Anne Salmond

A. H. & A. W. Reed (1976)

— 『アミリア』（一九七六）第四章 —

# 江戸時代後期の民衆信仰史料

——石裂山文政争論——

紙 谷 威 廣

〔一〕

石裂山いさくせんは栃木県鹿沼市の西部にあり、日光連山に含まれる信仰対象となる霊山である。現在では訪れる者も少ないが、かつては山岳登拜行が行なわれ、また護摩を焚いて祈祷などをする神仏混淆の霊山であり、東北から関東近県の信者を集めていた。明治以降は神道に基づく神社となり石裂山いさくせん加蘇山かそせん神社と称してきた。この石裂山は今も多くの信者を集めている古峰神社（古峰ヶ原）に隣接していて、「石裂参詣古峰ヶ原参り」と併称されるほどの信者を集めていたのである。

石裂山への登山者や代参者は「道者どうしや」（「堂者」と文書にはある）と呼ばれ、「社人しゃにん」の宿坊に泊まり、石裂山への

登山をしあるいは神前に神楽を奉納して、お札を受けて村へ帰るのである。石裂山も古峰ヶ原も共に火難除けとか盗難除け、あるいは病氣治癒・蓄財といった現世利己的な信仰から訪れたものである。

石裂山の社人は訪れる堂者の宿泊の世話をし、先達となって山の案内をつとめ、さらに希望する者には代神楽を演ずる神楽太夫の役目も果たしていた。また一方では廻壇配札の手代なども置いていて、彼らは各地の村々を回りお札を配りながら檀家を増やす役割を果たしていた。

古峰ヶ原はかつて二軒の御師〔前鬼隼人・後鬼主水〕が軒を並べていたと伝えられていて、日光輪王寺の山伏の修行地を管理していたが、現在は古峰神社と名を改めて多くの信者を集めている。これに対して、石裂山は久我口石裂と粟野口尾撃の二つの登山口があり、久我口には五軒の社人が宿坊を構え、粟野口には斎藤老岐と名乗る社人が宿坊を設けていた。

この二つの登山口には堂者の獲得をめぐる確執があった。しかしそれにもまして、石裂山の五軒の社人の間には大きな軋轢があったようであり、それが以下に紹介する日光輪王寺の所蔵する「石裂社人差出願書等留」の史料に見られる事件である。

## 〔一〕

当時、石裂山神に仕える五軒の社人は、荒井靱負・湯沢権太夫・湯沢豊後・湯沢新太夫・湯沢藤太夫であった。文政七年の宗門人別帳下書によれば、湯沢権太夫は荒井靱負の「分地」であり、湯沢新太夫と湯沢藤太夫は湯沢豊後の

「分地」である。したがって、この五軒の社人は二つの同族団から構成されていたことになる。そしてこれらの社人と手代や山案内人などの奉公人を抱えて、石裂山への代参講や山岳登拝行の堂者を支える信仰組織を形成していたのである。

ところが、日光輪王寺への訴えによれば、これらの社人の間で堂者を実力で奪い合うような争いが起き、そのために参詣の堂者を減らしてつぶれそうになった社人が出てきてしまったというのである。荒井靱負の申し立て（六）によれば、社人はこれまで家督を相続し代々社職を勤めてたが、家譜と想ってきた堂者を手代の働き次第で奪い取るような社人が出てきた。後家持ちになったり、無才覚な社人や未熟な者では家が衰えてしまうことになる。

そこで文化元年から堂者を奪い合うような争いを止めるために相談を始めた。五軒の社人が全国の「檀中村々」を分け持とうというのである。しかしこの話し合いは難航し数年間を費やしてしまった。文政二年になってようやく話し合いがまとまりそうになったが、豊後の反対があったので日光輪王寺本坊から石裂に派遣されていた出役に申し出て「利害申し聞かせて」もらい、六月に儀定証文を取り交した。

ところが、豊後らの申し立て（一〜五）によると、この結果様々な混乱が起きたというのである。堂者が以前から訪れていた社人の家に行くと、「全国の村々を分けたので他の社人の家に行け」と応対されて粟野口尾鑿山の社人齋藤壱岐方へ行ってしまったり、馴染の社人のところに泊まれるように役人に訴えたりと言った混乱が起きた。石裂山を支配していたのは日光輪王寺であり、出役を派遣していた。ところが問題がこじれたために出役の手には負えなくなり、領主である輪王寺に直接訴え出たものである。

この訴訟では荒井靱負と湯沢権太夫が新しい儀定を擁護し、湯沢豊後と湯沢新太夫・湯沢藤太夫の三人が新しい儀

定を破棄したいという立場に立った。湯沢権太夫は湯沢豊後の分地であり、先代の権太夫は堂者を失って新小屋でのいだ時期もあるというのでこの儀定に掛ける期待も大きかったはずである。しかし一方では権太夫の苦境を救ったのは同じ豊後からの分地である新太夫であったから、本家分家の関係を維持する同族团的な結び付きもあつたはずであるが、社人集団の間の同族団は崩壊し始めていたのかもしれない。

荒井靱負は五軒の社人の間では一軒だけ苗字が異なっていた、落人伝承を伝えているので、他の四軒とは格式の差があつたと思われる。文政七年の宗門人別帳は荒井組としてまとめられているので、組の名と苗字が同じであつたのである。したがつて、他の四軒に比較して優越した地位にあつたと考えられる。ところが、この靱負の分地である新太夫は訴訟では豊後の側に加わっている。これもまた、本家分家関係よりも利害関係が優先しているのである。

天保五年の宗門人別帳では、新太夫・藤太夫・権太夫とも「分地」記載でなく自立した家として記載されている。したがつて、社人としても独立した存在へと発展していったものであろう。すなわち、この間に社人の家業経営が拡大し、本家と分家との格差を埋めていったものではないだろうか。その結果、文政年間には社人間の堂者をめぐる争いが生じ、「檀中村々」を分ける必然性が生じたのであろう。

このような社人の訴えに対して、日光輪王寺本坊は、正面から訴えを受け止めるのを避けている。社人たちの経営に関する争いに介入するつもりはなかつたのかもしれない。すなわち、檀中村々を分けるという点について日光輪王寺の許可を得ようともせず、仲間内で勝手に儀定証文を作成したことが「御法」に触れるというのである。

幕藩体制の支配機構の一端として、その根本に関わる問題を日光輪王寺は感じ取つたというべきであらう。つまり、幕藩体制とは、江戸幕府によって与えられた権限において、各大名などの領主が領地を支配する体制であり、領地を

越えた他の支配地までの裁量権は個々の領主には与えられてはいないのである。したがって、堂者組織の範囲といえども社人の勝手な裁量は許されていない。これは寺院本末関係の中で統制が加えられるべき問題であった。日光輪王寺はその点を突いたのである。

ちなみに、近世の神社統制は仏教寺院のそれに比較して緩やかなものであった。社家や社人の身分も京都の白川家や吉田（卜部）家からの裁許状によるものであって、江戸幕府とは本質的に関わるものではなかった。つまり、京都の公家を中心として本末体制が形成されていて、江戸幕府はその中心にある神祇伯白川家や神祇管領長上と称した吉田家を統制することで支配を貫徹していたのである。

また、神社の土地や社などは朱印地あるいは黒印地として年貢を免除されることになっていた。したがって、神社および神社制度は江戸幕府の支配の中では盲点の一つになっていたのではなからうかと思われる。その意味でこの石裂山の相論は幕府の支配体制の空白をも浮き彫りにしてくれている。

### 〔三〕

江戸幕府の宗教統制はキリシタン弾圧と仏教勢力の封じ込めを狙ったものであって、宗門人別帳による民衆の把握と寺院本末体制に帰結する。したがって、伊勢詣りや出雲大社への参詣、あるいは金毘羅詣りや善光寺詣りなどの社寺参詣に関してはさしたる制限も加えられなかった。むしろ、これらの社寺参詣が民衆の旅を可能にしていたのである。

江戸幕府の民衆支配は土地に縛り付けることにおいてなされた。したがって、民衆は移動の自由を奪われていた。関所手形や通行手形などと呼ばれる証文がなければ関所を通ることさえできなかったのであり、これらは大家とか村役人あるいは領主によって与えられた。これに際してもっとも許可されやすい理由は社寺参詣だったのである。

言い換えれば、近世の庶民にとって信仰の旅は唯一の旅だった。名神大社への参詣の旅から地方霊山への山岳登拝行に至るまで、庶民にとって自分の生れた土地を離れることのできる唯一の理由が信仰の旅であった。江戸時代を通じて、そして近代に至るまで信仰こそが旅を正当化する重要な要素だった。

村の人々がお金を積み立てて代表者を送る代参講や、若者が成人儀礼としてその力を示すために行なう山岳登拝行、御師や社人を先達として社寺への参詣をする参詣講など社寺参詣の旅の形は枚挙に暇がない。これらは、その成立はともかく、民衆の間で遠隔地への旅が可能となったのは江戸時代である。この時代になって初めて民衆が旅をするだけの経済的実力を身につけたのである。

このような旅の民衆化はまた旅の俗化をも意味していた。あらゆる旅は物見遊山としての「遊び」の要素を含むようになっていった。伊勢参宮や金毘羅詣りには京見物がつきものとなっていた。奥州からのそれには江戸見物も加えられた。成人儀礼としての山岳登拝行や伊勢詣り・四国遍路などには、宿場での女郎遊びを伴うものも少なくなかった。一人前の条件としての性的体験を要求していたとも言える。

また、神を祭る神事や祭事では精進潔齋と神を迎えるの厳肅な神祭り、それに加えて興奮状態から来るオージーの要素が不可欠である。日常生活から離脱するための分離の儀礼と聖なる祭り、そして再び日常生活に復帰するための乱痴気騒ぎといった幾段階かの要素である。

旅先での社寺参詣にもこれらの祭りの要素は不可欠であったといわねばならない。直会で酒に酔い神への供物を食べるのは祭りの本質的要素である。したがって酒や食事の提供は社寺の宿坊にも求められたものである。ばくちも本来は神の託宣を受けるためには欠かすことのできないものであった。これら「遊び」の要素は社寺参詣を中心とした旅の習俗に取り入れられていった。

古代から中世に至る時期の貴族の旅においても「遊び」の要素は不可欠であった。「熊野詣で」に赴く天皇や上皇あるいは貴族が多くの供の者を引き連れ、各「王子」と呼ばれる休息の場で「詩歌管弦」の遊びに耽ったことはよく知られている事実である。京の都から熊野までの道のりに「九十九王子」と称する休息所が置かれたのは旅の疲れを癒すためではなく、そこで「旅にある」ことを確認し、そのための「遊び」を催すことに目的があった。

信仰の旅とは本来「遊び」の要素を内包していたのである。したがって、経済的実力を伴い始めた庶民にとっても、旅の中に「遊び」を取り込むのは当然の成り行きであった。信仰の旅が物見遊山の旅に変化してゆくのは当然の結果であったといえよう。旅宿での接待や酒食のもてなしに注意が向けられたのは、これもまた当然であった。

荒井鞆負の申し立てには、三代前の藤太夫が色々の工夫をして参詣の堂者や檀廻の手代を他の社人から奪い取ったと述べられている。たとえ庶民の信仰の旅とはいえ、社人は様々な努力によって参詣の人々を引き付けるべく競いあったのである。このような民衆の信仰の変化に対応する社人の努力が、さらに庶民の旅を発展させたといえよう。

石裂山の社人集団はこういった庶民の動向を十分に察知せず、社人の家業経営の問題として矮小化してしまった。いわば民衆の「旅への要求」を把握し切れなかったのである。これに対応する日光輪王寺も幕藩体制下の一領主としての対応しか示してはいない。他の封建領主の支配地に関わる「国々郡分け」という社人の対応に拒否反応を示すだ

けで終わってしまうのである。

日光輪王寺にも山伏の集団があり、それぞれの霞場を持って活動していたとすれば、このような判断は下されなかつたはずである。しかし日光山伏は堂衆の支配下にあつて、さしたる民衆教化の活動を行なつていなかったのではないだろうか。むしろ封建領主としての地位に甘んじていたともとれよう。それがこの争論の判定に示されているのではないだろうか。

[四]

本史料は日光輪王寺に所蔵されているものであり、輪王寺の好意で筆者に与えられたコピーから起こしたものである。表紙を含めて九六枚の用紙が縦帳（ほぼB5）一冊に綴られている。同一の筆跡で最後まで通してあり、また書きぐせ（是非が悲になる等）も同じであり、この史料の筆記者は一人と思われる。村方からの願書二通、石裂山社人の願書九通、石裂山出役の記録一通、日光御本坊役所の取り調べ記録一通の十三通から成っている。それぞれの文書から書き写して一冊にまとめたものであろう。

民衆の信仰と旅に関する研究は筆者の大学院修士課程での研究対象であり、本史料は修士論文作成中に得られたものである。方法論上の行き詰まりから執筆後長い間史料報告もしないままに放置してきたが、民衆の旅に関する研究を再開するために改めて読み直したものである。しかし、近世文書の解読は筆者の専門外であり、多くの誤りがあるかもしれない。また、表記の都合上、以下の凡例にしたがつて文字の使用を多少変更した。

- (一) 助詞等の異字・変体仮名等は読みやすい平仮名か片仮名で示した。
  - (二) 略字および古体字は現在使用される漢字を使用した。
  - (三) 頻繁に使用される俗字はそのまま使用した。
  - (四) 不明の箇所は主として筆者の読解力の欠如によるものである。
  - (五) 文書の番号は整理の都合上筆者がつけたものである。
  - (六) 文書番号の下の地名・名前は筆記によって各文書の最初の頁の肩につけられたもので、文書の提出者である。
- 付記 本史料は昭和四六年、下野民俗研究会の尾島利雄氏とともに日光輪王寺を訪れた際に、輪王寺のご好意で得られたものである。深く感謝するとともに、長期間放置したことをお詫びする。

## 石裂山争論史料

文政二卯年

同 辰年

石裂山人差出願書等留

日光輪王寺所蔵 う一六号文書

當御留守居 法門院貞順捌

(以上表紙)

會所元扱  
高橋矢一右衛門

(一) 加園村

文政三辰年五月四日

御納戸 申橋主計  
福田帶刀 兩人持参  
秋藤庄兵衛  
星野福助

乍恐書付を以奉願上候

石裂山社人五人仲ヶ間

門田伊勢守領分加園村惣百姓

堂者檀方出入願書九通

共一同奉願上候訳は當国石裂山

並ニ村分仲ヶ間議定連印帳九冊

之麓久我村隣村ニ而御座候處

荒井鞆負

年々登山仕郷中安全五穀

双方出訴

湯沢權太夫

豐熟之心願仕候處往古之

湯沢豊後

御師は湯沢豊後ニ御座候處

湯沢新太夫

權太夫方は分地之儀ニ付同人方

湯沢藤太夫

且方ニ相成呉様豊後ノ頼ニ付

(以上表紙裏)

權太夫檀家ニ罷成居候之處

其後權太夫困窮仕御師職

相成兼候ニ付又候豊後方之

檀家ニ罷成居候然ル處近年

權太夫再建ニ付亦々立掃り

旦那ニ罷成候得共祈禱祈念不依

何事豊後方迄直段相頼来候

尤權太夫方檀家之趣意ハ

毎年夏札守等配札仕御初穂ハ

志次第麦奉納仕来参詣之

節は面々帰依之御師迄罷越

参詣仕来候所此節御師中

仲ケ間儀定仕旦那を引分ケ

候趣ニ而堂者止宿は勿論祈禱

祈念之儀も他檀は一向請不

申由右ニ付此度無據奉願上候

趣意は當夏中日照相續き

村方難儀ニ付雨乞祈禱豊後

方迄相頼候處前書申上候通

御師中一統儀定仕他旦那之儀ハ

祈禱等難相成候段豊後被申聞候

間私共村方之儀は昨年迄も

祈禱等御頼申来候故是悲御頼

申度段達而相頼候所其儀は尤ニ

候得共當年仲ケ間致儀定

他旦那之止宿又は祈禱等致候得は

仲ケ間迄過料等差出候儀ニ而

甚迷惑ニ付權太夫方迄相頼候様

ニと申事ニ付是迄村方一同權太夫

方不帰依ニは御座候得共右之

訳故無據同人迄雨請祈禱相

頼候所一向祈禱之驗茂無御座候故

村中之者亦々相談仕是悲

豊後方迄祈禱相頼申度儀ニ付

權太夫迄右之段申入同人ノ豊後

方迄及挨拶漸豊後方ニ而雨乞

祈禱致具候所早速感応之

驗有之村中は不及申隣村

一同大悦仕候事ニ御座候右之通

豊後方は是迄數年来祈祷等

相頼米村方一統婦依仕候所

當年ノ婦依方迄相頼候儀難

相成候而は一同難渋仕候尤何連

之御師迄相頼候而も

御神徳は御同様ニ可有御座儀ニ

奉存候得共愚昧短慮之百姓共

病難火防雨乞五穀豊熟之

祈祷之儀ニ御座候得共何卒村中

一同婦依之方エ相頼申度候得共

御師中儀定有之候得は其儀

茂難相成百姓一同甚難儀仕候

依之此度無據權太夫方離檀

仕候間何卒往古之通豊後方迄

且家ニ罷成度段申入候處同人

方ニ而も仲ケ間儀定有之難

儀故相對ニ而且家ニ仕候儀も難

相成旨至極尤之儀ニ御座候

左候而は私共村方數拾年来

石裂山信仰ニ而村内安全五穀

成熟之心願仕年々參詣仕

来候處御師中儀定之訳ヲ以

明年ノ婦依之御師迄祈祷等

相頼候儀も難相成百姓一同甚

迷惑仕候依之何卒私共村方

之儀は往古之通湯沢豊後

檀家ニ罷成候様奉願上候何卒

格別之以

御慈悲願之通被 仰付被下

置候得は百姓一同相助重ねて

難有仕合奉存候此段偏ニ奉願上候

以上

加蘭村

百姓惣代

儀右衛門印

文政二己卯年八月 同

丹 藏印

名主

五郎右衛門印

御本坊様

御役人中様

(一) 下澤村

乍恐書付を以奉願上候

堀田相模守領分下沢村下組

惣百姓共一同御願申上候ハ

私共村方半村は久我口石裂山

参詣之御師は往古も湯沢

新太夫方ニ而年々配札仕旅宿

等も仕来候處當年も御師

仲ヶ間儀定之上諸国郡村

致割賦候と申下沢村之儀ハ

荒井靱負之旦那ニ相成候由

使を以相断置新太夫方迄参候

堂者は不為留候故此節も

新太夫方ニ附候参詣之者旅宿

不致呉甚差支難儀至極仕候

畢竟靱負方ニ而も得手勝手

之致儀定其村々迄相談も不

致数年懇意之御師を為

致離權自分勝手を用ひ候故

私共村方愚昧短慮之者共故

靱負方ニは不帰依ニ而栗野

尾撃山御師齊藤老岐守方迄

檀替可仕と申族茂有之候得共

是迄数拾ヶ年来久我石裂山

信仰ニ而村中之者年々

登山仕候所此度御師中儀定

之上数年来旦那ニ御座候

新太夫方を為致離檀不帰依

之鞞負迄檀家ニ罷成候訳ヲ以

栗野口エ参詣仕候儀も甚不

本意何共敷敷一同迷惑至極

仕候依之無據奉願上候私共

村方之儀は前々之通湯沢新太夫

方之檀家ニ罷成村内安全

病難消除五穀豊熟之

祈禱相頼候様奉願上候此段

何卒百姓共御救之思召を以

宜御聞濟被成格別之以

御隣愍願之通被

仰付被下置村内安全五穀成

熟之祈禱快修行仕候様被

仰付被下置候は惣百姓一同

相助難有仕合奉存候此段

幾重ニも奉願上候以上

下沢村

文政二己卯年八月

百姓惣代

利右衛門印

組頭

長右衛門印

名主

六郎次印

御本坊様

御役人中様

(三) 豊後

乍恐以書付奉願上候

石裂山豊後奉申上候私仲ケ

間共檀中村分ケ可致相談去ル

亥年中も内々談合御座候所

先藤太夫江戸表ニ而病死仕

相談も相成不申其侃流ニ

相成罷在候然ル所去寅年

靱負並權太夫檀中村分ヶ

致度由談合御座候處新太夫

藤太夫儀不承知ニ御座候得共

無餘儀一同仕候所私儀も宜敷

無之儀と奉存乍併當六月ニ

相成仲ヶ間共と難離無據

檀中儀定仕候所夫ゞ己来

参詣之堂者彼是六ヶ敷

村方敷多有之藤太夫

新太夫方迎も品々當惑

仕候儀共御座候中ニも夜ニ入

止宿不定無據百姓家エ無心

致シ一宿仕罷帰り候堂者又ハ

御番所様迄御願ニ罷出堂者も

有之候始末ニ御座候尤當方

之村方ニも下沢村加蘭村兩

村之様子も見合罷在候村方も

御座候右様之儀今年より

御座候而は此末近村遠方村

方共相聞候而は自然と

御山不繁昌ニも相成候而は

難儀仕且

御上様エ対シ奉恐入候儀ニ付右

参詣婦依次第御法相背儀

定仕候故堂者は勿論私共

難儀當惑仕候間何卒以

御慈悲之思召此段 御賢察

被成下置新規之儀定不用

先々仕来候通り御聞濟

被下置候ハ々相助り難有

仕合奉存候以上

石裂山

文政二卯年九月

湯沢豊後印

御殿

御役所様

(四) 藤太夫

乍恐以書付奉願上候

石裂山参詣之者は迄私共

仲ケ間五人之内帰依次第着

仕参詣仕来り候所壇中村々を

村分ケ仕度由相談有之候處

私儀は勝手様子も存不申候故

達而延引仕候處是悲儀定

可致趣被申候ニ付仲間ニまかせ

帳面書出シ再応相調候處未タ

相分ケ兼候得共権太夫

鞠負兩人儀是悲當夏

取極メ可申様申候ニ付無據當

六月中仮儀定仕候然ル處

堂者取扱仕候所是迄年

来私方エ参り来り候堂者

参り候節難儀至極仕候尤

私共儀新法成儀定候故参

詣之堂者六ヶ敷相成右ニ付

無據恐茂不願別段六ヶ敷村々

左ニ奉申上候

一

下総国西井村ノ堂者参り候所

私壇家ニ無之候ニ付仲間中

相札候所鞠負壇中之由ニ候

間同人方迄参り被下候様申候

得共堂者申候儀は三拾年

已来當山之配札等請候儀聞而

覚無之候間何方迄成共勝手

次第止宿致可申段申之延引

致候間私方が鞞負方迄及

相談候ニ付同人手代私方迄

罷越石堂者エ得と掛合候處

何様申候而も参り不申候ニ付

右手代が私迄右堂者止宿為

致候儀不相成旨相断罷越

申候ニ付私儀當惑仕候無據

御番所様迄御伺可申上と奉存

罷出候處權太夫儀當年行

事故風と立寄咄候所御願之儀

被差留權太夫鞞負エ及相談

私宅迄權太夫罷越申候は右

堂者私ニ任せ呉候様申鞞負

方迄参り不申候ハ其元エ掛

不申門前迄引出シ追返可申と

申之候間私參故當惑仕相構ひ

不申差置候處權太夫堂者ニ

掛合高声を致其上堂者

私方を連出シ茶屋迄下ケ置

何連之訳ケニ致シ堂者差戻シ

候哉此段豊後咄仕候得共鞞負

權太夫兩人ニ而取斗ひ候ニ付

其儘差置申候且又近村左閨村

より参詣之堂者参り候處

私壇家ニ無之候間鞞負方エ

私に引合之村故申訳ケ仕差凶

仕候所堂者

御番所様迄願出候ニ付

御番所様が私エ止宿被 仰付參詣

為致申候然ル所其後鞞負が

申聞候儀は此方壇家に候得ハ

口言 御番所様が被 仰付候連

止宿致候儀は藤太夫心得違

之段申之候猶又其後同村が

堂者参り候ニ付靱負方エ止宿

致呉候様申候得共参り不申候

ニ付同人方迄沙汰仕候間同人

手代参り堂者迄掛合候處

堂者殊之外立腹致シ何ケ様

申訳ケ仕候而も一向聞入無之

参詣不仕罷歸り申候此段靱負

方エ相断其節

御番所様迄も申上置候猶又

隣村日向村参詣之堂者

私方エ参り候所是又私旦那家ニ

無之候間靱負方迄参り呉候様

申候所一圓得心不仕候ニ付同人

方エ沙汰候所手代参り堂者ニ

掛合何様申候而も迎も参り不

申延引仕候間手代申候ハ私方迄

止宿為致候儀不相成近村ニ

候間早々差戻シ可申と断

有之誠ニ當惑仕夜ニ入候ニ付

一宿為致相立申候且下総国牧

野地村並水戸領木ノ倉村参

候處両村とも靱負且中之由ニ付

沙汰仕候所同人手代参り堂者ニ

彼是掛合仕候得共殊之外六ヶ

敷相成木ノ倉村堂者は高声

立口論を致シ其上両村共手代

ハ私方迄頼ニ付止宿為致相婦

申候然ル所其後牧野地村ハ名主

組頭ハ書面を以申来候は去ル

丑年迄配札有之候得は寅

年ハ配札無之候ニ付何連ニも

今年ハ年々配札致呉候様

申来候是以迷惑仕候其外

粟野村入口松崎と申所より

参詣之者私方エ参り候所

石裂山

是ハ私母出生之村故見舞

文政二卯年九月 湯沢藤太夫印

なから右村も多分参詣之

御殿

者参り候ニ付當年は権太夫

御役所様

方迄差連申候得共是等来年

も参り不申段申聞候右様之

(五) 新太夫

始末ニ而

御神徳も薄相成自然と

乍恐以書付奉願上候

参詣之堂者参り不申様

可相成哉も難斗乍恐奉存候

石裂山新太夫奉申上候當六月

ニ付恐も不願無余儀奉願上候

中仲間一同内々相談之上

何卒以 御憐愍 御慈悲之

国々郡分ヶ壇中ニ仕参詣之

思召参詣之者並私共一同難

堂者其御師迄引請外ニ而

儀不仕先例之通被

止宿為致申間敷儀定仕候然ル所

仰付被下置候ハ、難有仕合奉存候

當八月十七日當国都賀郡栃木

以上

上新田村和泉屋藤兵衛秤屋

政五郎と申者心願ニ付私方

神前迄幕老張奉納仕度由

ニ而右幕持参仕参詣ニ罷越候

處鞞負且中と申候ニ付鞞負

方迄宿被致可然と申候所右兩人

之者一圓承知不仕勿論紋等

附置候得は奉納相成兼(候)ハ

一先持帰り候上粟野口ニ而も

奉納可致段申之候間左様

相成候而者 御山口障ニ相成

可申哉と奉存右之段鞞負方迄

沙汰仕候所同人申候は願主

之者届之儀ニ候ハ、新太夫

方迄納候共右村は我等且中ニ

候得は右幕金子ニ積り猶亦

奉納金等有之候ハ、夫々ニ

心附致呉候様申越候ニ付私申

候儀は是迄他且中も奉納

物数々有之候得共右躰之

儀無御座候間左様ニ相成不申候

ニ付此段承知致呉候様猶又

此上幕之願主構中参詣

之堂者我方迄参り止宿致

度由申候節猶又彼は仕候

而は気毒ニ存候ニ付止宿為致

可申哉と及相談候所鞞負殊

之外憤り左様ニは相成不申

幕之儀新太夫方迄為張置候

儀相成不申夫共張置候ハ、

我等方ニ而相はかし可申と

申越候左様之儀ニ候而は願主エ

対シ申訳も無之右之願主

構中重而御山参詣ニ罷越候

節止宿等之儀當惑仕難義

至極仕候且亦當国那須郡

遅沢村其外村々願主ニ而

享和年中半鐘老夕鰯口

老夕奉納仕罷在候所當七月

中右願主之堂者罷越候

處此度村分ケ仕候村方ニ付

靱負方エ止宿致呉候様申候

奉納願主ニ有之當家迄止宿

之上參詣不相成候ハ、奉納物

取返シ可申趣申之候ニ付漸々ニ

申なため靱負方エ止宿為

致候翌日猶又立寄右之段

彼是申候ニ付何連ニも不仕段

申聞相帰申候且亦六月中

儀定以来他且中、参り候

堂者止宿為致かたく奉存候ニ付

夫々迄参り呉候様申聞候得共

一向承知不仕粟野口迄参り又は

參詣不仕国元エ帰り候堂者も

有之候旁始末或は當六ツ

過頃ニ着仕候堂者引合ニ相成

夜更迄も止宿不定難渋仕候

堂者等御座候而重而石裂山エは

参り不申無據参り候節は

粟野口エ參詣可致杯と申者

数多御座候然ル上は此上右

躰之儀近村は勿論遠方

之村方迄もうわさ相聞候而は

御山 御神徳も薄く不繁

昌之基ニ相成候而は奉忍入

當惑難儀至極仕候間無據

奉願上候何卒以

御慈悲之御賢察思召參詣

之堂者帰依ニまかせ是迄年

来仕来り候通御聞濟被下置

候ハ、堂者も難儀ニ不相成

私共儀も相助難有仕合奉存候

以上

石裂山

文政二卯年九月 湯沢新太夫印

御殿

御役所様

(六) 荒井鞠負

乍恐口上書を以奉申上候

一 私共一同代々家督被

仰付社職相守相続可仕儀は

且中ニ御座候而其場所ニ参詣之

節は其主ニ而引請家相続

可仕筈之所相違種々手段を

致し外迄志シ家譜と存候参詣

之者並且廻共ニ通合働次第ニ

引付或は面々召連之者

錢稼ニ相成候ニ付門前又は途

中杯迄罷出種々申吾歎主人

方ニ引付候是等之儀は主

人は不存候得共兎角通合

働次第之儀夫故ニ石裂山中

之堂者働を以老人ニ而引請候

様仕候而も外ニ申分無御座

次第故一同も安堵仕候と申儀無

御座私共身分一同是迄之

成行は人之物を彼方ニ取り

彼方之物を人ニ被取候儀其儀

世上ニ聞誠ニ恥ケ敷儀と奉存一

向取極り無御座猥乱妨之儀

ニ而納り方無御座難決至極ニ

罷在心底ニ而は相違恨合

自然と仲ケ間不和之基ニ

相成可申と奉存候終ニは智恵

才覚無御座候而は持来之

参詣家譜外迄被取切りニ罷成

扱々歎ケ敷儀と奉存候是迎も

且中取極メ無御座候故之儀と

奉存候右等之次第不極リニ而ハ

恐多キ

御本坊様御外見ニも相成候儀と

奉存候前文ニ申上候通り働次第

儀故不働之者は有来リ

之家譜外へ被奪取也人も

参詣受候儀相成不申候得は誠ニ

仲ケ間之内子孫ニ如何様末熟

不働之者も可有哉其外

後家持杯ニ相成候時働之能キ

者ニ持来之参詣家譜皆被取

也人も参詣引請候儀相成不申候而は

誰に而も誠ニ難渋ニ罷成□□仕候

外之儀無御座候扱て哀れ成る

身分と奉存候正ニ先年右申上候

始末之儀左ニ申上候扱先之權太

夫無才覚末熟故有来と存候

参詣家譜皆外同役迄被引付

權太夫方ニは老人も参り不

申候様ニ相成正ニ存統茂難成

罷在是迎も家譜之取極メ

無御座候故歎ケ敷儀ニ成行又

當時權太夫働候故漸々参詣

参り候様ニ相成候而持来り之

参詣家譜外迄被引付又引

戻し候風情は誠ニ猥乱妨之

義不働之者ハ潰同様ニ相成

候ニ而も其儘取勝次第之

儀難決ニ奉存候次又四代以

前之藤太夫之時ハ参詣式百余

人位ノ参リ不申候處三代

已前之藤太夫色々工風仕外

同役之家譜ニ相成り候参詣並

且廻共ニ奪引付候ニ付唯今は

昔之七八倍も参詣参り申候

其分は外四人エ参り候参詣

減シ申候右躰働次第ニ御座候而

石裂山之儀は誠ニ以乱妨之儀ニ

御座候強キ者勝次第弱キ者

負次第之儀故不働之者ハ潰ニ

相成候ノ外之儀無御座候扱

先年権太夫杯之儀案シ候得は

仲ケ間之内誰ニ而も其時ニ依而ハ

子孫如何様ニ成行潰ニも立可申哉

扱々納り方無御座候處之御願ハ

兼而仕度と奉存候折節右始末

之儀仲ケ間一同不本意と承仕

仕候ニ付面々ニ其場所を定メ其

場所ノ参詣之節は其主ニ而

引請候様不仕候而は相成不申候

趣ニ付文化元年之頃ノ一同思立

折々遂参會種々相談仕候儀は

何十度共なく相談之度毎何

連も是迄之風情は以之外ニ

存候得共私共身分ニ取り候而は

家譜之取極メ之事故面々

大事ニ存候故年来相談仕罷在候

處豊後如何ニ存候哉半途ニ而不得

心ニ付委細願書ニ而四人一同願上

候所豊後方迄御利害被

仰聞候ニ付一同且中之取定仕

度趣ニ付且中之場所を定メ其

場所ニ參詣之節は其主

ニ而引請可申由ニ付且中之村々

凡百日斗り之間ニ調仕弥々

相談相募り漸く當六月

中別儀定證文ニ為替仕候是ニ而

石裂山之儀は平和ニ罷成申候

此定メ之通ニ御座候得は被奪も

不仕奪取りも不仕相納り面々

熟談を以取極メ申候儀故一同安堵

可仕と奉存候

御本坊様御用並社職共ニ無怠

被相勤又は仲ケ間も行々

和合仕面々家相統之ためニ

相成候故右之取定メ其節

一同相悦申候段々申上候通り

私共營方之儀は外ニ何ニ而も

無御座參詣引請候其助力ニ而

今日々を相送り候身分ニ御座候

得は仲ケ間相談を以家譜之

取極メは是悲無御座候而は始終

難行立奉存候得は一同ニ而相談

之上取極メ候家譜之通り右

申上候儀尤ニ御聞濟被遊ヒ下候

ハ御賢察被成下御慈悲之程

奉願上候然ル所文面ニ誤り之

儀御座候由之儀は恐入奉存候

此儀御下知次第相直し可仕候

且又取極メ候村之内ニ不帰依

ニ而其主迄不被參候村御座候由

此後出精仕可申候得共當時不帰

依ニ而其主迄參り不申候由願

御糺ニ此段恐入奉存候ニ付此所

之儀は堂者之志ス方エ被

參候様可仕候乍然其堂者は

外之旦那ニ御座候得は別人之

物ニ御座候依之引請候者ハ何程

歟割合を遣し申候ハ其旦那

主も家譜と存候印御座候堂

者も又其所エ止宿被致候奪

取請候者も被引請候ハ是ニ而

故障之儀無御座儀と乍恐愚

按ニ奉存候此儀を御伺申上度

口書を以奉申上候以上

文政二年卯九月 荒井鞞負印

御本坊様

御役人様

(七) 權大夫

乍恐口上書を以奉申上候

一 私共儀之続目被

仰付相続仕候儀は石裂山參詣

之參り候村々を檀方といたし

其村々迄配札等を仕參詣之止宿

案内等はを以諸事御用並

家内養ひいたし罷在候處私祖父

養父ニ至る迄無才覚不働之者故

持来り候旦那方之堂者不殘仲ケ

間内エ被引付拙宅エは老人も

不參候様ニ相成居宅は大破仕

無據唯今新小屋ニいたし候處ニ

住居仕罷在候得共其屋根之

繕も行届兼新太夫親屋根

普請致具候様成る始末ニ御座候間

一生之間女房も不持老人之

養いたし兼罷在候儀叔々歎ケ敷

儀ニ奉存候是と申も相定候儀定も

無御座人之養ひ之種々仕候村々

たり共人之難儀ニ相成候共引付

次第之儀ニ御座候故と奉存候此故ニ

且方といたし候村々エも忒人

三人宛且廻之者入込配札致

候様成儀は石裂山不繁昌之

基ニも相成恐多キ

御本坊様之御外見ニも可相成と

奉恐入候次ニは仲ケ間も和合可仕

儀は無御座候依之仲ケ間一同熟

を以村別並郡別仕猶又参詣

之者を引争候儀石同断之

儀と奉存候殊ニ五人之内何連ニも

不働無才覚之者子孫ニ致出来

拙宅之様ニ相成儀斗り不知候間

仲ケ間一同相談之上右儀定仕候

處是又差支ニ相成候儀御座候而

願御糺ニ一言之申訳も無御座候

依之愚按ニ思出候儀新太夫

杯堂者は私四倍も参り候而も且中

といたし候村々不足ニ御座候ハ私共

難儀を重遠方迄致掛合候村々ニ

御座候而儀定いたし置候得共

其内を少し宛も且家不足之

者エは遣シ其上一同相談を以

村別儀定を相用ひ置若参詣

之者無據故御座候而其御師迄

不被参候由申候ハ其堂者之

届之御師迄止宿為致候而持主

方迄老人何程つゝと申割錢ヲ

遣し申候様ニ仕候ハ、村々之故障も

無御座乍恐

御本坊様之御名面申出候儀も

無御座堂者之難儀帰依不帰

依之故障も無御座持主も相立

候而堂者之着致し候御師ニも

難儀は御座有間敷と奉存候

唯其持主迄沙汰ニ及候世話のミ

は此職分ニ而養ひ仕候身分ニ御座候

得は世話いたし候而も可然儀と

奉存候此段如何可有御座哉御伺

奉申上候扱又此儀もなく去年

迄之通りニ御座候而は私儀は五ヶ

年は相統相成兼家内渴命ニ

及候ニ付兼而御願可申上と存居り

候間右之段乍恐御察奉願上候

且又仲ヶ間之内にも如何様之

不働無才之者出来仕私家之

如くニ相成候様成行も難斗

たく奉存候相互之為と乍恐

奉存候右段書付を以御伺奉申上候

以上

文政ニ卯年九月 湯沢権太夫印

御本坊様

御役所様

(八) 豊後

乍恐以書付奉申上候

一 乍恐昨廿日私共五人エ得と熟談

仕候而其由可申上と被

仰付候ニ付相談仕候所何連ニも談合

出来兼候ニ付今日所存之趣似

書付奉申上候

一 靱負杯申候ニは他旦之堂者参り

候而其御師迄何連ニも参ル事延

引ニ申堂者は其旦家主の一通り

申遣其挨拶承り返事ニ寄其堂者

を請老人ニ付何程ニ而も其旦家主

之御師迄銭出シ候得は儀定も少しハ

相用ひ候由我等儀は其儀一向ニ不宜

儀定帳は 御上様エ差上未御下知ハ

無御座候共

御公儀様之御法ニ違候儀定故

此帳面は用不申様相談仕候處

靱負不承知ニ御座候

一 私仲間共迄申候は権太夫事

各々参詣も少ク尤奥州ニ而

當七月中旦家余程出来致シ候

都合式千余村ニも可相成哉共存候

得共遠方ノ事故仲間共エ

対し候而は参詣大きニ不足と

存候間何程ニ而も権太夫方迄

檀家を貰申度由申候得は新

太夫藤太夫少シは承知も可

有之と相見エ候得共靱負事ハ

一向不承知ニ御座候靱負は私杯ニは

旦家も千余ケ村も沢山有之

堂者も沢山ニ参り候故左様ハ有

之間敷と奉存候所思出外之

挨拶故相談も出来兼依之

奉申上候右ニ付去寅年迄之通

被為 仰付被下置候様奉願上候

右願之通以 御慈悲被為

仰付被下置候ハ、難有仕合奉存候

石裂山

願人

文政二年卯九月廿一日 湯沢豊後印

御殿

御役所様

(九) 新太夫

乍恐口上書を以申上候

昨日仲間一同相談仕候處面々

勝手斗申一向熟談不仕候私

所存は是迄年来済来候處

今度村分都分ヶ相談等有之候

ニ付先村迄掛合之上ニ仕度由申候

處一向不承知之旨有之無

余儀当夏中村分に相成候儀は

私安永年中か此かた新旦那

は老ヶ村ニ而も拵不申殊ニ外旦那

中迄は老軒足り共配札不

仕候所私之当春迄も廻村致候

且中之内百拾ヶ村靱負旦那中と

申候趣彼是掛合候得は六ヶ敷も

相成可申と存利ヲ曲而無據貳拾ヶ

村程遣候筈口致置候唯今之

権太夫親之時分ハ旦那中茂少く

有之右之内ニ而候哉靱負方迄

金子之代ニ差向候村も有之候様

承り居候所當権太夫養子ニ参り

候此かた私旦那中エ入込権太夫

取立ニ付他旦那ニ不限配札候様日光

御殿様が被 仰付候と申右ニ付

札請候村も有之不帰依之

村は廻村順ニ御座候間印形斗

被下と申右帳面付置候村数

百四拾ヶ村權太夫古且中と申

引合ニ相成五拾ヶ村遣候右村々

不帰依候得は六ヶ敷申来り

甚以難儀仕候豊後とは一村も

障り無之藤太夫とも三ヶ所引合

有之候得は是は兩家ガ参り

候間是迄之通りニ致置候間

何ニ而も六ヶ敷儀無之候右ニ付

新法を不用去寅年迄之通り

古来仕来之通りニ候得は堂者

茂難儀無之

御上様之御外聞ニ相かゝわり

不申と奉存候何卒

御殿様之御慈悲を以古来致

来候通り被

仰付被下置候ハ、難有仕合奉存候

以上

石裂山

文政二卯年九月廿一日 湯沢新太夫印

御殿

御役所様

(十) 藤太夫

乍恐以書付奉申上候

一 石裂山参詣一件之儀仲間五人

一同相談仕候所私儀鞞負權

太夫兩人方エ談合仕候儀は此度

之儀定は不取用去寅年

迄之参詣之者帰依次第

何方迄成共参り候様仕度由ニ申候

猶又且中エ配札等之儀は何連

相談之上障り無之村々斗

取極メ申度趣相談いたし其上

權太夫方エは四人之者ガ村々

を少しつゝも先村エ承知為致

差遣し候様相談仕候所靱負權太夫

兩人は右儀定を取用相談仕度

由申相談出来兼候殊に靱負

方ニ而申候様は儀定之通りニ而

他且之堂者参り候節は其

且家主迄相断為致参詣老人

ニ付錢三四拾文つゝ成共且家主

方迄差遣し候趣猶又儀定致シ

置申度由を申候權太夫方ニ而

申候様は右儀定相破り候而は

我等妻子やしなひ等も不相成

趣申之相談出来兼申候

私共儀も右先祖四五十年

以前迄は且中も一向無之

参詣之者式三百人位ガ外無之

咄し家内之者並豊後杯ガも

咄し承り申候然ル所右先祖儀

仲間障り無之所を配札仕

且中ニ進メ石裂山をひろめ夫ガ

参詣之者段々と参り當分漸

豊後杯位ニ堂者も参り候様

相成候得共右ニ付先祖殊之

金子相遣イ内借等今以相残り

居候其上先藤太夫儀江戸表ニ而

病死仕是又金子相遣内借

等多分ニ出来申候既ニ潰ニも

可相成所私儀去る丑年養子ニ

参り漸相続仕居右内借利

送り等も相成兼候所右様之

始末故難儀至極仕候右儀定

書之通りニ而は逆も仲間とも

六ヶ敷相納り兼申候と奉存候

其上私共行立兼申候ニ付何卒

儀定之儀御取用無之様被為

仰付被下置候様奉願上候委細

之儀は御尋之節口上ニ而

可奉申上候右願上之通以

御慈悲被為 仰付被下置候ハ、

難有仕合奉存候

石裂山

願人

文政二卯年九月廿一日 湯沢藤太夫印

御殿

御役所様

(十一) 韋負・權太夫

乍恐以書付奉申上候

一 私共且中儀定之儀ニ付度々

御吟味被 仰付候而猶又此度

且中之村々仲ヶ間内且中ニ

當合候ニ不構書出等申候由被

仰付候ニ付古来之且中は

申ニ不及是迄も相弘メ申候限り

帳面ニ印奉差上候右ニ付私共

仲ヶ間且中村数多少御座候儀

御疑ひも奉恐入候得共古来

之村割ニ致シ候儀ニは無御座弘

方出精仕候者は多分無精之

者は少分ニ御座候其段御察被

下置候様幾重ニも奉願上候且

奉申上儀は私共愚按ニ奉存候

ニは 石裂山社人と相成候而

御神慮エ之忠義之心もなく

御神徳ニ依而此身並妻子迄

養ひながら相弘メ候存寄も

無御座他家之且中ニ參候堂

者を引争ひ申候而其助力ヲ以

居宅安住ヲ楽ミ罷在候儀は不

本意之儀候愚ニ奉存候猶又

參詣少シ宛なり共相増シ候は、

乍恐

御本坊様エも百ヶ一之御奉公ニ茂

相成殊ニ家内之相続養ひ之種ト

奉存候故三飯ヲ二飯にいたし二重ヲ

一重ニ着し候程ニ心掛候而難渋を

重ね掛合相弘メ申候故村敷

多分ニ相成候得共御口も不願

帳面相印奉差上候其段御聞濟

被成下候様奉願上候且亦奉申

上候儀は先達而御吟味之節

被 仰聞候仲ケ間之願書

ニは熟談ニ納得ヲ以儀定仕候

儀ヲ相止度由奉申上候様ニ承知

仕候得共左様ニ相成候而は私共

古來ノ之且中ハ勿論難儀ヲ

重ね相弘メ申候且中共ニ皆居

宅ニ引籠り安住ヲ楽ミ罷在候

仲ケ間之財ト相成難儀至極

奉存候尤私共杯不如意之者故

道筋之茶屋泊り屋ニ近付進物ヲ

遣し差図ヲ請候様成年ハ私共

之力ニ及兼候或ハ近村杯其村々

ニ近付種々工夫ヲ以引付候手立

又ハ外且中ノ堂者参り候得ハ

別段ニ馳走仕廻り合候様之儀ニ而

兎角働次(第)之儀ハ私共無才

覚之身分ニ而ハ扱々難渋ニ

奉存候間何卒何卒堂者ハ面

之且中限りニ引請候様幾重

ニも奉願上候殊ニ同御支配之内

上州妙儀山は泊り屋故其止宿

勝手仕候得共近年は参詣

少ク榛名山は宿坊故且中

限りニ而夜中杯尋候儀難儀之

由幾重申候共其の檀中之外は

譬ひ其宿坊之名面ヲ不存候

者たり共聞而引請不申候得共

弥年増ニ御繁昌ニ相成候得ハ

石裂山迎も御繁昌の障り

ニも相成間敷と乍恐奉存候

猶亦堂者誠之婦依ニも無

御座門違杯ニ而参り候共御師ヲ

嘲シ種々術ヲ以手前迄婦依之

様ニ申食候様成儀も御座候而

其堂者エ対シ申候而も甚多

心賤しく相見へ恐多キ

御本坊様御外見と奉存候殊ニ

當年御番所御出役様がも

御下知御座候而書付奉差上候

儀も不奉恐入猶又去年中

奉願上候は仲ケ間相談を以

且中取極メ候上外且中之

堂者は請込申間敷趣ニ仕度

由一同納得仕候故願書四人

一同差上候所豊後御召被遊御

理解被

仰聞候ニ付豊後儀得心仕取極メニ

相成申候其儀之憚もなく

儀定相止度由之書付奉

差上候而は

御上様御番所様共ニ奉恐候

様ニ奉存候右様之始末御座候而ハ

此末石裂山之相治り候儀は

御座有間敷と奉存候次ニは

仲ヶ間熟談儀定仕候儀も

相止度存寄之儀は餘り

無人上之事ニ奉存候而面々

堂者多分ニ引請候上ニ儀定

を相止私共少分之堂者迄も

引取可申謀之様に相聞申候

左様御座候而は私共難儀至極ニ

奉存候間何卒御慈悲ヲ以儀定

之内 御上様之御差支ニ

相成候儀は 御下知次第相止

何卒堂者之儀ハ仲ヶ間熟

談納得に而持分ニ相成候面々

場所限り堂者止宿為被仕

候様幾重ニも奉願上候以上

荒井鞞負印

文政二卯年十月

湯沢権太夫印

御本坊様

御役所様

(十二) 卯年御番所出役持参

去ル卯年八月石裂山出役蓮性坊帰山之節

持参之書付

一 札之事

一 其方仲ヶ間中評儀之上當卯

六月中、檀家村分ニ相成候由

右ニ付是迄持来候檀家少々

入替ニ相成止宿之儀是迄通りニ

相成兼候ニ付他檀ニ相成候村々、

参詣ニ登山之、砌折角御尋被

下候得共當年より村分ニ相成

其御方私檀家ニ無之様相成候ニ付

旅宿相成兼候趣申聞候而も

年来此方エ参来候由被申

聞候而早速得心致兼候者間々

有之候由乍然仲ケ間中儀定

致置候事故旅宿も致兼且

参詣之者先方エは不参差

留り止宿ニ難渋致候堂者當御番所エ

旅宿差図之儀願出候節是迄

堂者望之方エ差図致遣候様

去ル五日御師中願之由直段ニ

旅宿請方と御差図之儀は御

免被下請方エ参り候而談合之

上止宿可致旨御申付被遣ヒ下候様

願ニ付参詣之者迄右之訊

申入候而も早速得心致兼候ハ、

被相尋候御師エ上置引合之

御師迄及掛合ニ其上弥得心無之

候ハ、從其方仲ケ間中之口

為儀定當御番所之差図次第

且は参詣堂者之望次第之方エ

為致止宿参詣之者エ決而為

及難渋申間敷候右之通り

相心得居参詣之者エ難渋

相掛申間敷と申一札為後証

當出役中迄差出置可申者也

文政二卯八月

右之通一同承知仕候

荒井靱負印

湯沢新太夫印

湯沢權太夫印

湯沢藤太夫印

湯沢豊後印

御番所様

覚

下総国葛飾郡

西井村一件

一 藤太夫方エ参詣ニ参り候處

靱負方ニ而手前且中之由ヲ申

堂者殊之外六ヶ敷御座候に付

参詣不相成候間藤太夫方年

行事權太夫方エ相談ニ及候處

彼是利解ヲ申町宿へ下ヶ置

何方カ御番所様御手形差出シ

候哉權太夫方相頼ニ而藤太夫

方先達而相頼参詣斗り無據

為致差帰シ申候

一 同国同郡牧ノ地村一件藤太夫

方へ参詣参り候ニ付仲間一同

帳面相改メ候所何方ニも無之候ニ付

藤太夫方ニ而堂者ヲ座敷迄上ヶ

素麵酒杯出し御山へ遣可申と

存候所エ靱負方ニ而且中之由ヲ

申殊之外六ヶ敷相成候得共何

連跡々ニ而利解相訳ケ申候筈ニ而

御山為致相帰し申候猶又当月

七日晚隣村之仁ヲ以右村名主カ

便り有之候ハ、靱負方は是迄

聞而札請候儀無之由以来藤

太夫方へ参り申度由申遣候得共

是以難儀ニ奉存候

一 水戸那珂郡栗ノ倉村一件靱負

ニ而且中之由ヲ申藤太夫方へ

参り是も殊之外六ヶ敷御座候

是以牧ノ地村と同様之始末ニ而

難儀仕候

一 當国都賀郡左関村一件藤太夫方エ

両参り候所靱負方は且中と

申而是迎も同様之六ヶ敷ニ付

参詣之者 御番所様エ御願

之上藤太夫方へ被仰付候ニ付

参詣為致候所靱負方ニ而殊之外

藤太夫エ不足ヲ申候所又候右

左関村は藤太夫方へ老人参り候

處右不足ヲ申候ニ付靱負方へ

人遣し候所唯今此方は迎之

者遣可申と申来り候ニ付相待

居候得共右之通り六ヶ敷故参詣

之者殊之外立腹ニ而村内ニ

帰り得と致相談可申と申

藤太夫方は参詣不致帰り申候

右は何連左之通り御座候以上

(十三)

辰五月廿七日

御納戸エ相達書付

石裂山一件尋之事

一 古来より檀方之儀ニ付被

仰渡之定ニ而も有之候哉在番之節承り  
置も有之候ハ、可申聞事並御番所ニ  
掟書も無之哉之事

いろ印

- 一 文政元寅年五月社人四人が差出し  
願書当部屋書留ニ有之候右願書は豊  
後老人不得心ニ付致同意候様ニと申願ニ  
相見候右之己前ニ村分議定仕度と申  
願書差出有之候哉若右之願書差出  
書留有之候ハ、写取可差出事

は印

- 一 右寅五月差出し願書先役が差戻候節  
如何様ニ取扱申渡候哉並取扱候もの名面  
可書出事

に印

- 一 豊後不得心ニ付役人が理解申聞同意候由

願書ニ相見候右は誰より理解申聞  
同意為致候哉理解之申聞方何様ニ申  
聞候哉之事

ほ印

- 一 村分取極之儀議定連印帳末ニ文政  
元寅年五月願之通被 仰付候間取極メ  
候旨相見候右は先役が何等之儀も不  
申渡願書差戻候所右様相認候儀  
甚不埒ニ存候万一會所ニ而申渡違之儀  
は無之哉得と相糺可申聞事

へ印

- 一 村分議定帳面出来候は去卯年六月  
と相見候其節右帳面を以届出候哉  
之事

と印

- 一 去卯年八月中豊後藤太夫新太夫  
より願書差出候後吟味中堂者取

扱は如何申渡し置候哉之事

ち印

一 右の趣廉々書面を以可申聞事

辰

五月

一 右答書差出候也御納戸持参尤此方之

尋書廉々認次エ小書ニ而答書左之通ゆへ

略記ス尤廉々いろは付之通答出候事

い

御答此儀は承知不仕候

ろ

御答御番所ニ掟書と申もの無御座候

御山入口高札並浄火堂には御座候

は

御答願書は社人四人之差上候様寛申候

右已前ニ村分ケ議定仕度由之願書

差出候儀は寛無御座候

に

御答此願書は御取用イニ不相成趣申聞  
相下ケ申候取扱星野祐助斎藤庄藏

ほ

御答豊後呼出申聞候は仲ケ間四人之

願有之趣意は其方老人仲ケ間相談ニ

相洩候ニ付熟談いたし候而可然哉理解

申聞候乍然不得心ニも有之候ハ、押而

申付候筋ニは無之勘弁可致旨申聞候

取扱星野祐助斎藤庄藏

へ

御答此儀一向取扱申渡候もの無御座候

且又別段願書等差出候儀も無御座候様

寛申候

と

五月廿九日

御答村分ケ議定出来候趣靱負権太夫  
 連印ニ而御届書差出候ニ付仲ケ間五人  
 連印ニ無之ニ付即刻相下ケ申候猶又議  
 定帳面答差出御届申上候儀は無御座候  
 取扱星野祐助齋藤庄藏

ち

六月二日

御答是迄仕来之通堂者取扱候様申聞候  
 取扱吟味役兩人高橋矢一右衛門齋藤庄藏  
 右之趣廉々書面を以御答申上候様  
 被 仰付即御答書奉差上相違無御座候

以上

源田專治印  
 齋藤弥助印  
 高橋矢一右衛門印  
 星野祐助印  
 齋藤庄藏印

辰  
五月

一 御納戸招呼石裂山社人一同明後二日召出  
 堂者村分檀方一件可相尋候間から相違  
 尤吟味所等之儀は去卯年六月山窪村  
 泉藏院召出之節之振合可然旨云々申達

一 四時御客殿四之間和尚御留守居出席  
 敷居内東ノ方エ御納戸兩人侍座敷  
 居外西ノ方吟味役兩人書役齋藤  
 加右衛門同東ノ方エ御勝手役高橋矢一右衛門  
 齋藤庄藏着座板縁薄縁敷東之方  
 齋藤庄藏着座板縁薄縁敷東之方  
 御仲間頭濱野要藏罷出差引社人召出  
 使者之間前縁側エ御小人兩詰居社人着座  
 之時銘々名前御納戸読上年齡等  
 相尋之

石裂山社人

湯沢豊後

当辰五十八歳

足痛ニ付入湯罷越候間

荒井靱負

□□遺之今日ふ参也

湯沢権太夫

当辰五十三歳

湯沢新太夫

当辰四十五歳

湯沢藤太夫

当辰五十一歳

右御留守居尋之次第其方共仲ケ間去

年中迄及争論追々願書数通を以願

出三人与兩人双方エ立別れ願之趣意

今日相尋候は其発端之処尋候也右は

石裂山参詣堂者之儀ニ付仲ケ間申談を以

近村はふ及申諸国村々在町日本国中

配分いたし定檀方ニ取究候事より及

異論候段右は日本国中割付定檀方ニ

取極候儀はふ容易儀殊ニ

上エ願上候儀ニも無之檀方之向ト熟談

いたし候儀も無之仲ケ間五人のもの一□

之外答を以勝手我儘ニ割付候義甚

ふ束之事ニ候勿論一時寅年五月中右

檀方村分ケ取究候砌豊後老人ふ得

心ニ付同意候様仕度と申願差出候儀ハ

此方書留ニも有之候得共右之願難取上

筋ニ付其節願書差戻候然ル處仲ケ間

儀定帳面之末エ從

御本坊様被仰付候ニ付儀定之趣認相見

ふ届之事ニ候右いつ連エ願上候や縱令

願上候而も国中之儀容易ニ被仰付候事ニも

無之儀殊ニ豊後老人ふ得心故同意候様

致度と申願書もふ取上差戻候處

御本坊迄被 仰付候段帳(書)面ニ認候儀

如何相心得候や之旨云々相尋候處

一同奉恐入候旨其節豊後申口私儀は

一昨年願書差出候節四人が如何相認

差上候哉もふ奉旨藤太夫エも其節

申聞候儀ニ而右從

御本坊様が被仰付と申文面等も如何

旁延引と奉存候得共一同仕候様新太夫

勤々候間同意仕候由右申口一通りは尤

之様ニも候得共致同意連印いたし候は

如何之心得ニ候や首之代り二も成候印形

容易ニは調印成かたき管調印は矢

張同意也扇動は兎も角も議定帳エ

調印候段ふ罅之趣叱候処五人一同誠ニ

奉恐入申訳無御座候段申答左候ハ右

被仰付候筋ニも無之候処從

御本坊被仰付候趣認仲ケ間手切を以

右様之儀定いたし候段全心得違ニ候

哉尋之所心得違仕奉恐入候旨申答

右心得違之段口書印形申付候間一先

下り候様申渡相下ケ口書取調又復

呼出一同平伏

石裂山堂者之儀ニ付仲ケ間手切を以村分

檀方帳取究其上願立も無之被

仰付も無之所從

御本坊様被仰付候旨相認重々ふ罅

之至ニ付急度御咎も可被仰付儀ニ候処

上之御憐愍を以右諸国村分檀方取

究帳ふ残此度御取上被 仰付候段申渡

候處一同敬承之旨此時口書一通り読

為聞候 吟味役祐助

役之

差上申御証文之事

一 石裂山參詣堂者之儀ニ付去ル文政元寅年

社認仲ヶ間一同熟談仕近国之町宿村は

ふ及申遠国ニ至迄日本國中無残所銘々

檀方ニ配分取極連印帳為取替仕候處

去卯年夏中より右取究議定之儀ニ付

仲ヶ間五人之内三人と兩人ニ立別れ双方及

隔意去秋中より度々奉願候ニ付則此度

御糺ニ相成候處日本國中檀方ニ配分候儀は

容易事ニ而縦令願上候而も難被

仰付筋ニ御座候処願立茂ふ仕唯仲ヶ間

相談ニ而配分取究候段ふ埒之至ニ被

思召候旨蒙 御吃一言之申訳無御座

奉恐入候尤寅年五月仲ヶ間相談之節

豊後寺人ふ得心ニ付同意候様仕度と申

願出奉差上候処右願書御取上無

御座御差戻ニ相成候得共豊後同意仕

候間從

御本坊様被 仰付候儀と心得違仕五人一同

熟談之上村分ヶ配分議定連印帳為取替

仕右帳面之末ニ從

御本坊様被 仰付候旨相認候条此度

御糺ニ相成一同難申訳立一言之申開無御座

奉恐入候會心被 仰付候儀ニ無御座候処心

得違仕候儀ニ相違無御座重々ふ埒ニ付

急度御咎も可被 仰付處格別之以

御有免右諸国村分ヶ檀方配分連印帳

ふ残此度御取上ニ相成候旨被仰渡一同

承知奉畏候仍御請証文差上申候処如件

石裂山社人

湯沢藤太夫印

湯沢新太夫印

湯沢権太夫印

荒井靱負印

湯沢豊後印

御本坊

文政三辰年六月二日

御留守居

御役所

右読畢而書役受取之御勝手役人エ渡之

社人銘々之印形差出御勝手役調印調印庄蔵役之

次御留守居御口達

右議定連印帳元此帳面出来候より

双方及び異論願書等も差出候事ニ候得は

右帳面此度御取上ニ相成候上は双方が

願書数通ふ残相消へ願之趣意潰ニ

成候間其段一同可相心得乍併向後堂

者参詣之節相互猥ニ引付候様ニ而は取

締不宜且は争論之基ニ候間以来参詣

堂者取扱止宿等之儀並定檀方之定等

取調之上可申渡候間旅宿エ下り控居候様

被 仰渡一同敬承退去

同四日

一 御納戸相招石裂山社人エ堂者一件

取締明五日可申渡旨云々申談

同五日

一 御客殿四之間エ去ル二日之通出席

石裂社人召出参詣堂者一件

條目申渡請書印形申付勝手次第

掃村候様申渡委細御用日記ニ留置

一 右ニ付去年中加蘭村下沢村両村

より差出候願書は願方名主等召出

相下ケ猶認替候上社人方ト一同ニ願

出候用可致旨申渡候様云々御納戸

役エ相達願書両通差戻候也

一 此老帳之外請書等書付老包有之

▼庄司前学長が昭和六二年三月末日で退任した。これを受けて、石川教統新学長（前東京立正中高校長）、藤井教正新常務理事が就任された。教員間では、学生急減期に向けてカリキュラムの検討や学内体制のあり方について討議が進められている。この成果も近い将来には明らかにされよう。

▼教育研究条件と教職員の待遇改善を求めて、教職員組合が六三年二月に結成された。これまで組合のない状態で、低い給与や恵まれない教育研究条件に置かれてきたが、これも解決されて行くことであろう。

▼これまで二回にわたって本紀要に寄稿下さった。非常勤講師の難波利夫先生が一月一〇日に他界なさった。研究合評例会の席上で、バーンズの詩を朗唱なさった明るい姿が思い出される。ご冥福をお祈りします。

▼短大は、研究と教育の場である。一部には「研究」を無視する考えがあるが、研究なくして教育はありえない。教育の充実は不断の研究活動の積重ねによってのみ可能である。研究・教育に介入し不当に干渉したりすることは許されるべきことではない。学問の自由・研究教育の自由は、大学自治の根幹をなしており、教育の現場に立つ者は、この基本姿勢をつらぬき、つねに研究と教育を推進してゆかねばならない。「紀要」は、研究・教育の存在証明のひとつである。「無理が通れば道理がひっこむ」「もの言えは唇寒し」といった悪しき風潮を打破し、真実の声や研究・教育の主体的努力を「紀要」に反映してほしいと望んでいる。

▼こうした期待と使命を果すため、夜を徹して編集作業を行い、漸くこのたび刊行の運びになった。本号では、論考・翻訳などに関するものを所載した。繁忙の中にもかかわらずご執筆いただいた各先生に感謝したい。このたびは誌面の都合で他の英語関係の論文を掲載できなかったが、英語学・英文学などについての研究・教育も進められているので、「混沌」の現実と戦いつつ、次号に発表していただけるものと大いに期待している。

---

東京立正女子短期大学紀要 第16号

昭和63年2月20日 印刷

昭和63年2月29日 発行

編 集 東京立正女子短期大学紀要編集委員会  
印刷所 株式会社 三 協 社

〒164 東京都中野区中央4-8-9

T E L 03(383)7281(代)

発行所 東京立正女子短期大学

〒165 東京都杉並区堀ノ内2-41-15

T E L 03(313)5101~3

---

**THE JOURNAL  
OF  
TOKYO RISSHO JUNIOR COLLEGE  
FOR WOMEN**

---

**No. 16**

**February 1988**

---

**CONTENTS**

To Build Up a Personality and Religion .....	ISHIKAWA, Kyōtō	1
The Self Sacrifice of <i>Asura</i> in Kenji Miyazawa's Nursery Tales .....	ISHIKAWA, Kyōchō	20
◇Translation		
The Taumau Marriage of a Maori Woman —From Ann Salmond's <i>Amiria</i> — .....	SAKURAI, Mariko	49
◇Report		
Court Records —On the Struggle for Devotees to Mt. Ozaku in the Late Edo Period— .....	KAMIYA, Takehiro	92
◇Editors' Notes .....		138

---

**Published by  
Tokyo Risho Junior College For Women**

---

**TOKYO JAPAN**

**ISSN 0386-7161**